

東京立正女子短期大学紀要

第 22 号

目 次

文化と外国語教育

- サビア・ウォーフの仮説に基づいて…………… 田 島 富美江 (1)

強勢のメカニズムに関する日・英語の比較研究

- リスニング活動との関連において…………… 中 岡 典 子 (21)

- 'Cram' —— θ 役割と統語構造についての考察…………… 奥 坊 光 子 (47)

- 発達に関する山鹿素行の考え方—分析(1)…………… 飯 田 宮 子 (58)

ネバーランドのマイノリティ

- “The Buddha of Suburbia”と“The Swimming
Pool Library”における階級、人種、セクシャリティ…………… 鈴 木 順 子 (69)

あ・い・だの詩学

- サミュエル・ベケットの『名づけえぬもの』(承前)…………… 山 田 田津子 (109)

- 日蓮聖人「十一通御書」の考察(承前)…………… 西 脇 哲 夫 (123)

キリシタンの終末論

- 島原・天草の乱を中心にして…………… 紙 谷 威 廣 (160)

- 《編集後記》…………… (90)

1 9 9 4

東京立正女子短期大学

文化と外国語教育

——サピア・ウォーフの仮説に基づいて——

田 島 富美江

はじめに

言語と文化の関係が、語学教育において重視されている今日、筆者は前稿⁽¹⁾においてこの両者を対立するものとせず、言語は文化の重要な構成要素の1つであることを、改めて確認した。また、いかなる言語も、その言語集団の創造する文化から逃れることはできないから、外国語（英語）学習は「異文化との接触」であるという意識のもとに学習することが重要であることも提言した。

「言語」と「文化」の関係をより詳細に考察するために、どうしても避けて通ることの出来ない存在として「サピア・ウォーフの仮説」(The Sapir-Whorf Hypothesis: 言語相対論仮説)があげられる。この仮説は、部分的には英語教育に応用され(例えば、語彙に関する日英語対照研究の分野などで)、研究が進んではいるが、まだ不明な点も多く残されている。「極端に過ぎる」ということと、新しい文法理論の台頭で顧みられなかった時期もあったが、近年、再び浮上してきたこの仮説を検討し、大学・短大レベルの英語教育・学習の向上を図りたいと考える。

この仮説自体は、両氏の名の下に直接発表されたものでなく、その主張に共通性があり、1つの説をなすものとして、後の研究者によって命名されたものである。「言語」と「文化」の関わりを、先にサピアが実証的に検証した見解を、彼の弟子であるウォーフが継承し、更に明確な、やや極端に過ぎるといわれるような方向づけをしたことから、「ウォーフの仮説」(The Whorfian Hypothesis)とも名付けられている。この仮説の基本的概念を一言で述べるに

は余りにも複雑であり、その主張に曖昧な部分も随所に見られるが、ここでは「言語が思考を決定する。」とまとめ、後に詳述したい。

いかなる仮説、理論も同様のことが言えるであろうが、この仮説もその例にもれず、肯定、否定、両論著しいものがある。現在までのところ、常識的にみて文化が言語に影響を及ぼすことはあっても、言語が思考を決定することなどあり得ない、というのが批判の大筋である。しかし、純粋な言語学的議論はさて置き、英語教育への応用という観点から検討すると、上記の批判だけでは片付けられない面も確かに存在すると解釈できる。

本稿の目的は、サピアの見解も参考にしつつ、ウォーフの主張を中心に「サピア・ウォーフの仮説」を概観し、その仮説の肯定的な面を取り上げ、今後の英語教育改善に向けて、活路を開こうとするものである。

1. 「サピア・ウォーフの仮説」について

言語は、単に伝達の役割を果たすだけではない。各言語は、それぞれ特有の方法で言語外の事象を区切り、我々はそれに基づいて外界を経験する。我々の言語活動には、常に心理的要因が作用し、その場に適したことばの選択がなされている筈である。この選択の仕方は、各言語集団の言語習慣の上に築かれ、方向づけられる傾向があり、その集団の成員の思考を決定し、それに見合った文化を形成していくのである。従って、言語が異なれば、物の見方が異なり、互いに理解し合うことは不可能である。

以上が、本仮説の中軸をなす主張である。言語学者・心理学者であるサピア (E. Sapir, 1884-1939) は、文化人類学者であり、エスキモーが雪の種類や状態を細分化し、それぞれに名称を与えているがそれらを総称する「雪」という語が無いことに気づいたボアズ (F. Boas, 1858-1942) に大きく影響され、S A E (Standard Average European) の研究から入ったが、思うような結果が得られなかったため、構造の全く異なるアメリカ・インディアン言語研究

へと方向を転じ、本仮説に関する多くの業績を残している。ウォーフ (B. Whorf, 1897-1941) はサピアと会う前には、MITで化学技術を専攻し、火災保険会社で検査官として勤務するうちに、言語と心理の関係に興味を抱くようになった。サピアと同様、アメリカ・インディアンの言語研究に進み、イエール大学でサピアを師と仰ぐことになる。しかしながら、ここで共同研究がなされたわけではないのである。

以上のような経過を辿って世に現れた本仮説は、その主張に対し直接彼らと討議がなされたわけではないから、彼らの主張に関しては不明な点も多く残されていることは事実である。従って、現在我々がなすべきことは、それをいかに解釈し応用するかということであろうと思われる。

サピアは、言語というものをさまざまな経験を表現する手段であると同時に、我々の経験を規定する働きを持つものであると考えている。「科学としての言語学の地位」(1929)と題する論文は、彼の主張が最も明確に表わされたものといわれているが、その中で彼は次のように述べている。少々長くなるが、後のウォーフにも関係があるので敢えて引用したい。

言語は「社会的現実」に対する指針である。ふつう、言語というものは社会科学の研究者にとっては重要な意味をもつとは考えられない。しかし、それは社会の問題やできごとについてのわれわれのすべての思考を強固に条件づけているのである。人間は客観的な世界にだけ住んでいるのでもないし、また、ふつうの意味での社会的活動の世界にのみ住んでいるわけでもない。人間は自分たちの社会にとって表現の手段となっているある特定の言語に多く支配されているのである。基本的に言語を使うことなく現実に適応することが可能であると考えたり、言語は伝達とか反省の特定の問題を解くための偶然の手段にすぎないと思ったりするのは全くの幻想である。事實は「現実の世界」というものは、多くの程度にまで、その言語集団の習慣の上に無意識的に形づくられているのである。……比較的単純な知覚の行為ですらわれわれの予想以上に、語という社会的なパタンに左右されているものである。例えば、10本余りの違った形の線を引いてみ

ると、それが 'straight' (真直ぐな) とか 'crooked' (かぎ型の) とか 'curved' (曲った) とか 'zigzag' (ジグザグの) とかいったような範疇に分けられるというように知覚されるが、これは言語表現自体が分類を暗示する力を持っているからである。われわれが聞いたり、見たり、あるいは経験する際、大体一定のやり方があるが、これはわれわれの共同体の言語習慣がある種の解釈を前もって選択させるからである。(サピア著・池上訳 1970, pp.2-3) (傍点・下線筆者)

さらに彼は、「原始言語における概念範疇」(1931)の中で、言語の成立とその機能について、「(言語は) 経験から引き出されたものである。しかし、ひとたび経験から抽出されてしまうと、言語の中で体系的に手を加えられ、その結果、……経験に対して押しつけられるものとなるのである。これも、言語形式というものがわれわれの外界の見方に対して、専制的な支配権をもっているからに他ならない」(サピア著・池上訳 1970, p.4) と述べている。1929年の論文には「ある種の解釈を前もって選択させる」とあって、我々がことばを使用する際の心的過程の存在を考慮に入れていることが理解できるが、2年後には「専制的な支配権」と、語調も強さを増し、本仮説に対する強い確信があることを窺わせるものである。

冒頭にも述べた通りサピアは、ポアズに師事しており、言語が外界の事象を、その言語特有の方法で分割するという考えには当然肯定的ではあるが、それは主として語彙との関連においてであるようだ。1929年の論文においては、文法と文化の関連にも触れている点が見られるが、強力な主張には至っていない。但し、サピアの言う語彙は、ポアズの発見に見られるような環境の違いによって異なる区切り方をする狭い意味での語彙ではなく、もっと広い範囲にわたる民族の物理的、社会的環境を反映するものを対象としているようである。

サピアのこのような主張がウォーフに継承され、さらに強力な(といわれる)理論へと発展するのである。ウォーフは、サピアのもとで研究を始める以前に火災保険会社に勤務し、発火や爆発の原因究明にたずさわるうちに、言語使用者の心理の問題に関心を抱くようになった。その結果、火災が物理的に発生す

るというより、「言語的意味」が原因になる場合がしばしばあることに気付いたのである。即ち、場面に対して与えられた名称や言語的記述に対する人々の解釈のしかたと、それに基づく行動が火災の原因になるというものである。例えば、「ガソリン缶 (gasoline drums)」の貯蔵所の近くでは、行動に充分注意が払われるのに対し、最も危険な「空のガソリン缶 (empty gasoline drums)」の貯蔵所の近くでは、行動は不注意なものになる、何故ならば、「空の」という語は、必然的に危険がないということが暗示されてしまうために、禁煙はなされず、吸い殻の投げ捨てさえも行われる、とあって、言語と心理が密接な関係にあることに気づいている。

「習慣的思考・行動と言語の関係」(1941)と題する論文でウォーフは、1929年のサビアの論文の一部(本稿 pp. 3-4, 筆者引用中の下線部)をその冒頭にかかげ、自らの考えがサビアの考えに共鳴することを明らかにすると同時に、我々の言語使用が、いかに言語形式からの類推に依存し、それが一定の型の思考様式・行動様式へと導くものであるかということを強調した。そして一連の論文の中で「ウォーフの仮説」(The Whorfian Hypothesis)という名で呼ばれるまでに、サビアの言語観を発展させていくのである。

その1つに「文法」の問題があげられる。語彙に関してウォーフは、サビアの考えと一致しているが、1941年の論文の中で、概略次のような主旨のことを述べている。「言語が人間の心理に影響を与え思考や行動を規制するという考えは、単一の語や句に限らず、もっと広範な文法範疇のパターンにまで当てはまる。語彙が人間の認識や行動に及ぼす支配力が、もっと大きな文法的カテゴリー(例えば、数、文法的性、時制、態など)になると、その支配力はさらに強力なものになる。しかし、文法的カテゴリーは、語彙のように我々の経験の一部との関わりではなく、はるかに広範な経験体系全体との関わりの中で経験のまとめ方を決めるものであるから、その支配力を測ることは非常に困難なことである」(キャロル編・有馬訳, 1988, p. 154)として、アメリカ・インディアン語について数多くの分析を行って自説の裏づけとしている。

例1. 数量の表わし方について

SAEでは、普通名詞、物質名詞に分けられ、前者は単数・複数の区別

があるが、後者のように一定の形の無いものは、物体を入れる容器の名称や、物体の形を示す名称によって数量を表わしている。ホビ語では、普通名詞、物質名詞の区別が無く、すべての名詞に単数・複数の区別があり、「水」は「(水という)物質」ではなく、「コップの中の水」は、「水たまり」の「水」とは異なって、全く別の名称を持っている、ということである。

例2. ショーニー語のまとめ方

(1) I pull the branch aside.

(2) I have an extra toe on my foot.

SAEの感覚では、上の2文は全く関連性は認められないが、ショーニー語ではそれぞれ、(1)は「…枝を、股状に広げる。または、さらに広げて切り離す。」(2)は「…足の指から、木の枝のように股状に分かれたもう一本の指がある。」を表わしていて、何によって、何に関して股状になるかという所に共通点を見出し、まとめているという。

ウォーフの論文中に述べられている他の多数の例をみても、語彙に関する外界の任意な区切り方は、文法的カテゴリーにも当てはまることは容易に認めることができる。

本仮説をウォーフの仮説と呼びしめたもう1つは、彼の強い調子の記述があげられる。「言語は思考を規定する。」これが、言語相対論の主張するところであるが、実はサピアも確かに同様の主張をしている。サピアに関しては、冒頭に引用した部分からもその一端を見ることができる。また、ウォーフに関しては彼の論文の中の至る所で、その主張に行き当たるが、その一つを引用しておきたい。「……誰一人として絶対公正な自然記述を行う自由はなく、……ある一定の考え方に拘束されている。我々は、世界を見る人間の言語学的背景が同じであるか何らかの方法で統一されないかぎり、物理的に同一世界を見るすべての人間が、必ずしも、同一世界観に導かれるとはかぎらない、という新しい相対性原理に導かれるのである。」(キャロル編・有馬訳、1988、p.233)

では、何故ウォーフの主張はサピアを越えて、「強力な」とか「極端な」として受け取られるのであろうか。もう一度、冒頭のサピアからの引用に戻って

みると、そこには筆者が傍点を付した「多くの程度にまで」とか「大体」という表現が使用されていて、それらがサビアの主張の程度を、ウォーフのそれに較べて、かなり和らげていると解釈する研究者も多いのである。一方、ウォーフの記述には、自らの主張を和らげるような語句は、サビア程使用されていないから、それだけその主張は、読者にとって、強烈に受け止められるのであろう。この点が、「ウォーフの仮説」が極端視される所以であると思われる。只、両者共逆の場合も時に見られるため、彼等の主張は曖昧であるとの批判もしばしばなされていることは事実である。

以上、ウォーフの主張を概観してきたが、サビアとの違いが鮮明に表れた部分として、

- ① 語彙のみならず、文法的相違も文化と関連性があること。
- ② 各個別言語は、その言語を習慣的に使用する人達の習慣的な思考を決定することを、サビア以上に強力な表現で主張したこと。

を挙げることができる。

II. 「ウォーフの仮説」の解釈

前章の最後に、「ウォーフの仮説」の特徴を2点挙げたが、これらは、それぞれ独立したものでなく、1つの連続体と考えるべきである。何故ならば、言語は各言語独特の方法で任意に区切られるが、それが、その言語話者の思考を規制するというのが、ウォーフの一貫した主張であり、言語と思考と文化の密接な関係を強調しているのである。論を進めるに当たって便宜的に2つに分けたが、前者は比較的肯定的に受け容れられ、すでに語彙の面での研究は、かなり行われている。しかしながら、後者は、極端にすぎるという理由で、否定的、批判的な見解が多く、仮説そのものに否定的な評価を下す研究者は、実にこの点に疑問を抱いているのである。

批判論者の一人であるペン (J. Penn) によれば、サビアにも見られること

であるが、と前置きし、ウォーフが、言語と思考を同一視しているところに、その主張の極端さが表われていると分析している。また、前章でも述べた通り、彼等の仮説の表現法にかなり曖昧性が著しいため、彼女は、この仮説は次の2通りに解釈できるという。

① 「思考は言語に依存する。」という強い仮説

② 「言語は思考に影響を及ぼす。」という弱い仮説

このいずれであるかが明確でないことを問題としている。①は、言語と思考を同一視しているところから、理論的にも受け容れられず、いくつかの検証結果も、否定的である。②は、理論的には理解できるものであり、検証結果には肯定的なものが得られている。しかし、これらの相反する結果は、互いに矛盾したのではなく、いずれも「ウォーフの仮説」の検証であって、その対象となる仮説が相違していたのだ（ペン、有馬訳、1980、pp. 8～15）と鋭い分析を行っている。

言語と思考の問題になるとその解釈はさまざまであるが、これは「思考」をどのように捉えるかの問題であろう。ウォーフには確かに言語と思考を同一視している表現がある。言語が無ければ思考は不可能であるという強い主張も、彼の論文の中にはしばしば見られるところであるが、言語と思考の関係については非常に哲学的な問題であって、本稿では扱いきれる問題ではないと考えるものである。

一般的に言語が思考を規定する面は確かに見られる場合がある。ことばが存在することによって、そのものが認識できる、という場合などはその典型的なものと言えるであろう。色彩語の研究は有名であり、ことばとして存在している色彩は認知できるが、ことばとして存在しない色彩は認知できないことは、言語と思考の関係が有ることを認めてよいであろう。しかし反対に、日本語には単数・複数の区別が無いから、その区別を有する言語話者に較べて、日本人は数の観念が無い、という見解も公にされているが、これは明らかに間違いと言える。何故ならば、日本語には、そのような表現形式が無いために、言語にして表わさないだけのことで、必要な時には、正しく表現できることを考えれば、言語と思考は同一でないことは容易に理解できる。

以上のように、言語と思考についての解釈は揺れ動いている。従って、「なにぶんにも曖昧で、形式化するのが困難なため、厳密な科学的証明は、今のところ不可能」(本名, 1977, p. 260)である、とか「現在までのところ、サピア・ウォーフの仮説を全面的に肯定するか、または全面的に否定するか、そのいずれもできないというのが結論のようである。」(サピア著・池上訳 1970, pp. 251-252)としておくのが妥当であるといえるだろう。

では、このような否定論、曖昧論のある仮説のいかなる部分が外国語教育と関わりを持つのであろうか。これまで長年にわたり行われてきた文法規則の暗記、辞書の意味のみに頼る解釈、また、文型の反復や、コントロールド・カンヴァセーション等のオーラルワークによる学習、これらの効率の悪さから抜け出すために模索し、次第に重要視されてきたのが、認知理論であり、その1つの方法として、異文化を理解しつつ学習することを、教育の場に導入することであった。

サピアとウォーフは、勿論、外国語教育に言及しているわけではない。しかし、外国語教育との関連において、サピアの研究者である平林氏は、次のように述べていることから、本仮説が外国語教育と大きな関わりがあることを示唆している。

「今日サピアに代表される言語相対説は、ジュリア・ベンをはじめ、何人かの言語学者が否定しているが、著者は、しかし、サピアの言語相対説、特にその内の弱い仮説を強く支持するものである。言語による世界観の相違は、……実在するものであって、特に言語教育の場においては深く考慮しなければならない言語の大きな一側面である。……特に近年では言語相対説の内の弱い仮説は我が国では確かに支持されつつある。」(平林, 1993, pp. 204-205)

Ⅲ. 語彙・文法と文化の関わり

1. 言語と文化の関わり

しばしば「文化」ということばを使用したが、本仮説と外国語教育との関係の考察に入る前に、「言語」と「文化」の関わりについて明らかにしておく必要があると思われる。ここでの「文化」は、文化人類学における捉え方をその基本とするものである。幾多の定義が出されているが、築島氏の記述（築島、1976, pp. 14-48）を参考に筆者なりに次のようにまとめておきたい。

文化とは、学習によって受け継がれた、その地域社会固有の心理的次元を伴った行動様式の総体である。

つまり、目に見える行動様式に伴う思考様式も含めて、という意味である。総体とは部分の集まりでなく、1つの統一体であり、部分には見られない固有の性質を有する、全体的な統一体、構造体をなすものである。重要なことは「学習によって受け継がれるもの」という部分を我々は見落としてはならない。また、文化の中に言語を含めるかどうかについても、各研究者によって意見が異なるが、築島氏は「言語は文化を時間的、空間的に伝達する1つの大きな役割を演ずる」(p. 18)ものという理由で、この両者を、対立するものとして扱っている。

一方「言語」はその習得に、生得的な面も確かに見られるが、母国語の場合は明らかに、意識的、無意識的な教育と学習によって、その言語集団の言語という1つの構造体が獲得されていくのであるから、言語の習得は文化の構造の習得と同一型であると考え、言語を文化の中に含めることができると考える。

田島は、前稿（1993）において、両者の関係を図1のように図式化し、文化は言語を包含するものとした。いかなる地域社会においても、文化の程度の高低にかかわらず、言語はその中心に位置するものと考え。中心とは、その文

化を構成する最も重要なもので
 周辺への影響が大である、とい
 う意味である。即ち、言語が文
 化に影響を及ぼすこともあり得
 ることを示唆するものである。

ここで視点を言語教育・学習
 に移し、具体的に述べてみよう。
 我々が母国語を習得することは、
 前述の通り意識的、無意識的な
 学習によるものであるから、教

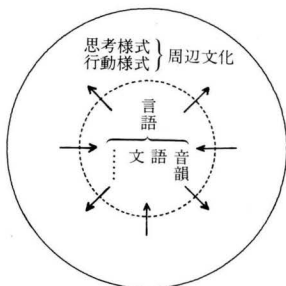


図1 文化の構造

授者（周囲の人間）は、自分の身につけた認識過程の形式を、学習者に強要することは明らかである。即ち、学習者が教授者と異なった語彙や文法を選択した場合には、教授者の長年にわたって習慣となった認識過程の形式を押しつけられる形で矯正がなされると考える。正しい語・句・文の選択法を身につけるべく、その言語の特定の方向に注意を向けるよう方向づけがなされるのである。

このような意味で、我々の日常の使用言語が、学習者の思考や知覚に何らかの影響を及ぼし一定の方向づけをしていることは理解できる。この母国語の学習を通して、その言語集団の成員が共通の認識過程の形式を習得していくに従って、彼等独特の思考様式と、それに基づく行動様式が形成されていく、と考えてよいであろう。換言すれば、我々の言語活動はすでに存在している環境の状況に基づき、外界の事象を固有の方法で切り取りまとめ、それを言語の構造体の中に組み込んでいく（図1の内側に向かう矢印）。しかしながら、或る面では逆に、言語が周辺文化に影響を及ぼすことも先に述べた通りである。従って、言語と周辺文化は相互に影響し合いながら、さらに大きな文化と言う構造体を形成していくものと解釈するのが妥当であろうし、言語が思考を決定するというウォーフの表現は余りにも強烈であるという批判は理解することができる。

2. 語彙と文化の関わり

初期の言語の発達過程は不明であるが、各言語集団における言語は、彼等の生活上の経験から生じたことは想像に難くない。農耕民族には、それに関連することばが生まれ、狩猟民族には、それなりのことばが発達する。また、どの地域においても、生活水準の向上のために特殊な道具が作られれば、それに名称がつけられ、そして、そこから芽生えた抽象概念にも名称がつけられていく。

では、いかなる言語集団にも共通の事象（自然現象の「雨」「雪」「山」「川」など）についてはどうであろうか。前述のボアズの“snow”に対するエスキモー語についての発見は、今日我々が、言語と文化を考察する原点としてよく知られているが、これは、エスキモーの社会において、雪のさまざまな種類や状態が、生活の中に深く入りこんでいるためである。

いかなる地域、いかなる言語集団であっても、共通に経験する自然現象ですら、それぞれの言語のやり方で外界に事象を分割し、命名しているのである。日英語を対照した例として、日本語の「肉」、英語の“rice”などは細かい説明の要は無いらしいであろう。いずれにしても頻繁に使う表現はそれだけ生活との密着度が高いから、「炊いた米」のように「形容詞＋米」の形の表現より、「ごはん」と語彙化する方が言語使用上便利であることは事実である。日本語の「群」もよい例であろう。これは、人や動物や昆虫に至るまで群をなしているものは、たとえそれが静かな状態でいようが、敵に襲いかかっているように、すべて「群」で表すことができる（押し合いへし合いの人の群、蜜蜂やバツタの大群、狼の群に襲われる、等）。これに反し英語には“group, troop”があるものの、それぞれの種類や状態にしたがって語彙化され、和英辞典にあるものだけでも35語にも達している。このような各言語によるまとめ方の相違は、名詞だけに留まらず、動詞、形容詞をはじめ、抽象語にも及んでいる。

やや背景の複雑な例として、「身につける」，“wear”をあげてみよう。

日本語	日本語	英語
纏う 羽織る 巻く, する (マフラー, 襟巻など)	はく	I <u>wore</u> black shoes, grey woolen stockings with blue turnovers, grey flannel shorts, a grey shirt, a red tie, a grey flannel blazer with the blue school crest on the breast pocket and a grey school cap with the same crest just above the peak.
	しめる	
	着る	
	かぶる	

既述の“rice”や「肉」, 「群」に類するものの区分は、目に見えるものの分類であって、比較的単純であるといえる。しかしながら“wear”はどうであろうか。左側の欄は英文には表れなかったその他の「身につける」意味の日本語である。英語は、「身につける」という意味で、体の部位や着け方に関係なくすべてを包含する“wear”1語で対応しているのに対し、日本語では数個の語によって使い分けている。体の最上部（頭）、上部、下部、即ち着ける位置、そして、締めつけるもの、ゆるやかに巻くもの、即ち、着け方の様子などのそれぞれが語彙化されているのである。これは、日本古来の社会構造から生じた人間関係の中に、上下関係を重んじる思考様式が根付いてきた結果であろう。例えば、人間の「死」や「妊娠」は身分の上下には無関係であるにもかかわらず、ことばでは使い分けがなされていることは事実である。この人間関係から来る上下意識が、その他の事象に般化され、「上」は高貴で美しいもの、「下」は卑しく、きたないもの、という概念が植えつけられて、「身につける」に対して、上と下のことばの使いわけが定着してきたものと考えられるがどうであろうか。

以上、僅かの例ではあるが、語彙に表れたまとめ方は、日英語によって異なっている。あるものは、逃れることのできない生活環境との密着度によって、またあるものは、その言語社会が創り上げてきた思考様式、行動様式の複雑な絡み合いが、それぞれの個別言語の背景となっていて、各言語間には1対1の対応が成立しないことは容易に理解することができる。

3. 文法と文化の関わり

上記の語彙と文化の関わりに対し、文法的カテゴリーという大きなパターンになると、さらに大きな支配力があると考えられるとウォーフは述べている。前の章において、ショーニー語の経験の分類を見たが、焦点を日英語間の問題として考察してみよう。言語間の文法上の相違とは、統語的パターンをはじめとし、数、冠詞、時制、態その他多くの項目があげられる。ここで日本語の統語の特徴である「省略」と、日本語にはことばとして存在しない「定冠詞」を取りあげてみる。

「省略」は、挨拶ことばなどは例外として、特に会話文によく見られる形式である。

「起きなさい。起きてちょうだい。」	“Get up. Get up, please.” ⁽³⁾
「寒いよ。」……「宿じゃもう起きていますのかい。」	“It’s cold.……Are the inn people up yet?”
「知らないわ。裏から上がって来たのよ。」	“I have no idea. I came in from the back.”
「裏から？」	“The back?”
「杉林のところからかき登って来たのよ。」	“I fought my way up from the cedar grove.”
「そんな道があるの？」	“Is there a path in back?”
「道はないけれど、近いわ。」	“No. But it’s shorter.”

上例でも分かるように、日本語では主語を欠いた文でも、意味の伝達は充分可能である。これは、コンテクストの共有度が高ければ、送り手は、受け手が充分推測可能であると確信した上で使用される表現法であり、その確信が無ければ、必ず主語を置いて意味を明確にする。受け手は、コンテクストから判断し、推測することによって意味を構築し、コミュニケーションを成立させていくコンテクスト依存型である。これは、長年にわたり、稲作農耕民族として生

活してきた結果であると解釈される。家長を頂点とする〈家的〉な構造体（中根，1967，1972）の中での人間関係に基づく文化形成の段階で築かれた，日本人の性格の特徴，即ち，和の尊重，個の減却，控え目な行動などが，言語行動に反映したのと言えよう。一つには，日本人の言語習慣として，できるだけことばを少なく，簡潔に述べるのが，洗練された表現として価値づけられてきた結果定着したものであろう。

一方英語では，家庭内や最も親しい友人などを除いては，主語（行為者，無生物，虚構の主語）を欠くと，文として成立せず，たとえ主語が何であるかを，コンテキストから充分推測するに足る場合でさえも，必ず言語化することが義務づけられるのである。これは，「コンテキストがありながら，何らかの理由によってその共有がむづかしく，コンテキストをあてにすることが困難な場合」（有馬，1990，p. 114）に用いられるコンテキストフリー型としての表現である。コンテキストの共有が困難な場合として有馬氏は，科学技術の発達による分業，異文化の交流，広大な地理的条件，異民族との共存などをあげているが，それらを含めて，次のような理由を挙げることも可能であろう。

欧米の社会では，キリスト教の影響が強く精神的には個人の自由，平等に価値観を見出し，個は共同体に埋没するのではなく，個としての権利を付与されていると考える。従って，個と個は連続体ではなく，それぞれ独立したもの，という意識が強力である。また，生活環境面から見ると，遊牧生活を基盤としているため，移動生活，異民族，異文化との交流，それに伴う生活様式の多様化などにより，異質な者同士の対立意識が芽生え，有馬氏の述べるように，コンテキストの共有度が低く，積極的で，時には攻撃的に相手に働きかけ，自己の存在をアピールするため，執拗なまでの自己主張を必要とするのである。そのためには，時には誤解が生じるかも知れないような，相手の推測に委ねず，たとえ冗長度が高くなっても必要な語をすべて使って，正確に，余すところなく物事を伝えようとする表現法を使用すると考えられる。

このように，英語はコンテキストが無くとも意味が伝達できるような表現法であるから，コンテキスト依存型の省略形に慣れた我々日本語使用者には，非常にしつこい感じを抱かせ，不自然に聞こえることは事実である。例えば，外

国人のグループに自己紹介をさせた場合に、全員が「私は」を必ず最初につけているのを聞いていると、苛立ちさえ感じさせるものである。

「定冠詞」も、英語学習者を悩ませる文法項目の1つであるが、ここにも英語話者の経験や概念のまとめ方や認識過程への影響をみることができる。即ち、いかなる経験に“the”が付き、いかなる事物に“a (an)”を使用するか、また、いかなる時にそれらが不要かは、語彙レベルの分割法よりも、さらに大きな経験体系全体に関わるものである。

冠詞の使用法は非常に難しい問題であり、数えきれないほどの規則がある。しかし、定冠詞を例にとるならば、最も基礎的な学習事項は、「特定の事物」即ち、コンテキストを共有している送り手、受け手の双方が了解している特定の事柄や物に、必ず使用することである。

Charles, who was *the* oldest and their accepted leader, waded downstream to *the* place where their boat was tied up in *the* shelter of some overhanging bushes. Then he rowed *the* boat back to *the* shallow water near *the* bridge, where *the* boys loaded it with *the* provisions, blankets and other things which they were taking.

上の文に関する限り、日本文は殆ど「その」は不要である。しかし、“the”の用法が分かっているれば意味は明瞭である。また、学生が「その」抜きで訳したとしても、この程度の具体度の高い文であれば、教師は彼等が定冠詞の用法を十分に了解していると解釈するであろう。しかし、この点を確かめるために、内容を日本語で与えて英作文を課してみると、“the”の用法に関する理解度が一目瞭然である。日本語では意味を明確に伝える時だけ「その」を使用し、使用しなくても意味の伝達が可能な場合は特に使用の義務は無いのである。それは前述の「主語の省略」と同様、コンテキストから充分推論することができ、また、相手に推測を委ねる日本人の心理の表れということもできよう。しかしながら、深層では完全な意味内容を掴んでいるのに、「その」を明確にことばとして表現しない日本語につられて、表層では“the”を脱落させてしまうのであるが、英語でのコミュニケーションにおいては、この程度の“the”の正

確な使用法の知識が必要なのである。1ヶ所でも“the”を“a”に変えたり“the”抜きにしたりするとどうであろうか。正しい意味が伝達できず、今度は逆に、英語話者を苛立たせる結果となるのである。この、英語における定冠詞の最も基礎的な使用法に関しても、「省略」の項で述べたことと同様、長年にわたって構築されたそれぞれの国民性が反映された表現法であると説明することができるのである。

これらのことから、我々は無意識のうちに、母国語という「言語に染まって」(外山, 1976, p.50) いることを改めて認めることができる。

IV. 英文法学習と文化の学習との融合

「サピア・ウォーフの仮説」を「言語は認識過程に影響を及ぼす」という弱い仮説と解釈することにより、各個別言語には、語彙のみならず、純粹に言語学的問題とされてきた文法的パタンにも、それなりの文化的背景があることを理解することができた。ことばは環境の影響による狭い意味での分割法から、その言語集団の行動様式・思考様式など、広範で複雑な要因が引き金になって起こる区切り方に至るまで、実に変化に富んだまとまり方をしていて、特に、文法的パタンの文化的背景は、ウォーフの述べる如く経験体系全般にわたるものである。

本稿のはじめに、大学・短大という高いレベルでの英語教育の改善を図りたいと述べたが、そのような高いレベルでの教育においては、学生は練習に次ぐ練習というやり方を、それ程好んではないようである。知識の獲得のため多くの書物を読み、総合的に判断して物事を学んでいくことを望んでいる面も充分に見受けられるのである。とかく規則の学習や練習問題の答合わせに終始しがちな英文法教育の中に、英語に及ぼした幅広い英語圏文化の学習を融合させることは大切であると、改めて痛感する。

キャロル (J. Carroll, 1973) は、子どもの母国語習得過程を分析し、概略次のように述べている。「子どもは、ことばをしゃべる以前に、既に、物や性質

や出来事等についてのある概念を獲得して、ことばの学習は、その概念にラベルを貼っていく過程である。ラベルが貼られれば、貼ったものにはよく気が付き、よく想い出す。この認知作用が行動に影響を与える傾向にあるのだ。」(p. 139) これは日本の英語教育にもよく当てはまることである。

英語話者の思考様式・行動様式概念を獲得させ、その概念に、ことばのラベルを貼らせる所まで指導する必要があるであろう。但し、英語話者の文化的背景は、日本語話者の文化的背景との比較において学習させることが望ましい。何故ならば、比較対照することにより、各文化の相違点を鮮明に知ることができるからである。

筆者は前稿において、英語学習は「異文化との接触」であるという意識の下に学習すべきであると述べたが、これは、中根氏(1972)の言うように、異文化とうまくつき合うために、相手にも相手の文化があるということを認め、自分の文化基準で物事を判断せず、相手の文化基準を尊重する態度を身につけることである。筆者は図示した通り、言語も文化の中心をなすものと考え、中根氏の提言は英語学習にも当てはめられると確信している。

殆どの学生は“the”の基本的用法は充分理解している筈である。しかし、実際の使用で脱落や誤用があることは、無意識ではあるが日本語話者としての文化基準で、英語を学習しようとしていることの表われである。日本語には無い定冠詞や不定冠詞の基礎的レベルでの誤用や、目的語を文頭に置いても理解し合える日本語の感覚での英語学習などは、異文化との接触のしかたが根本的に誤っているといえることができる。これを克服するためには、相手が何故そのような表現をするのかという文化的基準に関する知識を、英語学習に導入することが必要である。特に高いレベルでの学習には文化的知識の裏づけを伴う学習が効率的であることは、改めて述べる必要もないであろう。しかし、英語圏文化の可視的な行動様式のみならず、不可視的な思考様式だけの学習は、英語圏文化のスキーマ構成には役立つものであって、この学習を否定するものではないが、コミュニケーションに堪え得るだけの英語そのものの学習には余り役立たないことは明白である。要は、学習時にその背景的知識を意識的に語彙や文法、特に関連性が無いと思われている文法的事項と融合させていく努力が

必要である。

文法事項のすべてについて、文化的背景の説明がつかわけではないが、日英語表現を比較することによって説明できる部分は大いに取り入れ、学習時の心理的問題を満たす必要があると思われる。

注

- (1) 田島富美江 「英語教育における「異文化理解」の位置付け」東京都私立短期大学 英語英文学会研究紀要 1992, 66-72, 1993
- (2) 英文は成美堂出版 Boy (Roald Dahl著)の一部を借用した, p. 9
- (3) 日本文:川端康成『雪国』岩波文庫 p. 111
英文 : E. G. サイデンステッカー訳 *Snow Country*. Charles E. Tuttle Company, Tokyo, p. 114
- (4) *Intermediate Comprehension Passages*. Longman, Lesson 4から一部を借用した, p. 11

参考文献

- 綾部 裕子 「言語相対論の中のサピア」言語文化論集第22巻 筑波大学現代語現代文化学系 1987
- 有馬 道子 『心のかたち・文化のかたち』勁草書房, 1990
- キャロル, J. B. 編 (1956), 有馬道子訳『言語・思考・実在』南雲堂, 1988
- サピア, E. ・ B. L. ウォーフ他著, 池上嘉彦訳『文化人類学と言語学』弘文堂, 1970
- 築島 謙三 「文化の構造とことば」芳賀綏編 日本語講座第三巻 『社会の中の日本語』大修館, 1976
- 田島富美江 「英語教育における「異文化理解」の位置付け」東京都私立短期大学英語英文学会研究紀要 1992, 1993
- 外山滋比古 「文化と言語観」芳賀綏編 日本語講座第三巻 『社会の中の日本語』大修館, 1976
- 中根 千枝 『タテ社会の人間関係』講談社現代新書, 1967
- 中根 千枝 『適応の条件』講談社現代新書, 1972
- 平林 幹郎 『サピアの言語論』勁草書房, 1993
- ベン, J. 著 (1972), 有馬道子訳『言語の相対性について』大修館, 1980
- 本名 信行 「言語と民族」野元他監修 日本語と文化社会3 『ことばと文化』, 三省堂, 1977

- ランダー, H. 著 (1965), 川本茂雄監修 岡野松尾・大社淑子訳 『言語と文化』大修館, 1977
- 若林 俊英 「〈言語と文化〉論考-序論-外国語教育へのアプローチ」 明石短期大学研究紀要 第11号, 1982 (明石短期大学は, 平成2年4月より「神戸文化短期大学」に名称変更)
- Boas, F. *Introduction to the Handbook of American Indian Languages*, Washington D.C., Georgetown Univ. Press 1911
- Carroll, J. B. "Linguistic Relativity and Language Learning", *Readings for Applied Linguistics*, Vol.1, 126-144, 1973
- Damen, L. *Culture Learning: the fifth demension in the language classroom*. Addison-Wesley Publishing Company, 1987
- Valdes, J. M. (ed.). *Culture Bound*, CUP, 1986

強勢のメカニズムに関する日・英語の比較研究

リスニング活動との関連において

中 岡 典 子

0. はじめに

日本人学習者の英語音の習得には、母国語からの干渉が強力に働く傾向がある。母国語からの干渉問題については、これまでも“破裂音の発音に関する日・英語の比較研究”(1992)、“鼻音の発音に関する日・英語の比較研究”(1993)のなかで論じてきた。本論文では、同じ観点に立ち、日英語の比較研究の一環として強勢のメカニズムを論じる。ただし、学習者の発音の問題点を直接取り上げるのではなく、リスニング活動を通して取り上げる。すなわち、英語のどのような強勢のメカニズムに対して、母国語のどのような特徴が干渉し、リスニング活動を困難なものにさせているのかについて検討する。また、学生のディクテーションにみられるトラブルの分析を踏まえて実証的に検討する。以上の議論を基に、母国語からの干渉を切り離す一案として、従来の辞書記載に対して改善策を提案したい。

1. リスニング活動と聴覚の能動性

1) マスキング効果による音声の音響上の不完全性

我々の日常生活のなかの音声は、程度の差はあれ雑音を含む状況の中で発せられる。例えば、電車の騒音の中で、駅の雑踏の中で、交通量の激しい通りなどでは、声を張り上げて話しても相手にうまく通じないということが起こる。これは音声が発音によってかなりの部分をマスク(mask)されたからである。

吉田、亀田のマスクングの定義を見てみよう。

マスクング (masking) 効果とは、一つの刺激 (この場合音声) が、他の刺激 (電車の騒音) によって隠蔽され、そのために聴取対象となった刺激 (音声) の聴取能力が低下する現象をいう。(吉田・亀田, 1980, p. 111)

普段の状況では、テレビの音、自動車の音、人の話し声、音楽などが他の刺激となって話相手の音声をある程度マスクしている。冷暖房機の音もわずかではあるが音声をマスクしている。したがって、マスクング効果ゼロの純粋な音声は、録音室という他の音刺激を完全に排除した特殊な環境で初めて可能になる。

2) 意味と統語構造上の余剰性 (redundancy) と文の復元性

誤った発音の場合でも、聞き手はその不備な発音を補って聞き取ることができる。吉田、亀田は“聴覚の心理”の中で、意味的な文脈が与えられると、物理的な音声ではなく、意味的に妥当な音声を聞き取ってしまうと述べている。

意味的な文脈によって——さらに広くその置かれた場によって——知覚が微妙な調節をなしうる点である。わざと誤って「オチマシタ」と言っても、「私は朝早く新聞配達でオチマシタ」と言えば「起きました」と聞こえ、「満員の車中に更に人がぎゅうぎゅうとオチマシタ」と言えば「押しました」に聞こえる。聴覚は固定した回路網ではなく、能動的可塑的な行動系であることを認識する必要がある。(吉田、亀田, 1980, pp. 210-213)

このことは、我々が日常生活の上で日々経験していることである。幼い子供が舌足らずの発音で「あによね、あちよほ」とか「ちゃくらがちゃいたら、いぢれんせい」といっても、聞き手には「あのね、遊ぼう。」「さくらがさいたら、一年生」となんとなく理解してしまう。

マスクング効果が高く、構文のてがかりをあらわす部分の音声がかきこえてくても、元の構文を再生することができる。例えば、雑音のため妨害され、実際に耳にはいったのは次のような不完全な音声だとしよう。

机_すわっ_いる人_いました。 (に、て、が)

机_こわし_いる人_見ました。 (を、て、を)

机_書い_いる人_聞いてください。 (で、て、に)

聞き手は無意識のうちに、即座に残された部分のもつ統語構造上のてがかりを使って、足りない部分を補って構文を復元し、意味を聞きとってしまう。この場合、自分では不完全な音声であったことにさえ気がつかないことが多い。このことは、聞き手が聴覚にだけ依存して音声を聞いているわけではないこと、そして、統語構造上の情報には余剰性があることを表している。人込みの中でも間違って意味を聞き取ることが少ないのはそのためである。また、統語構造上の情報に余剰性があるため、この文構造ならば後にどのような構文が続くだろうという予測ができる。したがって母国語話者は、話しかけられたすべての音声を集中して聞き取る必要はない。文脈上、文の意味上、統語構造上の余剰性ゆえに、音声は不完全なままでも十分に元の文を復元してしまう。

3) 音声の余剰性

不完全な音声それ自体のなかに、音声を復元する情報が残っている場合がある。すなわち、統語構造上、意味上のてがかりがない場合でも、母国語話者の聞き手は音声を復元してしまう。たとえば、日本語で [is] と発音しても、子音の後の母音が無声化されていることにさえも気づかず「いす」と聞き取ってしまう。また、3枚 [sammai] の [mai] の部分をかなり短かめに、[sa] と同じ一拍の長さで発音しても、日本人の聞き手は [ma] を一拍、[i] を一拍として二拍分に聞き取る。ひとつづきの音連続から、母国語の音を識別する上で必要な音の特徴のみを抽出し、音構造にあわせて音を復元して聞き取っていることが明らかである。このことは、音声それ自体に余剰性があることを示している。

4) 外国語学習と予想力

W. M. リヴァースが「外国語習得のスキル—その教え方」の中で指摘しているように、何を聞くかは聞き手が持っている総合的な予想力が決定する。

われわれは、聞くだろうと予想しているものを耳で聞くという傾向がある。ありきたりでない、そのため起こりそうもないような音の連続も、初めは、なじみのまたはありそうに思われる音連続として了解され、やがて理解できるものとしての資格を得るのである。心理学者の報告によると、ありきたりでない音連続が、聴閾 (threshold of audibility) ぎりぎりのところで聞き手に示されると、彼はありきたりの音連続の中へそれを組み込んでしまふということである。たとえば、意味のない音節を文のイントネーションで発音すると、意味のある文として聞き取られるということである。外国語を学習している際、まだ不慣れな聞き手にとっては、多くの音連続は、その起こり得る蓋然性が低いので、それらを誤って解釈したり、彼がいままで一度も耳にしたこともない音連続の場合は「雑音」(noise) という伴奏がつくことになる。(W. M. リヴァース, p. 141-142, 下線は筆者による)

つまり、母国語話者の総合的な言語の予想力は非常に高いといえるだろう。そのためマスクングの程度がかなり高く、音声としてかなり不完全であっても、てががりを抽出して、母国語の音連続、統語構造にあわせて、もとの文を再生して聞き取ってしまうということになる。同じ条件におかれた場合、話者の母国語に対して形成した言語予想と、学習言語に対して形成すべき言語予想との間に、大きな、類推不可能な違いがある場合どうなるのだろうか。

総合的な言語予想を検討することは、本来、統語構造上、意味上の統一した分析比較から離れては成り立ち得ない。生成文法理論に基づき、多くの言語学者が、普遍文法の記述と、それとの関連において個別の言語文法の記述を研究し検討を重ねている。生成文法理論に基づいた普遍的、統一的な分析は今後の課題とし、ここでは、現時点で分析可能な部分に着手してみたい。

5) 英語の自然な発話の特徴

J. S. ケニヨン “最良の発音とは聞き手によって意識されることのないような発音である。” (1973, p. 206) と述べている。では英語での意識されることのない自然な発音とはどういう特徴を備えているのだろうか。逆に不自然な発音とはどういう特徴を備えているのだろうか。ケニヨンはこの点について、“日常の話しことばで、強勢のない母音を完全母音として発音すると多くの語は通じなくなってしまうであろう。” と学習者に警告をしている。ケニヨンの考えによれば、強勢のない音節に完全母音を復活させると発音が丁寧になるどころか、ひどく不自然になり、さらには理解不可能なものになる。

文脈から離れて、単語が単独に発音されたものを引用形 (citation form) という。文中では普通強勢を受けない単語であっても、引用形として発音された場合は第一強勢がかかる。したがってこの場合、引用形の発音で第一強勢をかけたまま文中で発音すると、ひどく不自然な発音となる。

英語母国語話者は強形 (strong form) は意識して使うが、弱形 (weak form) すなわち、強勢のかからない単語は全く無意識で発音している。だから、弱形の単語を意識化して発音するように依頼すると、文からとりはずして発音しようとする。すなわち、引用形で発音しようとする。いいかえると、弱形の発音は文中でのみ発見できるもので、単独に発音すると消えてしまうものといえる。

2. 英語音節の強勢のメカニズム

1) 強勢のある音節

a) 強勢のかかった音声の特徴

強勢とは音の強さ (intensity) ないし大きさ (loudness) であるが、もう一つの重要な要素は長さ (length) である。Fryは音声波形の振幅と持続時間のどちらがストレスを知覚する上で決め手になるかについて、合成音声による知覚実験で調べた。その実験結果によると、どちらもストレスを知覚する上で決

め手になるが、どちらかといえば持続時間の方が有効である（下線筆者）という。知覚実験は個人差も出やすいものであり、また合成音は、もともと不自然な音であるので、音響上のちょっとした条件が違っただけでも、聞こえが微妙に変化する。従って、Fryの実験結果だけから、持続時間の方がより重要な知覚の決め手となると結論づけることはまだ早すぎるだろう。しかし、いずれにしても、英語のストレスのかかった発音は、音声波形の振幅は大きく、その持続時間も長いという2つの特徴があるといえる。

b) 品詞と文強勢

英語では、単語にかかる語強勢は必ずしも文中において生かされるわけではない。文のレベルでかかる強勢を文強勢という。文強勢を受けるか受けないかは、伝達における重要度が高いかどうかということと関係している。このことは原則的には品詞によって決定される。内容語、すなわち、名詞、動詞、形容詞、指示代名詞、疑問詞、数詞、副詞の単語が文中で使われると、各単語の第一強勢にかかる音節に文強勢がかかる。それに対し、機能語には基本的に文強勢はかからない。機能語となるのは、助動詞、be動詞、接続詞、関係詞、冠詞、前置詞、代名詞がある。下記の例では、下線部に強勢がかかる。

- 1) The tran·si·tion from coal to pe·tro·le·um seem·ed to be worth·while.
- 2) They are con·cern·ed with how the weath·er af·fect peo·ple.
- 3) The buy·er re·ceives goods and prom·is·es to pay for them la·ter.

c) 音調核 (nucleus)

一つの音調単位に1つの音調核がある。これがイントネーションの基本である。特に強調や対比といった意味情報がない普通の文の場合は、文の終わりの文強勢がかかった音節が音調核になる。すなわち、その音節に文中で一番強く強勢がかかり、強く長く発音されると同時に、ここに音調の下降、上昇、下降上昇、のパターンの変化が現れる。以下音調核の部分の音節は大文字で書き入

れて他と区別する。下線部は音強勢のかかる音節である。

- 1) This is my DIC·tion·ar·y. (これはわたしの辞書です。)
- 2) This is MY dic·tion·ar·y. (これは他の人ではなく、私の辞書です。)
- 3) This IS my dic·tion·ar·y. (以前はそうではないが、今は私の辞書です。)
- 4) THIS is my dic·tion·ar·y. (他ではなくて、これが私の辞書です。)

音調単位は必ずしも文のレベルとは限らない。強調部分が一つの文にいくつがある場合には、句のレベルも、節のレベルも音調単位となりうる。文強勢がふつうかからない単語でも、強調や対比という意味上の重要性を特にもつ場合には、強勢がかかり、その強勢のある音節が音調核になる。例文2) 3) 5) 6) を参照のこと。

- 5) It is not YOUR rain·coat / but MY rain·coat.
- 6) the gov·ern·ment OF the peo·ple,/BY the peo·ple,/and FOR the peo·ple.

d) 強勢調子のリズム

英語は強勢調子のリズム (stress-timed rhythm) であるといわれる。文の発話の長さは文の音節の総数ではなく文強勢の総数によってきまる。つまり、英語ではある音節は他より長く、ある音節は他よりもっと短く発音される。前後にある強勢のない音節の数に差があろうとも、強勢のある音節は、常に同じ時間間隔を間において発音される。つまり、次の文のように強勢の数が同じなら、長い文も短い文も発話にかかる時間はほぼ等しい。

- 1) Cats eat RATS.
- 2) The cats have eaten the RATS.

3) Some of their cats might have eaten some of the RATS.

2) 強勢のない音節の特徴

a) 強勢のない音節の母音

強勢のない音節の母音は筋肉がゆるんで弱く発音される。その弱さの程度にしたがって、より短く、よりあいまいに、時にはつぶやき声にまで弱められる。今井邦彦は[ə]の特徴を次のように述べている。

学習者は[ə]を中央部で発することを心がければ、その高さをあまり気にする必要はない。重要なのは、この母音を“ごく短く”発音することである。短い、つまりごくいい加減に発音されるのがこの母音の特徴であり、極端なことをいえば、調音点が[i][u]の領域にあっても弱く短く——発しているのか発していないのかわからぬほどに——発音すれば[ə]として通用するのである。(今井邦彦, 1980, p.33)

また、島岡丘(1982, p.470)は“[əɪ]の発音は英語という言語の最も自然な舌の位置を示していると思われる”と述べている。金田一春彦(1967, p.406)によれば“弱い音節の母音はその弱さの度合いに比例してあいまい母音に近づく”と述べ、強勢のない音節の母音の発音には、その弱さの度合いには程度差が存在することを指摘している。したがって、強勢のない母音は、筋肉の緊張の少ない、短いあいまいな母音という特徴で識別されるが、その緊張の度合い、長さの度合い、弱さの度合いには程度差が存在する。

b) 脱落現象

強勢のない音節の母音は、発話によって筋肉の緊張の弱さの程度に違いがあり、口腔から出される息の量の少なさにも程度差が存在する。息の量が少なければ、その程度によっては、舌を子音の調音の位置においても、子音の音声としては認められないほど音は小さくなり、子音の音は脱落して聞こえるだろう。母音の場合も弱くなりすぎると脱落して聞こえる。

機能語には強形と弱形の両方がある。強形は一つだが、弱形は一つとはいえない。弱くなればなるほど、音が脱落していくからである。事実、文中にあらわれる機能語は、普通の発話のスピードでも、かなり弱く発音され、子音や母音の一部脱落してしまう。少し速いスピードになると、かなりの部分が脱落する。脱落現象による数種類の弱形は、辞書にも記載されている。

ランダムハウス英和大辞典に記載されている数種類の弱形

have	[həv, əv]
them	[ðəm, ðm, əm, m]
and	[ənd, ən, n]

c) 中和現象

そのため、異なる2つの機能語の弱形が全く同じ発音になることがある。ギムソンはこの現象を中和現象 (neutralization) と呼ぶ。てがかりは文脈からの意味や統語構造にかなり余剰的に存在するので、この中和現象が起きても、英語の母国語話者がもとの機能語を誤って復元することはない。ギムソンは10項目を中和現象の例としてとりあげている。

ギムソンによる中和現象の10項目

縮小音	該当する機能語	例文
1. [ə]	are/a/*her/*or/*of	
2. [əv]	have/of	The boys of Eton fish. The boys have eaten fish.
3. [ər]	are/or	Ten or under. Ten are under.
4. [ðə]	the/there	
5. [s]	is/has/does	What's he like? (is/does) What's he lost? (is/has)
6. [z]	is/has/does	Where's he put it? (has/does)

The lady the boy's drawing is funny. (is)

The boy's drawing is funny. ('s)

7. [əz] as/has

8. [ən] and/an

on and off

on an off-chance

9. [n] and/not

Didn't he do it?

He did and he didn't.

10. [d] had/would

I'd put it here.

(*: 速いスピードの場合)

リンディ・小林による音声演習用テキストでは、機能語を一つ一つ扱っては、その弱形の発音演習を図っている。このテキストによれば、弱形の脱落現象は通常のスピードでも頻繁に広範囲に現れる。速いスピードで話された場合は、更に脱落現象が広範囲に現れる。したがって、ギムソンの中和現象の10項目に該当する機能語は他にも存在することを認めざるおえない。ギムソンの10項目には、少なくとも次の縮小音や該等する機能語を追加する必要があるだろう。

ギムソンの10項目の補足

縮小音の追加

該当する機能語の追加

- | | |
|--------|--------------|
| 1. | *were/*have |
| 2. [v] | have/of |
| [f] | have/of/*for |
| 3. | her |
| 4. | their |
| 5. | as/ us |
| 6. | as |
| 7. | his |
| [iz] | is/his |

8.
 9. an/than
 10. [əd] had/would
 11. [ɪm] them/him

haveの弱形には [həv] [əv] [v] [f] があるが、その他、助動詞 should, could, would, mightの後の位置で、速いスピードでは [ə] だけになることがある。上記の追加例 1. はその例である。

3) 強勢の表記に関して

a) ブラウンの表記法

日本語の等時性に着目したヴァーノン・ブラウンは日本人話者を対象とした発音指導書 *Improving your Pronunciation* の中で、日本語との比較を図りながら、持続時間に重点をおいた強勢指導を図っている。

Since in Japanese, length is not used to show stress but to show different words ([ie] 家 “house” - [iie] いいえ “no”), it is very important for you to remember that in English, stressed syllables are longer than unstressed syllables. Syllables with primary stress are somewhat longer than those with secondary stress.

Remember: THE STRESSED SYLLABLES ARE LONG; THE UNSTRESSED SYLLABLES ARE SHORT. (Brown, 1970 p. 39)

ブラウンはこの考えのもとに、点と線を使った以下のようなシェーマで、だいたいの音節の長さの違いを区別して表示した。このシェーマ化は日本人話者に英語のリズムを視覚的につかませる上で、また強勢のない音節の短い発音を視覚的に認知させる上で、非常に有効である。

例 com·mon ———·

com·pare	· ———
at·ter·tion	· ——— ·
ex·am·i·na·tion	· · · ——— ·
op·por·tu·ni·ty	· · ——— · ·

b) 一音節単語の強勢

各単語の強勢は辞書に付記してある。英和辞書を引くと、多音節の単語の場合、第一強勢、第二強勢のある音節の母音の上にそれぞれ記号がついている。母音の上に記号のついていない音節はすべて強勢のない音節と解釈することになる。ところが、一音節の単語、例えば“pride” “straight”を辞書でひくと母音に強勢の記号がついていない。しかし、このことは一音節の単語が強勢のない音節であるという意味ではない。これは一音節単語のため、その単語内に強弱の差が存在しないというわけで、辞書に慣習的に記述されてこなかっただけである。文中で使われると、一音節単語にも多音節の第一強勢と同じだけの強勢がかかる。したがって、一音節の単語には基本的に第一強勢がかかっていると考えてよい。

一音節単語の強勢のことは、英語母国語話者にとってはごく当たり前の事実で、辞書であらためて説明する必要はなんら存在しない。ブラウンの場合も一音節単語にかかる強勢については、単語段階では特に何の説明もない。一音節にかかる強勢の指導の必要に気がついていないと思われる。しかし、だからといって、そのまま外国人学習者にも特に説明しないというのはどうだろうか。機能語の場合、そのほとんどが一音節単語である。機能語は単独に発音された引用形では強勢がかかる。しかし、文中で使われる場合は強勢はかからないのが普通である。機能語の場合には、どのような強勢表記が妥当なのだろうか。

3. 日本語音節の特徴と英語学習

日本語話者にとって、強勢アクセントをもつ英語の音声は基本的にどのような異質なのだろうか。日本語と対立する特徴を分析してみたい。

1) 日本語音節の等時性

日本語の音節は「時間」単位のモーラ (more) である。モーラの基本単位は母音、子音+母音、半母音+母音、子音+半母音+母音、撥音と促音の6種類である。モーラはほとんど同じ長さで発音される。これが、日本語の基本的特徴である。このことと、日本語のアクセントがピッチアクセント (高低変化) であることはお互いに関連しあっている。大江三郎が“日英語音声面の比較” (1976, p. 213) の中で指摘しているように、“声の高低は母音の長さを伸縮することはないが、強弱は必然的に母音の長さを伸縮する”。日本語では高いアクセントであれ、低いアクセントであれ一音節の長さは、基本的に一定している。音節の長さが長くなると、2音節分に取り替わり、単語を弁別する働きをもつ。

例： [keito] 糸 糸 [keitoo] 系統
[okasan] 岡さん [okaasan] お母さん

音節の長さが単語を識別する弁別の働きをもっているために、日本語話者は音の長さを微妙に識別する。英語話者の場合は逆で、上の例のどこが違うのかわき分けにくいし、自分でも識別して発音するのが困難である。日本語話者が英語の強勢のある音節を引き伸ばして発音するのが苦手なのはこのせいである。

2) 母音の無声化

日本語はモーラ言語で、どの音節もほぼ同じ長さ同じ強さで発音される。そのため各音節の母音は一定している。しかし、[i][u]の母音はその固有の長さが比較的短い。特にアクセントの低い音節では、無声子音に隣接すると無声化の現象が起こる。

例： 好き [suki] すすき [susuki] 薬 [kusuri]
袋 [fukuro] ふすま [fusuma] 不服 [fufuku]
危険 [kiken] 季節 [kisetsu] 書き込む [kakikomu]

日本人は英語を話すときも、母音の無声化現象を起こしやすい。しかし、本人はほとんど意識することがないようである。そのため、強勢のあるなしにかかわらず母音を無声化しやすい。島岡 (1982, p. 460) は日本人学習者の英語の母音の無声化の実例を出している。その例を強勢のある母音の場合と、強勢のない母音の場合とに分けると下記のように分析できる。

例	強勢のある母音	→	s <u>i</u> ster	s <u>y</u> stem	con <u>s</u> equence
	強勢のない母音	→	not <u>i</u> ceable	s <u>u</u> ccess	beaut <u>i</u> ful
			t <u>o</u> see	t <u>o</u> take	f <u>o</u> r sure

強勢のない母音の場合、母音を無声化して発音しても、英語としては特に問題にならない。むしろ弱音化した普通の発音である。しかし、強勢のあるべき母音の場合、無声化し弱音化した発音では、その単語として通じない。

また、母音の無声化は語末の無声子音の後ではきわめて普通である。大江三郎はこの点に注目し、次のように日本人学習者の英語学習上の寄生的母音の有無の現象を説明している。

英語のVを伴わないCは日本語のCV型と対応させられるから、当然寄生的母音 (parasitic vowels) の挿入が問題になる。この挿入される母音は可能な限り [u] である。[u] は日本語母音中で最も短く、きわ立ちが最も弱い。そのせいもあり、とりわけ低いアクセントの音節で無声音のあとで無声化する。そして特に無声摩擦音のあとではこの無声化した母音は頻繁に落ちる。この、母音の無声化は語末でもきわめてふつうである。したがってたとえば bus, tough, bust, soft における [s][f] のあとでは日本語の発音習慣を移した日本人の発音中にも寄生的母音はほとんど感じとられないのがふつうである。.....これに対して日本人の発する rob,

league, black, grade などの語末または語頭の子音のあとにはしばしばかなり明瞭に母音が聞き取られる。(大江三郎, 1976, p.205)

3) 文字に対する固定イメージと英語学習

日本語のモーラ音節はひらがな一文字であらわされる。各モーラは同じ長さなので、日本語では、ひらがなの各文字が同じ長さである。ひらがなの文字数が多い単語の発音は多い分だけ長くなる。

か (蚊)	→	—
いえ (家)	→	---
りんご	→	----
たまねぎ	→	-----

この文字との一対一の固定した関係ゆえに、英語の文字に対しても同じようなイメージをもちやすい傾向がある。

strike	→	-----
common	→	-----
attention	→	-----
interesting	→	-----

また、各文字に対応する発音記号を読んだ場合でさえも、その発音記号の一つ一つが同じ長さの音を表していると解釈する傾向がみられる。どの英和辞書でも、記号“・”が音節の区切りを示している。しかしほとんどの学習者は、この記号を意識せず、各単語が何音節の単語で、音節の区切りがどこにあるのかを読み取ろうとはしていない。

聞き馴れぬ一連の弱音化した英語音に対しては、英語音のイメージが欠如しているために、日本人は無意識のうちに代わりに日本語の音節構造をあてはめて音をイメージする傾向が強い。上の例ではそれぞれ1音節、2音節、3音節、

4音節だが、それに寄生的母音を追加して、5音節、3音節、5音節、8音節に解釈してしまう。つまりはっきり聞き取れないものに対しては、無意識のうちに日本語の音節構造をてがかりにして、各音節をほぼ同じ長さのものと同イメージする傾向が強い。

strike

[**straik**] → su·to·ra·i·ku ストライク

com·mon

[**kamən**] → ko·mo·n コモン

at·ten·tion

[**ətɛnʃən**] → a·te·n·fo·n アテンション

in·ter·est·ing

[**ɪntəristɪŋ**] → i·n·ta·re·su·ti·n·gu インタレストイング

外国語がカタカナ表記されて、外来語として日本語のなかに簡単に組み込まれている事実がこのことを証明している。このように、英語話者にとってはあたりまえの音節構造それ自体が、日本人には理解されにくい。

日本語式に強勢部分の位置を解釈する傾向がある。“strike”の場合を例に挙げると、一音節なので [straik] 全体に強勢がかかり、その核が二重母音の [ai] である。ところが日本人学習者は、子音連結を分解し、それぞれに寄生的母音を加え、二重母音を2つの母音に分け、[su][to][ra][i][ku] の5音節に聞き取る。[ra] を強勢のかかる音節とし、その核は [a] と解釈する。強勢がかかった音節 [ra] は強く大きい音であるとするが、その長さは、無意識のうちに他の音節 [su][to][i][ku] と同じ長さであるとイメージする。

また学習者によっては、さらに日本語のピッチアクセントを無意識のうちに適用してしまい、強勢のある母音を高く発音しようとする傾向がある。この傾向のため文単位の発音では、文強勢がかかるたびにその部分を高く発音してしまう。これは英語話者にとっては、大変聞きづらい発音となる。しかし、学習者本人は全く無意識で声の上げ下げをしているので、自分の発音の問題点に気

づくことがない。教師がその場で注意しても、一向にこの傾向が消えることがないのはそのせいである。

4. ディクテーションのトラブルの実態分析とその改善策

1) ディクテーションのトラブルの実態とその分析

この資料は特にこの研究のために事前に準備したものではない。一年間の大学生の英語リスニングの授業で、ディクテーションのテストをしてきたものを分析したものである。この授業では、あるトピックに関するテープを授業の中で繰り返し聞いた後、学生はテープの内容に対する理解を英問英答の作業の中で進めて行く。そして、ほぼ内容がつかめた最終段階で毎回ディクテーションテストをして来た。ディクテーションは、英語母国語話者が普通のスピードで読み上げたものを、3回繰り返し聞きながら書き取ったものである。どの文も単純なもので、読解の対象ならば、なんら問題がおきないレベルのものである。また熟語の知識を要求するようなものでもない。にもかかわらず、聞き取り上のトラブルは高い率で生じる。

資料1: ディクテーションのテストより

() 内の数字がクラスの学生数(毎回同一のクラスで実施) 下線部分の数字がその単語を聞き取れなかった、あるいは聞き間違えた人数である。

Coal could be taken from the ground easily.

4人 18人 8人 8人 17人 18人 2人 4人 (24人中)

Elevators will carry people up and down through the building

2 24 7 2 0 8 0 12 6 4 (26人中)

They could purchase more things at lower prices.

7 21 5 3 6 18 2 1 (23人中)

They are concerned with how the weather affect people.

23 16 2 13 20 24 6 22 0 (26人中)

(they の誤解 there 11人, their 4人, the 1人, 白紙 7人)

They change-d from one source of energy to another.

21 0 23 8 8 1 12 6 3 0 (24人中)
(they の誤解 the 19, 白紙 2人)

The transition from coal to petroleum seem-ed to be worthwhile.

2 0 16 7 15 7 0 21 4 4 0 (21人中)

At the end of the nine-th century, the population dropp-ed sharply

1 5 8 8 8 3 19 0 5 1 2 19 0 (22人中)

The buyer receive-s goods and promise-s to pay for them later.

1 3 2 14 1 16 3 17 12 7 22 24 3 (24人中)

It became more and more difficult for them to raise enough food.

3 1 1 13 1 0 17 18 5 0 7 0 (22人中)

Petroleum became attractive because it was cheap and easy to get.

3 1 2 2 13 16 4 16 8 8 6 (24人中)

この聞き取り上のトラブルを品詞別にまとめ、トラブル率を出したのが資料2である。資料2では、上記の例文の単語を全部引き出し、同じ単語が数回でている場合は、トラブル率の高い方から順に並べた。

資料2: ディクテーションのトラブルの品詞別分類

(*印は文頭の位置の発音)

1. 助詞	will	24/26 (92.3%)	
	could	21/23 (91.3%)	18/23 (78.3%)
2. be動詞	was	16/23 (69.6%)	
	are	16/26 (61.5%)	
	be	8/24 (33.3%)	4/21 (19.0%)

3. 接続詞	and	16/23 (69.6%)	16/24 (66.7%)	13/22 (59.1%)
		8/26 (30.8%)		
	because	2/23 (8.7%)		
4. 関係副詞	how	20/26 (76.9%)		
5. 冠詞	the	24/26 (92.3%)	18/24 (75.0%)	13/24 (54.2%)
		8/22 (36.4%)	6/26 (23.1%)	5/22 (22.7%)
		2/21 (9.5%)*	1/24 (4.2%)*	
6. 前置詞	for	22/24 (91.7%)	17/22 (77.3%)	
	at	18/23 (78.3%)	1/22 (4.5%)*	
	to	15/21 (71.5%)	5/22 (22.7%)	3/24 (12.5%)
	from	16/21 (76.2%)	17/24 (70.8%)	8/24 (33.3%)
	with	13/26 (50.0%)		
	of	12/24 (50.0%)	8/22 (33.4%)	
	through	12/26 (46.2%)		
	to+verb	12/24 (50.8%)	8/23 (34.8%)	4/21 (19.0%)
7. 代名詞	them	24/24 (100%)	18/22 (81.8%)	
	they	23/26 (88.5%)	21/24 (87.5%)	7/23 (30.4%)
	it	13/23 (56.5%)	3/22 (13.6%)	
8. 語尾変化	seemed	→seem	21/21 (100%)	
	changed	→change	23/24 (95.8%)	
	dropped	→drop	19/22 (86.4%)	
	ninth	→nine	19/22 (86.4%)	
	promises	→promise	17/24 (70.8%)	

receives	→receive	14/24 (58.3%)
taken	→take	8/24 (33.3%)
concerned	→concern	3/26 (11.5%)

9. 名詞

end	8/22 (34.6%)	
petroleum	7/21 (33.3%)	3/21 (13.0%)
coal	7/21 (33.3%)	4/24 (16.7%)
things	6/23 (26.1%)	
energy	6/26 (23.1%)	
weather	6/26 (23.1%)	
building	4/26 (15.4%)	
buyer	3/24 (12.5%)	
ground	2/24 (8.3%)	
elevator	2/26 (7.7%)	
people	2/26 (7.7%)	0/26 (0%)
population	1/22 (4.5%)	
goods	1/24 (4.2%)	
price	1/23 (0%)	
century	0/22 (0%)	
food	0/22 (0%)	
transition	0/21 (0%)	

10. 動詞

affect	22/26 (84.6%)
carry	7/26 (26.9%)
pay	7/24 (29.2%)
get	6/23 (26.1%)
purchase	5/23 (21.7%)
promise	3/24 (12.5%)
drop	2/22 (9.1%)

	receive	2/24 (8.3%)		
	concern	2/26 (7.9%)		
	became	1/22 (4.5%)	1/23 (4.3%)	
	raise	0/22 (0%)		
	seem	0/21 (0%)		
	change	0/24 (0%)		
11. 形容詞	easy	8/23 (34.8%)		
数詞	one	8/23 (34.8%)		
	enough	7/22 (31.8%)		
	cheap	4/23 (17.4%)		
	nine	3/22 (13.6%)		
	attractive	2/23 (8.7%)		
	lower	2/23 (8.7%)		
	difficult	0/24 (0%)		
	worthwhile	0/21 (0%)		
	another	0/24 (0%)		
12. 副詞	easily	4/24 (16.7%)		
	later	3/24 (12.5%)		
	more	3/23 (13.0%)	1/22 (4.5%)	1/22 (4.5%)
	up	0/26 (0%)		
	down	0/26 (0%)		
	sharply	0/22 (0%)		

資料2の分析から、この調査の対象となった学生たちの聞き取り上のトラブルは主に、よく知っているはずの機能語に集中していることが実証された。

トラブル率を内容語と比較すると、内容語では高くても30%前後である。動詞の affect だけが84.6%と高いトラブル率を示しているが、他と比べてみても

これは例外的といえるだろう。おそらく、この単語の聞き取り上のトラブルはなんらかの別の要因が働いたと考えてよいと思われる。ところが、機能語の場合には、ほとんどが50%~60%であり、80%、90%のものもある。それらの機能語の用法は、ごく基本的なものばかりである。また、同じ単語が数回使われている場合には、トラブル率にも違いが相当に出てくる。例えば、“and”は30.8%~69.6%，“the”は4.2%~92.3%，“they”は33.3%~88.5%と最低と最高の間の程度差はかなり大きい。

よく使われる基本的な単語が聞き取れていないということは、文法構造上の復元力と残された音声をはかりとして音声を復元する力が特に弱いということの意味していると思われる。

2) 長短の強調の必要性

音節の長さが弁別の働きをもつ日本語の特徴と、強勢の有無によって音節の長さが伸縮自在である英語の特徴はまさに相反するものである。英語の強勢の有無の特徴は“弱”か“強”かと一般に説明され、学習者はその言葉ををはかりに強くあるいは弱く発音する。しかしその場合でも、日本語のモーラの特徴ゆえに、“弱”であれ“強”であれ、同じ長さで発音しようとする傾向が強い。したがって、日本人話者に英語の強勢のしくみを説明する場合、弱強の違いを強調するよりは、長短のちがいを強調することがより必要であり、重要である。

3) ブラウンの表記法の改訂と辞書への記載の提案

英語の強勢のしくみは、基本的に日本語の音韻体系と異質であるために、一般の学習者にとって、特に弱音化された文中の機能語の発音が予想以上に難しい。音声把握に必要なをはかりを増やすという意味で、長短を強調した点と線による強勢のメカニズムの図式化を辞書に表記するのは一案であろう。全く異質の音韻体系をもつ日本語母国語話者にとって、どのような情報が必要なのか、それに照らし合わせて、従来の辞書記述のしかたが妥当なのかどうか、検討の価値はあると思われる。

しかし、ブラウンの表記法は、そのままでは不十分なので、ここに改訂案を

提案する。すなわち、一音節単語に対しても強勢、あるいは強勢がないことをブラウンの表記法に加えることを提案する。また、学習者の便利を更に図るために、英和辞書の従来の発音記号による音声表記の他に、この点と線分による強勢表記を新たに加えることを提案したい。

一音節単語の強勢を多音節単語の第一強勢と同じ長さの線分で表すと、英語単語全体に一貫して強勢のメカニズムを図式化することができ、一目瞭然となる。

例	fly	_____
	straight	_____
	re·ly	·_____
	in·ac·tive	·_____·
	in·ter·est·ing	_____· · ·

機能語の場合は音調核がつけば、強勢がかかり、それ以外では強勢がかからないのが普通である。辞書には、次のように2通りの図式を記述することを提案する。

例	1) has	·/_____	5) and	·/_____
	2) as	·/_____	6) an	·/_____
	3) there	·/_____	7) would	·/_____
	4) the	·/_____		

この2通りの記述で、学習者に2通りの発音に着目させることができるだろう。弱形の場合の子音の脱落現象や母音のあいまい化によって、上の例では1)と2)、3)と4)、5)と6)の発音が中和して同じ発音になる。点によって強勢のない音節を図式化するこの表記を採用すると、この中和現象を抽象化でき、学習者は視覚的にイメージしやすくなる。

また7)の弱形は普通のスピードでは、[wəd]だが、速いスピードの場合は、

半母音が脱落して [əd] となり、さらに速くなると半母音と母音までが脱落して子音 [d] だけになる。このように、弱形の弱音化の程度は多様である。それについては、従来の辞書表記のように個別に列挙すれば十分である。その多様さの程度までこの点と線分による表記で区別する必要はないだろう。

機能語の多くが、一音節から成り立っている。特に中和現象を起こしているものは全部一音節である。従って、一音節の弱形に対して一貫して、点によって図式表記をするということは意味があると思われる。2音節の機能語の場合の記述は、強形と弱形の場合の区別を、強勢部分の線分の長さの違いで表してみてもどうか。

be·cause	· - / · ———
with·in	— · / ——— ·

5. 結論

多くの日本人にとって自然なスピードで話された英語を聞き取ることが困難である。しかし、それは使用頻度の少ない単語の聞き取りに問題があるからではない。主な原因はよく知っている単語が聞き取れないからである。

自然なスピードの発音では、強勢のない音節はあいまいに弱く発音される。その弱音化の程度差は大きく、脱落する部分もでてくれば、他の単語の発音に中和してしまうことも頻繁におきる。単一に発音された場合の音声と比べると、文中での機能語はさまざまに弱音化し、音声としてはかなり不完全なものとなる。

母国語の場合は、不完全な発音を耳にしてもほとんど問題は起きない。我々は、自分のもっている音声に対する予測力、統語構造にたいする予測力、意味上の予測力を働かせ、もとの単語の音声を聞き取ってしまう。しかし、外国語学習の場合、不完全な音声から単語を復元して聞き取ることが困難である。

多くの日本語話者は、英語の強勢のメカニズムに対する明確なイメージをもっていない。したがって、不完全な英語の音声に対して代わりに日本語の音声

イメージで補って英語の音声聞き取りをする。自然なスピードで発音された場合は、内容語ならば、かなり安定して聞き取ることができるにもかかわらず、多様に弱音化された機能語を聞き取ることがひどく困難となる。自然なスピードの発話を聞き取る力を養うための特別な指導が必要である。

日本語の音節の等時性ゆえに、英語では一音節がさまざまな長さで発音されるということが日本人にはわかりにくい。この認識ギャップのため、ノーマル・スピードで話された英語の自然な音声を聞き取ることができないでいる。この認識ギャップを埋めるにあたって、この論文で提案しているBrownの表記法の改訂案が利用できるだろう。音声イメージを基本的に変えるには、この長短による単純な強勢のメカニズムの図式化が、日本語話者には特に有効に働く。

この図式をてがかりとして、1音節、2音節、3音節と音節数を増やしていきながら、単語レベルの発音練習をする。強勢のある音節は長く強く発音し、強勢のない音節はさまざまに弱音化し、短く弱くあいまいに脱落して発音する練習を加える。かつ強勢部分が同じ長さになるようにリズムをとる練習をすれば、おのずと学習者の中に英語音の音声イメージの基本が作られていく。

次の段階として、文単位で内容語に文強勢をかけ、長く強く発音し、機能語を弱音化して、短く弱くあいまいに脱落して発音する練習を加える。文単位でリズムがとれるようになったら、しだいにスピードを上げ、英語話者のノーマル・スピードに近づけていくようにすると良い。機能語の弱形はかなり弱くあいまいになるということがイメージでき、自分でも発音できれば、聞き取りの場合に応用されていくはずである。

現行の辞書の表記は、必ずしも強勢のメカニズムに対する明確な音声イメージを学習者に提供しているとはいえない。単語の音声表記にここで提案している表記法が新たに追加されるならば、英語の音声イメージを作り上げるのにおおいに役立つであろう。このことは、機能語弱形にたいする予測力を作り上げる上で有効に働くに違いない。

参考文献

- Brown, Vernon (1970) *Improving Your Pronunciation*, Tokyo: Meirindo
- Fry, D.B. (1955) "Duration and Intensity as Physical Correlates of Linguistic Stress"
UCLA Working Papers in Phonetics, No.10.
- Gimson, A.C. (1980) *An Introduction to the Pronunciation of English*, London: Edward Arnold.
- 橋本萬太郎 (1980) "音韻大系の比較", p. 69-105, 「日英語比較講座第一巻 音声と形態」
- 今井邦彦 (1976) "音声と文法", p.92-108, 「講座 新しい英語教育Ⅱ 英語教育と英語学」, 大修館書店
- (1980) "音声学的比較", p.7-67, 「日英語比較講座 第一巻 音声と形態」, 大修館書店
- Kenyon, John Samuel (1973) 「アメリカ英語の発音」(American Pronunciation)
竹林滋訳, 大修館書店
- 金田一春彦 (1967) 「日本語音韻の研究」, 東京堂
- Kobayashi, Eichi & Richard Linde (1984) *Practice in English Reduced Forms*, Tokyo: Sanshusha
- 大江三郎 (1976) "日英語音声面の比較", p.195-216, 「講座 新しい英語教育Ⅱ 英語教育と英語学」, 大修館書店
- Rivers, Wilga M. (1972) 「外国語習得のスキル——その教え方」(Teaching Foreign Language Skills), 天満美智子訳, 研究社
- 島岡丘 (1982) "日英語の音声面の比較", p. 413-486, 太田朗編「英語学大系12 英語学と英語教育」, 大修館書店
- 笈寿雄 (1971) "アメリカ構造言語学における音素論", p. 2-104, 太田朗編「英語学大系第二巻 音韻論Ⅱ」, 大修館書店
- 中岡典子 (1992) "破裂音の発音に関する日・英語の比較研究: 息の流出の仕方の違い", 「東京立正女子短期大学紀要」第20号
- (1993) "鼻音の発音に関する日・英語の比較研究: 息の流出の仕方との関連について", 「東京立正女子短期大学紀要」第21号
- 吉田登美男・亀田和夫 (1980) "聴覚の心理", p. 73-240, 三浦種敏監修「新版聴覚と音声」, 電子通信学会

'Cram'—Its Syntactic Realizations of θ -roles

Mitsuko Okuboh

0. Introduction

The predicate 'cram' takes three arguments in its argument structures ; one is an external argument which corresponds to the thematic role, Agent and two internal arguments which correspond to the thematic roles, Theme and Goal. (1) and (2) are two constructions possible for the verb, which are the so called locative alternation.

- (1) Mary crammed food into the freezer.
- (2) Mary crammed the freezer with food.

In both cases, the predicate assigns 'Mary' Agent. In the two internal arguments, 'cram' assigns 'food' Theme and 'into the freezer' Goal in (1), and it assigns 'the freezer' Goal and 'with food' Theme in (2).¹ This means that the two sentences imply the same semantic content to the extent that they represent complete argument structures of the verb involving three arguments which the predicate can take.² From this point of view, they follow the projection principle.

On the other hand, (3)-(4) show particular syntactic realization patterns representing two subcategorization frames of the predicate.

- (3) *Mary crammed food.
- (4) Mary crammed the freezer.

'Into the freezer' in (1) is obligatory, while on the other hand 'with food' is optional in (2). The facts suggest different syntactic positions for the prepositional phrases after the direct objects in (1)-(2), which represent different thematic roles.

There is another verb predicate, 'put' which takes arguments to be assigned the same thematic roles as 'cram'. It takes three arguments in its argument structure; one is an external argument which corresponds to Agent and two internal arguments which correspond to Theme and Location as shown in (5a).

- (5) a. Sue put the bag on the table.
b. *Sue put the table with the bag.

In (5a), the verb assigns 'Sue' Agent, 'the bag' Theme and 'on the table' Location. 'Put', unlike 'cram', allows only one construction-locative alternation is not accessible to the predicate as shown in (5). (6) shows that a PP corresponding to Location is obligatory representing its subcategorization frame.

- (6) Sue put the bag *(on the table).

It is generally accepted that a PP signifying location in a 'put' sentence is in the verb phrase and not the sentence preposition phrase.

As for the syntactic status for a PP, it is said in general that a PP is either an argument of a verb or an adjunct. Arguments are thought to be represented syntactically as sisters of the verb within the VP, whereas adjuncts are attached outside of the VP, in \overline{VP} or S. Arguments are often obligatory whereas adjuncts never are. On the basis of the observation, it is assumed that the optional 'with food' in (2) is an adjunct either in \overline{VP} or S, while the obligatory 'into the freezer' is a sister of the verb in the VP, constituting a verb phrase preposition phrase.

For a discussion on syntactic status of arguments of some verb predicates assigning the two internal arguments Theme and Goal, we have another verb, 'spray', which also allows for locative alternation as shown in (7a), involving all the three arguments it can take.

- (7) a. Jack sprayed paint on the wall.
Jack sprayed the wall with paint.
b. Jack sprayed paint (on the wall).

Jack sprayed the wall (with paint).

(7b) shows that 'spray' optionally subcategorizes for a PP 'on the table' corresponding to Goal on one hand and 'with paint' with Theme on the other hand. In this case, it is assumed that 'on the wall' with Goal and 'with paint' with Theme in (7) are not verb phrase preposition phrases, but instead possibly sentence preposition phrases.

In this paper, we see various evidence for the different syntactic status for arguments to be assigned the same thematic roles, which are realized, on one hand, as a NP of a direct object, and on the other hand as a PP. Specifically we are concerned with the syntactic status of PPs which realize thematic roles assigned by 'cram'; 'into the freezer' with Goal in (1) and 'with food' with Theme in (2).

1. Pseud-cleft constructions

Prepositions show differences in their syntactic behavior in pseud-cleft constructions, depending on sentence prepositions or prepositions constituting some major categories.

- (8) Rosa rode a horse in Ben's picture.
- (9) Rosa found a scratch in Ben's picture.
- (10) *What Rosa did was ride a horse in Ben's picture.
- (11) What Rosa did was find a scratch in Ben's picture.
- (12) What Rosa did in Ben's picture was ride a horse.
- (13) *What Rosa did in Ben's picture was find a scratch.

The differences in the constructions in (10)-(13) suggest that 'in Ben's picture' in (8) is outside of the verb phrase, possibly a sentence preposition phrase(S-PP), while that in (9) is inside of the verb phrase, a verb phrase preposition phrase(VP-PP). This means that a PP is a subcategorized constituent for 'scratch', while it is not for 'ride'.

Sentences with 'cram', 'put' and 'spray' show different syntactic phenomena

in the construction, suggesting some distinction among PPs if any.

- (14) a. What Sue did was put the bag on the table.
b. *What Sue did on the table was put the bag.
- (15) a. What Mary did was cram food into the freezer.
b. *What Mary did into the freezer was cram food.
- (16) a. What Mary did was cram the freezer with food.
b. What Mary did with food was cram the freezer.
- (17) a. What Jack did was spray paint on the wall.
b. What Jack did on the wall was spray paint.
- (18) a. What Jack did was spray the wall with paint.
b. What Jack did with paint was spray the wall.

The pairs in (14)-(15) show 'into the freezer' in (1) and 'on the table' in (5) are VP-PPs. Some informants find a. of (16)-(18) grammatical, suggesting 'with food' in (2), 'on the wall' and 'with paint' in (8) to be VP-PPs, and b. of (16)-(18) grammatical suggesting the PPs to be an adjunct, $\bar{V}P$ -PP or S-PP.

2. Cleft sentence constructions

Elements in the focus position in cleft sentences are assumed to constitute a single unit.

- (19) John sat in the park under a tree on a bench.
It was in the park under a tree on a bench that John sat.
*It was in the park that John sat under a tree on a bench.
*It was under a tree that John sat in the park on a bench.
*It was on a bench that John sat in the park under a tree.

(19) suggests that a part of the constituents is not allowed to move out of the

unit, showing that 'in the park under a tree on a bench' constitutes a single \overline{PP} .

With the basis of the syntactic phenomenon in cleft sentences, the distinction obtains between a PP in a verb phrase and a PP as an adjunct.

(20) It was in Ben's picture that Rosa ride a horse.

(21) *It was in Ben's picture that Rosa found a scratch.

The grammatical (20) suggests that 'in Ben's picture' in (8) is outside of the VP, 'ride a horse', being a S-PP, while ungrammatical (21) suggests that the phrase is in the VP, 'found a scratch', being a VP-PP.

(22)-(26) show variations among PPs realizing argument structures for 'cram' and others.

(22) *It's into the freezer that Mary crammed food.

(23) *It's on the table that Sue put the bag.

(24) It was with food that Mary crammed the freezer.

(25) It was on the wall that Jack sprayed paint.

(26) It was with paint that Jack sprayed the wall.

(22)-(23) suggest that 'into the freezer' in (1) and 'on the table' in (5) are constituents of the verb phrases. Grammatical (24)-(26) show 'with food' in (2), 'on the wall' and 'with paint' in (7) constitute single independent units outside of the VP, being adjuncts.

3. Other syntactic phenomena

Sentence preposition phrases can occur freely in sentences, while this is not the case with verb phrase preposition phrases--positions where they can occur are limited.³

Particularly with respect to movements to COMP positions as shown in (28)-(29), differences obtain between the two preposition phrases.

- (27) a. Rosa, in Ben's picture, looks sick.
 b. *Rosa, in Ben's picture, found a scratch.
- (28) a. In Ben's picture, how does she look ?
 b. *In Ben's picture, what did she find ?
- (29) a. In Ben's picture, does Rosa look sick ?
 b. *In Ben's picture, did Rosa find a scratch ?

We have a similar phenomena with preposition phrases in the following sentences.

- (30) *Mary, into the freezer, crammed food.
 *Into the freezer, what did Mary cram ?
 *Into the freezer, did Mary cram food ?
- (31) *Sue, on the table, put the bag.
 *On the table what did Sue put ?
 *On the table did Sue put a bag ?
- (32) Mary, with food, crammed the freezer.
 With food, what did Mary cram ?
 With food, did Mary cram the freezer ?
- (33) Jack, on the wall, sprayed paint.
 On the wall, what did Jack spray ?
 ? On the wall, did Jack spray paint ?
- (34) Jack, with paint, sprayed the wall.
 With paint, what did Jack spray ?
 ? With paint, did Jack spray the wall ?

The ungrammaticality of (30)-(31) suggest that 'into the freezer' in (1) and 'on the table' in (5) are VP-PPs. (32)-(34) show that movements to the position following the subject position, at the node of IP is ungrammatical for 'with food' for 'cram' and the PPs of 'spray', suggesting that they are S-PPs. While there are some discrepancies among informants' judgment, movements to COMP

positions are generally possible for 'with food' for 'cram' in (2), 'on the wall' and 'with paint' for 'spray' in (7). The facts suggest that they are adjuncts, possibly S-PPs.

4. Subject inversion sentences

With respect to another distinction between a PP in a verb phrase and an adjunct, a sentence preposition phrase, subject inversions are possible only when the former is preposed, but not when the latter is preposed.

(35) *In Ben's picture did Rosa ride a horse. (S-PP)

In Ben's picture did Rosa find a scratch. (VP-PP)

We have the following informant judgments for the PPs in our concern.

(36) Into the freezer did Mary cram food.

(37) On the table did Sue put the bag.

(38) *With food did Mary cram the freezer.

(39) ?*On the wall did Jack spray paint.

(40) ?*With paint did Jack spray the wall.

(36)-(37) are grammatical, which suggest 'into the freezer' for 'cram' in (1) and 'on the table' for 'put' are VP-PPs. For (38)-(40) we obtain ungrammatical or unacceptable status, suggesting at least that the PPs are different from the PPs in (1) and (5). (38) suggests that 'with food' in (2) is a S-PP; (39)-(40) suggest that the PPs are adjuncts⁵, safely not in the the VPs.

5. Conclusion

The particular syntactic phenomena in the several constructions above, in general, show different syntactic positions for PPs, distinguishing PPs, 'into the freezer' in (1) and 'on the table' in (5) from others. In summary, it is claimed that 'with food' for the predicate, 'cram' in (2) is safely not in the VP, being an

adjunct, as well as 'on the table' and 'with paint' for the predicate, 'spray' respectively in (7). On the other hand it is claimed that 'into the freezer' for 'cram' in (1) is a VP-PP, as well as 'on the table' for 'put' in (5).

We have also shown that 'cram' allows for two types of syntactic realizations of its arguments to represent thematic roles which the predicate should assign, yielding two sentence structures. The observations on 'cram' and 'spray' raises a problem on specification of syntactic categories to which thematic roles are assigned--in what syntactic categories are particular thematic roles realized? The CSR (Chomsky 1986a) stipulates information on categorical selection---syntactic categories for thematic roles to be represented.

- (41) CSR (Agent) = NP
 CSR (Theme) = NP
 CSR (Location) = PP

The CSR (41) predicts that the thematic role of 'theme' is realized as a NP, and that of 'location' as a PP, which applies to arguments for 'put'. The possible two syntactic realizations of the same thematic roles for 'cram', and 'spray' are against this generalization, showing that the arguments associated with Theme and Location for the verbs are realized as a NP in one construction, and a PP in the other construction. Their realizations in the 'cram' and 'spray' sentences are not consistent as predicted in (41).

In the GB framework, it is generally assumed that the argument structure and the theta grid(Stowell 1981) of the predicate determine the minimal composition of the sentence. Sentence structure is thus partly lexically determined. This property of syntactic representations is summed up in the projection principle. The predicate 'cram' certainly involves an argument (variable) to be associated with Theme in its argument structure. As far as the thematic role, Theme in (2) is concerned, it is not necessarily realized as 'with' preposition phrase. The similar syntactic phenomenon is obtained for 'spray'. Theme and Goal are not necessarily realized as preposition phrases, 'with' and 'on' phrases respectively.

The observation on syntactic representations of the verbs, on the other hand, reasonably fits subcategorization frames of each predicate. 'Cram' allows for two subcategorization frames, '___ NP PP' representing the internal argument

sequence construction, [Theme, Goal] and '___ NP' representing the internal argument sequence construction, [Goal, (Theme)]; 'put' does one and only, '___ NP PP' for [Theme, Location]; 'spray' does '___ NP' for either [Theme, (Goal)] or [Goal, (Theme)].

The information on strict subcategorization is represented in the theta grid. The negative evidence against CSR, however, shows that there is no means for the theta grid to represent information on optional/obligatory subcategorization distinctions among the thematic roles-associated arguments (variables) for 'cram'.

An approach to lexical representation of argument-taking predicates, in particular verbs of locative alternation (Rappaport and Levin 1988, Zubizarreta 1992, Pinker 1984) seems to be successful to the extent that total and partial affectedness reading difference for the two syntactic realizations is predicted at a formal level. It suggests lexical conceptual representations for lexical predicates independent of argument structures, which are connected to the former by linking rules. The semantic difference in locative alternation in terms of affectedness is found in two different lexical conceptual representations for the verbs. We suggest particular lexical conceptual structures for 'cram' as shown in (42).

(42)

cram 1 : [x cause [y to come to be at z]]

cram 2 : [[x cause [z to come to be in STATE]]

BY MEANS OF [x cause [y to come to be at z]]]

Cram 1 represents partial affectedness for the indirect argument variable, z associated with 'the freezer' in (1); cram 2 does holistic affectedness for the direct argument variable, z associated with 'the freezer' in (2); the reverse is the same for argument variables, y associated with 'food'. The same two lexical conceptual representations apply to 'spray', predicting the gestalt shift in affectedness.

However, the formalization fails to capture the particular optional syntactic realizations of arguments for 'cram' and 'spray'--PPs in our concern.

'Argument structures' in the approach are the information that specifies how

a verb's arguments are encoded in the syntax. That is the only lexical structure pertaining to the thematic properties of arguments that the syntax can look at. More specifically, semantic content need not to be represented in the argument structures, which is indicated by the use of variables. Zubizarreta (1992) on scope relation among arguments in dative-shift constructions argues that the semantic content of argument variables does not play a role in grammar.

The semantic type of arguments is probably crucial in specifying the mapping relation between the lexical conceptual structures and argument structures, but it is irrelevant in determining the mapping argument structures and syntax. In this sense, we argue that syntactic structures are unpredictable from meaning, in particular from thematic roles. Thematic information goes into determining a verb's argument structure, but it is the extent of its influence; the rest of the syntax cannot "see" it directly.

Notes

1. On the assignment of thematic roles to arguments with prepositions in 'cram' sentences, it should be noted that thematic roles are assigned to the entire PP by the verb, predicate. Thematic roles are not assigned to a NP by prepositions. For more details on the analysis, see Napoli (1989), which discusses the qualifications of predicates.

2. The subtle semantic difference in affectedness between the two constructions is also dealt with in 5. in the text. It should be noted that our main concern is in the relationship between syntactic realizations and semantic content at the level of thematic roles.

3. A S-PP and a VP-PP are both allowed to be preposed.

In Ben's picture, Rosa looks sick. (S-PP)

In Ben's picture, Rosa found a scratch. (VP-PP)

Preposition phrases in our study also show the same phenomenon.

Into the freezer, Mary crammed food.

On the table, Sue put the bag.

With food, Mary crammed the freezer.

On the wall, Jack sprayed paint.
With paint, Jack sprayed the wall.

4. In the framework of Barriers, (Chomsky 1986), movements of VP-PP are blocked because PPs are not L-marked.

5. It is not certain whether they are \overline{VP} -PPs or S-PPs. The issue is not irrelevant in our analysis at this point from the point of the distinction of VP-PPs from adjuncts. Our analysis later on assumes that VP-PPs are subcategorized, whereas adjuncts are not for verbs.

Bibliography

- Chomsky, N. 1986a. *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use* New York: Praeger.
- 1986b. *Barriers* Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Napoli, D.J. 1989. *Predication Theory---a case study for indexing theory* Cambridge: Univ. of Cambridge.
- Pinker, S. 1984. *Language Learnability and Language Development* Cambridge, Mass.: Harvard UP.
- Rappaport, M and B. Levin. 1988. "What do you do with θ -roles," in Wilkins (ed.) (1988), 7-36.
- Stowell, T. 1981. "Origins of phrase structure." Unpublished Ph.D. dissertation, MIT.
- Wilkins, W. 1988. *Syntax and Semantics 21: Thematic Relations* San Diego: Academic Press.
- Zubizarreta, M. L. 1992. *Syntax and Semantics 26: Syntax and Lexicon*. San Diego: Academic Press.

発達に関する山鹿素行の考え方—分析（I）

飯 田 宮 子

問題

人は子供から大人になるにしたがって、身長、体重などの身体的な面、言語や思考などの知的な面、感情や欲求などの情緒的な面、他者との調和や競争などの社会的な面に、それぞれ量的、質的な変化が現れる。これらの変化を発達という（安藤、1986）。以前は、発達を決定する要因として、遺伝説（Gesell, 1943）と環境説（Watson, 1924）が、対立的に唱えられていた。遺伝説によると、子供の発達は生物学的成熟によるものと考え、子供の成熟度を待ち、年齢に応じた発達規準表に照らし合わせて子供に教育を行うことが重要であると、教育を行う適切な時期（レディネス）の概念を広く知らしめた。一方、環境説によると、子供の発達は学習経験のみによって形成されると考える。従って、教育の働きかけによって、どのような子供でも無限の可能性を実現化させることが出来るのである。環境説は、すべての子供に教育を平等に施行する必要性を唱いた。現在では、遺伝（生物学的成熟）と環境（学習経験）の要因を対立させることなく、むしろ両者が互いに作用し合って発達を促すという相互作用説が多く支持されている。認知発達理論で知られるPiaget（1964）は、基本的に、生物学的成熟によってもたらされる同化と調節の概念を用いて、子供が能動的に環境に働きかけながら、外界の知識を獲得し、認知能力を発達させるという相互作用説を唱えている。Hunt（宮原他訳、1978）は乳幼児や動物の研究を通して、生物学的成熟よりも学習経験を重視する相互作用説を支持している。遺伝的に潜在する内発的動機づけ（興味・関心・意欲）を実現化させるものは、学習経験であり、子供の能力を最大限に伸ばすことが、教育の本質

であると主張する。

このように、発達のとらえ方（発達理論）の違いによって、子供に対する教育目標、教育内容、教育方針は、当然異ってくるのである。どのように子供を教育したらよいのかという母親の質問は、どのように子供の発達をとらえるかという心理学者の質問に置き変えることができる。

今日、子供の教育に関する諸問題—育児ノイローゼ、過保護、放任、非行、家庭内暴力、登校拒否、無気力など—は深刻に受け取められている。同時に、子供をどのように教育したらよいのかというテーマは、切実な社会問題として提起されている。

本研究では、先に引用した発達研究の先駆者達とは、時代（1900年代）と文化（欧米の個人主義）を異にしながらも、日本の封建的身分制度の時代（1600年代）に公教育の重要性を唱え、教育を行うにあたり、発達の概念を取り入れた儒学者、兵学者である山鹿素行の文献のなかから、発達に関する必要箇所を検索し、素行が発達に関してどのような見解を持っていたのかを分析することを目的とする。

方法

第一に、素行の人物を概観する。第二に、徳川幕府の官学であった朱子学を批判し、儒学に対する素行の見解を著した『山鹿語類』のなかの巻16父子道1（山住・中江編、1983）から、発達に関する事項を検索し、それらの内容を発達段階ごとにまとめる。第三に、発達と教育の密接な関係性を述べている事項についても検索する。なお文献中の年齢は数え年で記されている。

結果

1. 素行の概略（堀、1987；村上、1965）

0～10才 山鹿素行は1622年（元和8）東北の会津若松に生まれる。父貞以は

若松城主蒲生家の重臣町野幸和ゆきかずに身を寄せている浪人であった。蒲生家は断絶し、町野幸和が幕府に仕えるため江戸へ移ることになり、素行も父貞以と共に江戸へ移住する。父貞以は町野幸和を頼りながら、後剃髪して町医者となる。幼い時から学問の素質に優れていたため、父貞以は山鹿家再興の夢を素行に期待する。9才の時、林羅山に学才を認められ、門弟（朱子学）に入る。

10～20才 卓越した優秀さから11才の時、松江城主から召抱えの申し出があったが、父貞以は、素行により高い学問を身に付けさせ、有利な条件で仕官させることを希望し、申し出を断る。徳川家が定める正統の兵法、甲州流兵学を学ぶため尾畑景憲かげのり、北条氏長うじながに入門し、後印可を受ける。高野按察院光看こうのぼる法印ほういんにより両部神道秘伝を伝授される。幕府の武士に対する学問奨励政策のなか、素行の学識は諸大名、幕臣から注目され、武士道を教える一流の兵学者、儒学者として独立の道を歩き始める。

20～30才 父貞以が常日頃世話になっている町野幸和の妻祖心そしんが家光の側室振よりのの局の祖母であることから、祖心は素行を將軍家御家人に推薦する。將軍家仕官の内定の命が素行に下される。諸大名からの招聘を辞退し、待機していたが、家光の死により幕府出仕実現の見込みはなくなる。

30～40才 素行（31才）は赤穂城主浅野長直ながなおに禄仕し、39才にて致仕する。この時期素行は朱子学思想を積極的に取り入れ、多くの著述を残す（武教全書など）。その内容は、儒教と兵学を融合させた武教の確立をめざすものである。浪人となった素行は、幕府仕官への夢を抱きながら、有力な門人を多数持ち、諸大名との交流を深くする。

40～50才 朱子学の高遠空理の思想に疑問を抱き、日用事物に役立つ学問（孔子を祖とする聖学・実学）へ向かう。朱子学に対する批判が成熟し、素行の儒学についての見解を集大成した『山鹿語類』、『聖教要録』を著す。朱子学を批判したことで、純粹朱子学派の会津藩主保科正之まさゆき、儒学者山崎闇斎あんさい、兵学の師北条氏長により、その罪を問われ、幕府の命として赤穂浅野家へ流謫される。配流中、ますます日本的聖学をうち立て『中朝事実』を著す。

50～64才 保科正之の死、北条氏長の死により素行54才、赦免され江戸へ帰る。晩年の10年間、兵学、道学、儒学などの講義を活発に続けながら、易の概念を用いて独自の宇宙生成論を展開した『げんげんはつき原源発機』を著す。素行64才、黄痘病にかかり死す。最後まで徳川家へ仕官する夢を持ち続けた。

2. 発達段階ごとに見られる特徴

胎生期（母の胎内にいる時）

およそ子既に母の胎内に感じては、母の気血を分けて己れが気血とし、母の感ずる所の善悪に感じてこれを己れが才質とす。故に婦人子を妊む時は、心の物に感ずる所を慎んでその七情（喜・怒・哀・楽・愛・悪・欲）を節ならしむ。すべて母の感ずる所は視聴言動思の間を出ず可からざるなれば、視ることきくことに付き、心の感じ気の動きをつつしみ、いう言語のあわてさわいで内をうごかしめ、怒り急いで内に気をたかぶらしむる、各々その宜を失うなり。その身行住坐臥の時、胎内の子に障らず、四支五体の屈伸を節にして、子に疵付きてそこなうことあらず。飲食をときなつて内にあたりそこなうべき食物を飲食せず、平生翫ぶ処のことわざにも心の感ずる所を善ならしめ、見聞して覚知するの理を正しからしむれば、内に七情の妄りに動ずる事なく、外に邪氣の内をやぶることあらざるを以て、出生するの子形容正しく、かたわなることあらず、才質各々善に感じて人にまさるべし（教戒8、胎教ならびに師・傅・母を撰ぶ）。

新生児期（0～4ヶ月頃）

幼児出生の時は、元気全からず気力強からず、唯だ天地の性心を気血につつまるばかりにして、甚だ幼く甚だ危し。年月ここに重累して、初めて元気つよく気力盛んなるにいたらんとす。故にその間まず養いを以て本と為すなり。たとえば草木の実の初めて地上にめぐみ出で、いぢけな「稚」きに異ならず。この時に俄かに土かいこやしすといえども、急にそだつものにあらず。却って害となるべし。

また木を立て竹をそえてそのゆがめるを直からしめんとするも、早く生を害するになりぬべければ、外よりの害たるべき物をのぞき、内のささわるものを退けて、その生々を全くするにあるのみなり（養札4、養いは道を以てす）。

乳児期（0～1.5才頃）

人の情の出ずる所、七情に過ぎず、いまだもの云わずわきまえずといえども発する所の情すでにこの7つあり。いまだ幼稚なりといいてその養いを道を以てせずんば、養生の術^{みち}をかけ、教戒まことあらずして、ついに天性を全くすること叶わざるものなり。子既に笑いを知る時は、喜ばしむるにその節を以てして、常に嬉戯して喜びに過ぎしむべからず。子ここに泣くときは、怒りをただし憂いをさぐって、その気を順和せしめ、その体を安ぜしむ（養札4、養いは道を以てす）。

幼児期前半（1.5～3才頃）

子既に齒生ずる時は、飲食を与うべきの節なるが故に、既に飲食の礼を以てすべし。既に手に物をとる事を得ば、これに右を以てすべきことを教え、取ることならば先ず箸を取ることを知らしむ。これ飲食の先んずる所なればなり。子よくもの云うことを得ば、みずからの名をいわしめ、父母の称号を知らしめ、上下のいいようを教え、うけこたえの言をしらしむ。知あって物を羞ずることをする時は、ここにおいて長幼の礼、尊卑の品をわかたしめて、言行各々すでに恭敬の義を存す。子よく歩む時は、行歩の礼をならわしめて安静恭謙ならしめ、俄にはしりあわてて行く事なからしむ。これらの教えは、別に法を立てて学ばしむるというに有らず、自然に涵養すべきの義なり（教戒10、教戒に節あり）。

幼児期後半（3～6才頃）

子生まれて3歳にして、殆ど父母の懷を離れ、手足言動、片生に成りぬべし。視聴言動の品々は生まれ出ずるより備わりて、3歳にしてその型少し備わるが故に視聴を政^とさしめ舌内を静かに安らかにして、卑劣凡下の言をつかわしめず、

嬉戯おのずから礼容を設けて、五倫の交接^{まじわり}、飲食・送答の節、その会釈・言語を知らしむべきなり（教戒10、教戒に節あり）。

児童期（6～12才頃）

6歳にして初めてならわしめ教えしむべきの事を始む。男女ともに6歳よりその才の得たらん方をはかり、その好まんずる処に任せて、或いは詩歌にその用法をついでてそらんぜしめ覚えしむべし。男子は既に物読みなんことを知らしめ、その家職を怠らざる道を学ばしめ、女子は柔順のことをしらしめ、女の職たることを嬉戯の間にも習わしむ。7歳にして男女席を同うせず、食を共にせず（教戒10、教戒に節あり）。

A. 男子の場合

8歳にして、門戸を出入し、及び席に即き飲食するに、必ず長者に後る、始めてこれに譲ることを教う。8歳にしては、小学に入り、知愛に足り気力既に全きを以て、戒めを強くして読書・筆画を習わしめ、家職とするの業を勤めしめ、出入り、起居各々礼容を勤めしむ。9歳にして、これに日を数うることを教う。9歳に至りては、男子必ず陽気動く、これ已に物に感ずるのゆえなり。故に能く事物の理を知らしめ、大意を覚らしめ、義理の大法を会得せしめつべし。10歳にして、出でて外傳に就き、外に寄宿し、書（六書）、計（九数）を学ぶ。礼は初めに節^{しだが}う（教戒10、教戒に節あり）。

B. 女子の場合

7歳は女子の血氣已に動くの初めなれば、男女の別を立て、同席に居せず、同じく食せしめざるなり。女子は10歳まで出でず、姆（女師）婉婉聽従（しとやかで従順にすること）を教う（教戒10、教戒に節あり）。

青年期（12～20才頃）

A. 男子の場合

天地の紀統12年にして一巡す、故に12年を一紀という。13年にてまた甲子初まり、天地の気めぐり出ざるを以て、13歳にしては成童の礼あり。15歳は大学に入るの年なれば、15已後はこれを成童と号して、幼稚の法を以てすべからず。

20歳を弱といいて、初めて冠礼を行い、成人の威義をととのう（教戒10、教戒に節あり）。

人既に成人の礼ある後は、師に随い友について学習するの道あれば、さして父母の教戒にのみ係るべき非ざるなり（教戒10、教戒に節あり）。

B. 女子の場合

女事を学びて以て衣服を共し、15歳にして笄（成人の髪型）し、20歳にして嫁ぐ（教戒10、教戒に節あり）。

3. 発達と教育の関係性

教育を行う時期と教え方について

すべて幼児の教戒、その節天の時を考え、その児の質をはかりて、節をたがうべからざるなり。節をたがう時は、或いは煩勞にくるしみ、或いは叶わざることに心をつからかして、小児病氣出で元気おとろえて長成なりがたく、終につとめ行うことを得ざるになりぬべければ、その気の趣向をはかり、義理にひたしそめて、覚えず天徳を会し、人としてはかくの如くあるべきのことわりなるを平生にならわしひたすを以て教戒となすべきなり。必ず年数にかかわるべからず。必ず読書文学によるべからず。平生の言行則ち事物の法則たらしむべきなり（教戒10、教戒に節あり）。

ひそかに案ずるに、その節いまだ至らざるを、しいてこれを教戒する時は、節を失うがゆえに、教戒皆煩勞して益なし。その節を詳らかに考えて、時分に相応いたせる教えを専らとし、その間に前後本末を校量して、さきんずべきことをまず教うる如く仕る可きなり（教戒10、教戒に節あり）。

小児幼稚の教うる所、別に制法を立ててこれにのつとらしめるとせば、平生と別になるを以て、幼童氣をくるしめ、陽氣屈するに至るべし。唯だ飲食・交接・嬉戯の間、自然に涵養するに成人の道を以てして、その遊行の間各々家業を学ばしむるに至らん事、これ知を善に長じ、才を世事に達せしめ、徳を天性にかえらしむるのゆえんなり。この法正しからざるを以て平生と学習を別なるを以て、ならうと教えると差別して困と佚するとに至る事、その本大いにたが

えばなり（教戒11，事業を^{おぼ}辯う）。

幼児教育の重要性について

人若（わか）・壮（さかり）・老（としより）に因ってその事業に相違ありといえども，幼弱の時に習える気象は末期までひとしきものなり（養礼4，養いは道を以てす）。

女子教育について

すべて女子を教戒するの道，男子にことなるべからず。唯だその柔和随順を本として，その職をつとめ，佚楽・遊戯に由りて耳目に非礼非義を視聴せしめざるのみなり。その道とする処は，聖賢の大意によらしめざれば，事物の義理をわきまうる事叶う可からざるなり。故に柔順を以てすれば，節を守り^{みま}操立つ事正しからず，夫を諫めて婦の道をただし子を教えて母儀を全くすることを能わず（教戒14，女子を訓う）。

子孫の教戒，多くは母儀の善悪に依るべきなり。かれこれ，そのかかる処甚だ重し（教戒14，女子を訓う）。

考察

発達に関する素行の考え方は，胎児期に始まり，青年期をピークとして終了している。多くの内容が，0～12才までの事柄について言及している点から推量すると，素行は人の発達が幼い時ほど経験によって影響される度合いが多であり，その度合いは年令とともに減少していくという発達の可塑性を認めていると考えられる。従って，胎児期，乳児期，幼児期，児童期の経験が，子供の発達にとって不可欠であることを熱心に述べている。子供がどのような経験ををするのかは，子供の生育環境，すなわち家庭環境によって多く決定される。家庭環境は，子供をとりまく人間関係によって形成される。当然，子供にとっての重要人物は，父親と母親であるため，素行は父親の役割と母親の役割が子供の発達を促す基本的要因であると見なしている。本研究の文献として用いた

『山鹿語類』巻16父子道は、父親のための教訓書という形式で構成されている。素行は父と子の関係を「情欲を顧みて天性の自然なるままに、父慈あり子孝なん事、これすなわち父子の道なり」（父道1，総じて父子の親を論ず）と説明している。素行によると、子供の発達は、天性に基づく親との人間関係によって生じる。そして、子供をとりまく人間関係は徐々に幅広く複雑になり、さらに子供の発達が促されるのである。素行の説く五倫の交接まじわりとは、君臣、親子、夫婦、兄弟、朋友との人間関係のあり方を大変詳しく説明したものである。これらの人間関係を正しく理解し、長く保持していく能力は、幼い時からの経験によって培われなければならない重要かつ生存に必要な社会性の発達と見ることが出来る。

素行は、発達の基準として年令を細かく記している。しかしながら、杓子定規に年令そのものが、実際の子供の発達状況をありのままに表していると理解することは危険であるということも忠告している。「すべての幼児の教戒、その節天の時を考え、その児の質をはかりて、節をたがうべからざるなり。（その節は）必ず年令数にかかわるべからず。必ず読書文学によるべからず。平生の言行則ち事物の法則たらしむべきなり」（教戒10，教戒に節あり）。素行は、年令だけにとらわれず、子供の個人差とともに、教育を行う時期を考慮する必要性を述べている。適切な発達状況に合った教育が行わなければ、子供は病気になるほどに苦しみ、子供の成長に害となることを主張している。そして素行は、子供の発達状況に従って、全体を理解させるためには、まず簡単なものから教えるという、教育方法を工夫する重要性も提案している。「その節を詳らかに考えて、時分に相応いたせる教えを専らとし、その間に前後本末を校量して、さきんずべきことをまず教うる如く仕る可きなり」（教戒10，教戒に節あり）。聖經賢伝などを著したむずかしい本の内容でも、教え方を工夫することが重要であるとし、その教え方は、日常生活のなかでの経験に準じたものでなければならないと述べている。さもなければ、子供の意欲は失われてしまう。学習は日常生活のなかでの経験を通してこそ身につくものだからである（教戒11，事業をなげう）。

素行は、文字読書に偏った知的発達を否定している。素行は日常生活のなか

で得たすべての経験を通して形づくられる、身体的能力、知的能力、情緒的能力、社会的能力などのすべてが調和的に発達することを目ざしている。博学な知識を展開する人物よりも、実生活の中で実践的に知識を役立てる能力（知と行の両方）を持つ人物を育てることが、彼の教育目標なのである（教戒13、知行の効を量る）。実生活のなかで、実践的に知識を役立てる能力は、子供をいつまでも子供あつかいせず、大人として対応し、少しずつ実社会での経験を積み重ねるうちに獲得していくものである（教戒13、知行の効を量る）。親は子供をいつまでも子供あつかいしては、子供のためにならないと説いている。子供が成人（20才）に達した時には、すでに父母の教えばかりに頼らず、本人の志に従って師、友を求めて学習することが大事である（教戒10、教戒に節あり）とも述べられている。素行は成人（20才）を親と子の精神的分離の時、ならびに子の独立の時と考えていたのではないだろうか。

素行の女子に関する発達と教育に関する考え方をしてみると、男子との本質的な差を認めていない。女子はその形態・生質が、柔和随順による所から男子と異なるように見えるけれども、本質的には男子と同じように実生活のなかで実践的に役立つ人物となることが重要視されている。女子にも男子と同じように聖賢の書を読み、婦道を正すことを課している。「すべての女子を教戒するの道、男子にことなるべからず」（教戒14、女子を訓う）。

上述の事項をまとめ、発達に関する素行の考え方を考察すると、第一に素行は発達の可塑性を認め、胎児期、乳児期、幼児期、児童期における発達は経験（環境）によって多大に影響されると考えている。第二に、素行が重要視したと思われる社会的発達は、基本的には親子関係の経験から生じ、後々子供をとりまく人間関係（五倫の交接）を通しての経験によって促進されると考える。第三に、発達は年令によって判断するべきではなく、個人差を考慮して各子供の発達状況に合った教育内容と教育方法を工夫しなければならない。その教育内容と教育方法は、子供の実生活の経験と関連したものでなければならない。さもなければ、子供の意欲を失い、子供の発達を妨げる。第四に、素行の考える発達とは、すべての諸能力が調和的に発達することを意味する。知と行のバランスよく発達した時、人は実践的に役立つ人となれるのである。親と子は天

性に基づいた関係であるけれども、子供の年齢が20才前後になった時、親は子供から精神的分離をすべきである。それは子供にとって有益な発達課題の一つであると考えている。

本研究は、素行が著した『山鹿語類』巻16父子道1のみから、発達に関する素行の考え方をとらえたので、不十分な点が多く見うけられた。今後は、背景となる素行の思想の変遷（朱子学→聖学・実学→古学ならびに、兵学→士学）を理解するとともに、素行が生きた時代、素行の人物考証なども含めて、分析を深める必要がある。

引用文献

- 安藤延男編著 1986 教育心理学入門 福村出版
Gesell, A. 1943 Child Development. New York : Harper & Row, Pub., 1949
堀勇雄 1987 山鹿素行 吉川弘文館
Hunt, J. Mcv. 宮原英種・宮原和子（訳） 1978 乳幼児教育の新しい役割 新曜社
村上敏治・玖村敏雄編 1965 山鹿素行・吉田松陰集 玉川大学出版部
Piaget, J. 1964 Development and learning. In R. Ripple & Rockcastle (Eds.), Piaget Rediscovered. Ithaca, N.Y.; Cornell University Press, 1969.
Watson, J. B. 1924 Behaviorism. New York : W.W.Norton & Co., Inc., 1970.
山住正巳・中江和恵編 1983 子育ての書1 平凡社

MINORITIES IN NEVERLAND

Class, Race and Sexuality in “The Buddha of Suburbia” and “The Swimming Pool Library”

鈴木 順子

Hanif Kureishi ⁽¹⁾ の小説 *The Buddha of Suburbia* ⁽²⁾ の主人公 Karim Amir と、Alan Hollinghurst ⁽³⁾ の小説 *The Swimming Pool Library* ⁽⁴⁾ の主人公 William Beckwith は、いずれも二重の意味で疎外されたマイノリティである。すなわち Karim は「黒人」で、William は「貴族」なのだが、これには少し注釈が必要だろう。

Karim は厳密には英国在住のイスラム系インド人 ⁽⁵⁾ の父と、英国白人の母との間に生まれた二世である。Kureishi の作品には自伝的要素が濃厚なものが多いが、作者自身もパキスタン人と英国人の混血であることを思うと、Karim もある程度までは作者の分身と考えられる。

一方の William は子爵 Lord Beckwith の孫である。貴族をマイノリティと呼ぶのは抵抗もあろうが、統計的には英国で最も数少ないマイノリティ・グループに属し、独自の生活様式や習俗をかたくなに守り、他のグループとあまり交わらず、同一階級内のごく限られた狭い世界で暮らしているという点からみれば、これまた一種の少数民族とみなしても差しつかえあるまい。

さらにこの二人はセクシャリティの面でも少数派に属している。つまり、Karim はバイセクシャルで、William はゲイなのだ。この性的嗜好を除けば、片やインド系二世、片や貴族の孫と、Karim と William の間には、なんら共通

する面はないように思える。しかし両書を読み比べれば、読者はこの二人の間に奇妙な類似性、あるいは互いに共鳴しあうエコーのようなものがあることに気づくだろう。

このような複雑なバックグラウンドを持った人物を主人公にする場合、やはり問われるのはアイデンティティの所在である。いちおう作品中では、Karimのアイデンティティは「黒人」であることに、Williamのアイデンティティは「ゲイ」であることに置かれている。そこで、まずはその観点から両作品を読み解いてみよう。

1. Race

しかし、Karimの黒人としてのアイデンティティは非常に曖昧だ。確かに英国における黒人の差別と受難は、この小説の随所にも垣間見ることができる。KarimのガールフレンドEleanorの以前の恋人はWest Indianだったが、黒人差別に苦しみ自殺した。Karimの父の友人、Anwarの店はレイシストの襲撃におびやかされている。Anwarの娘婿Changezは、National Frontに襲われる。しかし、それに対するKarimの反応は、ほとんど冷淡と言ってもいいくらい無関心だ。少なくともネオ・ファシストと戦うため体を鍛えている、幼なじみのJamilaのような強い意識は持っていない。

むろん彼も自分が差別の対象になったとき、たとえば少年時代、ガールフレンドのHelenの父親に、彼が黒人だという理由で犬をけしかけられたときは気を悪くする。しかし、それに対しては、彼女と寝るだけで復讐を果たした気になって満足するのだ。また、舞台役者になって初めて*Jungle Book*のMowgliの役を与えられたときは、肌を‘shit-brown’に塗ることと、インドなまりで話すことを強制され、前者はしぶしぶ受け入れるが、後者は「政治的理由」から拒否する。

しかし、その政治的信念なるものはなはだ疑わしいもので、結局はそれも受け入れる。後には芝居の稽古の中で、Anwarをモデルに演じて見せたときには、かえってそれが不必要に黒人を貶めるもの、白人が見る黒人像そのものだ

と言われ、共演者のひとりに「どうしてあなたは自分とあらゆる黒人をそんなに憎んでいるの？」と非難される。

しかしKarimは自分も黒人も憎んではない。肌を塗るのを拒むのは彼が並みはずれたナルシストであるせいもあるが、インド・アクセントを拒否するのは、彼が実際にそんなしゃべり方をしないからだ。そして彼が演じるAnwarが滑稽で愚かな人物に描かれているとすれば、それは彼が内心Anwarを軽蔑し、見下しているからにすぎない。

このKarimの態度の曖昧さは、彼がインド人とイギリス人の混血、黒人と白人の混血であることに起因しているように思われる。そしてこの種のアイデンティティ・クライシスは作家自身の体験に基づいているものと推測される。

Kureishiはバックグラウンド（インド系、イスラム、裕福な階級の出身、英国在住）からいうと、Sulman Rushdieと比較すべき作家で、実際Rushdieとは親しい友人同士だが、決定的な違いもある。それはKureishiがイギリス生まれで、混血で、世代が違うということだ。したがって、Rushdieよりは作風もはるかにイギリス的、白人的だし、宗教にまったくコミットしないことも違う。（ただし、Anwar一家のエピソードは、明らかにRushdieを思わせる土俗性や、おおらかなユーモアも感じさせる）

つまり彼はイギリスとインドという二つの祖国の間に引き裂かれているわけだが、事実彼自身、かなりのアイデンティティ・クライシスを体験してきていることは、その二つの祖国を論じたエッセイ、*The Rainbow Sign* を読むとわかる。

たとえば小学校時代、教師が半裸の子供が地べたにすわって、手づかみで物を食べているような写真を見せて、「Hanifはインドから来たんだよ」とクラスで説明するのを聞いて当惑をおぼえる。彼の知っているインドの親戚は、高級スーツを着込んで、高級ホテルに泊まっていたからだ。そういうわけで、子供時代は白人になりたいと思っていたという。しかし60年代、Enoch Powellの発言やレイシストの迫害を受ける黒人の姿を見て、逆に黒人としてのプライドと闘志に目覚める。

しかしその後、劇作家として地位を確立してからパキスタンへ旅行して、再びアイデンティティが揺らぎ始める。当地では有力者揃いの親戚の歓待を受けるのだが、かえってカルチャー・ギャップに苦しんだらしい。たとえば、彼が自分はEnglishmanだと言うと、「黒い肌をして、イスラム名を持つイギリス人などあるものか」と言われて笑いのものにされ、今度は突然、英国への愛国心に駆られる。ただし、彼が愛国心を感じるのは英国の外へ出たときだけだというが。そしてイギリスへ帰ってくると、今度はまた逆カルチャー・ショックを味わう。

しかし、もちろんKarimはKureishi本人ではない。Karimが自分のアイデンティティについて思い悩むことはほとんどない。Jungle Book のリハーサルでのKarimの怒りは、むしろ自分がインド人と見られたこと自体に腹を立てているようだ。実際、演出家は彼がインドの言葉を一言も知らず、インドへ行ったことすらないのを知って失望する。

むしろ黒人であるゆえの苦悩を味わうのは、移民一世の世代であるKarimの父Haroonと、その友人Anwarである。インドの上流階級に生まれ、ロンドンへ留学したHaroonは、カルチャー・ショックに悩まされることになる。

しかし、父さんはイギリスにおけるイギリス人の様子に驚き、元気づけられた。彼は貧しいイギリス人、道路掃除や、ごみ集め人夫や、店員や、パーティーをしているイギリス人を見たことがなかった。(中略)それに、父さんが地元のパブで、パイロンについて議論をしようとするとき、必ずしもすべての英国人が字が読めるとは限らないし、狂った変態男が書いた詩について、インド人に講義を受けたいと思ってはいないということを、注意してくれた者はひとりもいなかった。(BOS, 24-25)

それでもHaroonは、白人女性と結婚し、役人になり、郊外に居をかまえて英国社会に順応するが、より悲惨なのはAnwarである。彼は苦勞して軌道に乗せた食料品店を継がせるために、ひとり娘のJamilaの婿として、インドから

Changezを呼び寄せる。しかし、英国育ちの現代っ子であるJamilaは、このarranged marriageに反発し、命がけのハンストを執行したAnwarに根負けして結婚は承諾するものの、夫婦の契りは断固として拒否する。それにChangezは店の商売にはまったく関心を示さず、ペイパーバックを読みふけているだけの役立たずであることがわかる。さらに彼の店は、ネオ・ファシストたちに脅かされている。狼狽したAnwarはChangezにすべての怒りをぶつけるが、あくまで旧弊なインド的価値観から抜けきれない彼の態度は、妻や娘の反発を招くだけである。この種のインド対イギリス、一世と二世のジェネレーション・ギャップの相克は、Kureishiの他の作品にもよく見られる。

彼は日本人娼婦Shinkoと連れだって歩いているChangezに襲いかかるが、Changezに逆襲され、心臓麻痺を起こす。しかし、すっかり家族にも見放されている彼を見舞う者はひとりもいず、最後は寂しく病院で息を引き取る。そのAnwarの葬儀で、Karimは初めて殊勝なところを見せる。

だけどぼくは、この奇妙な生き物——インド人たち——を見ながら、ある意味で、この連中はぼくの仲間なんだと感じた。そしてぼくはそのことを否定し、避けるために一生を費やしてしまった。ぼくは自分を恥じ、同時に不完全な気がした。まるでぼくの半分が欠けていたかのように。まるで敵、つまり、インド人を自分たちと同化しようとする白人と共謀していたかのように。(BOS, 212)

The Swimming Pool Library もまた、奇妙な形で黒人と関わっている。すなわち、メイン・キャラクターのWilliamとCharlesはどちらも「黒人好き」のゲイなのだ。その意味するところについては後述する。

2. Sexuality

ここで、*The Swimming Pool Library* に目を転じよう。さきほどWilliamのアイデンティティはゲイであることにあと述べてきた。

ここでゲイ文学の系譜や意義について論じるつもりはない。ただ、差別と迫害の歴史、近年の権利意識の芽生えなどの点では、黒人文学、フェミニズム文学にも通じる、これまた一種のマイノリティの文学とはいえよう。しかし、文学はセクシャリティでは分けられない。男性文学とか女性文学というものがないのと同じで、ゲイ文学というくり方をするのは抵抗を覚える。にもかかわらず、*The Swimming Pool Library* は純然たるゲイ小説である。

この作品には女性キャラクターはただのひとりも登場しない。名前だけ言及される女性としては、Williamの母と姉のPhilippaがいるのだが、母が会いにくるというときは口実を作って断わるし、甥のRupertが家出してきたときには、当然Philippaが来るかと思いきや、迎えに来るのは義兄のGavinであるという念の入れようだ。町へ出ても、Williamの目に映るのは男性だけ。登場人物のほとんどもゲイで、ストレートの男性は義兄のGavinや祖父のLord Beckwithなど、ごく限られた人々だけである。

Williamにあこがれている6歳のRupertが、Williamのアルバムを見ながら「ほとんどみんなホモなんだね、男の子って」と感心すると、Williamはためらいながら「ほくもときどきそう思うよ」と答えるが、読者もそう信じさせられそうになるほどだ。些細な日常生活のディテールまでが、日記のように克明に記されるWilliamの生活には、女性の存在する余地はないかのよう、まるで女性の存在しない世界に住んでいるかのようだ。そして事実そうなのである。

一方の*The Buddha of Suburbia* は、Karimのバイセクシャリティを反映してか、登場人物も男女半々だし、同等の重みを持って描かれる。Karimのセクシャリティについては、彼自身の釈明がついている。

ぼくが女の子たち同様、男の子たちとも寝たいと思うのは普通じゃないとわかっていた。(中略)でも、どちらか一方を選ばなきゃならないと言われたら、胸が張り裂けてしまっただろう。これについてはあまり深く考えないことにしていた。もし倒錯者だってことになって、治療とか、ホルモン投与とか、脳に電気ショックをくらうなんてのはごめんだから。考える

とすれば、ほくはラッキーなんだって考えるようにしていた。だって、パーティーへ行っても、男女どっちでも家へ連れて帰ることができるんだから。(BOS, 55)

この気楽な口吻からもわかる通り、Karimは自分のセクシャリティをあまり深刻には考えていない。むしろ*The Buddha of Suburbia*で驚かされるのは、それに対する周囲の反応である。ゲイ小説ではカミング・アウト（ゲイであることを家族や知人に打ち明けること）が大きなテーマ、あるいは事件の発端になっていることが多い。*The Swimming Pool Library*のWilliamは、なにしろゲイだけの世界に住んでいるので、その必要も可能性もなさそうだが、Karimは平凡な中流家庭の子供である。しかし、17歳のKarimが友人のCharlieとセックスしているところを、父親とCharlieの母親Evaに見つかっても、なんら騒動には発展しないのである。

一方のWilliamには釈明の必要はない。彼にとってゲイであることは呼吸するように自然なこと、むしろヘテロセクシャルは理解の及ばない遠い世界のことのように描かれる。

先にも述べたように、Williamは二重の意味で閉ざされた世界に暮らしている。ロンドンに住むWilliamが足しげく通うのは、クラブ、公園、アスレチック・ジム、ゲイ・パブ、ゲイ・ディスコ、ゲイ・ボルノ館などごく限られた場所だけであり、小説の大半は、そういう場所におけるWilliamの男あさりの描写に割かれている。彼はまるで水槽の中を回遊する艶やかな熱帯魚のように見える。しかしその水槽のガラスは透明で、「ノーマルな」人々の目には見えない。Williamが暮らしているのは、普通のロンドンと同時同所に二重写しに存在する、もうひとつのロンドンなのだ。

そんなWilliamの、気楽な有閑生活に石を投じるのは、もうひとりのゲイ貴族、83歳になるCharles Nantwichである。ふとしたきっかけからCharlesの命を救ったWilliamは、彼に自分のBoswellになってほしいと頼まれる。つまりゲイとして生きた愛と受難の歴史を、Williamに伝記として書いてほしいという

のだ。Williamはしぶしぶながらこれを引き受け、読むようにと言われてCharlesの膨大な日記を手渡される。

しかし、その日記を最後まで読んだとき、真相が明らかになる。1954年、Charlesは性犯罪で（当時は同性愛そのものが違法であった）投獄される。そのゲイ・パージの功績で貴族に叙せられた男の記事をThe Timesで読んだCharlesは、この男を憎もうと心に決める。その男Denis BeckwithこそWilliamの祖父で、つまりこれはCharlesによる一種の謀略だったのだ。

Swimming Pool Library のもともとの意図は、新旧ふたりのゲイ貴族の生き方を対比することで、英国の同性愛者の過去と現在を浮き彫りにしようというところにあったと思われる。しかし、*The Buddha of Suburbia* の黒人受難が、Karimの目を通すと、悲しくはあるがいささか滑稽で、危機感と現実味を欠いたものになってしまうのと同様に、Charlesの受難とゲイの苦難の時代もまた十分描ききれているとはいえない。

これは意図的なものなのか、アフリカの植民地での監督官暮らし、英国での政治闘争、そして投獄と、Charlesの方がはるかにドラマティックな人生を生きてきたはずなのに、そちらには重点を置かず、小説はあくまでWilliamの視点から語られる。現在のCharlesはほとんど語らず、彼の物語はもっぱらWilliamが読むCharlesの日記の中でしか知ることができない。むしろ、Charlesが黙して語らないのは、Williamに自ら真相に到達させようという目論見があるからだ。しかし、Williamに「夢の中で迷子になったよう」という印象を抱かせ、「事実は無だ」(SPL, 240) と言い切るCharlesの日記は夢想的かつ抽象的で、それもWilliamが興味本位に拾い読みしたところしか出てこない。彼の経てきたドラマと歴史がわかりにくい。

もちろん現代の物語の中でも、ゲイの受難は見受けられる。Williamの親友Jamesは、警官とは知らずに男を誘って逮捕される。Charlesの作ったBoys' ClubはNational Frontの攻撃を受ける。黒人であることで、なら実質的被害は被らないKarimと違って、Williamは彼自身、肉体的被害を受ける。行方をくらました恋人Arthurを捜して、East Endを訪れたWilliamは、スキンヘッド

の三人組に捕まり、‘nigger-fucker’として袋叩きにされるのだ。しかし、それさえもWilliamに本当の傷を与えることはできない。彼が何よりショックを受けるのは、自慢の美貌が一時的に損なわれたことなのだ。

これまで見てきたように、明らかに被差別マイノリティである黒人やゲイであるにもかかわらず、この二人の主人公はおよそそのことに拘泥せず、その差別や受難もまた十分に描ききれてはいないどころか、むしろ卑小化されているとすらいえる。これはこの二本の小説の欠陥だろうか？ 私はそうは思わない。これらの小説の目的は、黒人なりゲイなりの被害者意識を声高に訴えるところにはないからだ。むしろここから読みとれるのは、もうひとつの社会的要因、階級制度である。

3. Class

ここでざっと両作品の階級分布をながめてみよう。

Karimの生まれた家庭は典型的な郊外の中流階級である。父のHaroonはインドでは上流階級だったが、イギリスでは役所に勤めている。母のMargaretは労働者階級の出身で、この二人はinterracial marriageになるわけだが、この種の結婚はそれによって白人の方の階級が上がる場合が多い。事実、MargaretはHaroonと結婚することで階級の梯子をひとつ昇ったわけだし、夫のインドでの裕福な暮らしを自慢の種にしている。

そのMargaretの姉夫婦は、いかにも労働者階級らしい、かたくなで保守的な人々だが、それを容認しているのは、やはりHaroonが階級が上の「黒人」だからだろう。しかしMargaretの義兄のTedがHaroonを決してインド名で呼ばず、Harryと呼ぶのは、内心黒人が親戚にいるのを恥じている証拠である。

Eva、Charlie、演出家のPykeらは裕福なアッパー・ミドル・クラス、Anwarは自営業なのでロウワー・ミドル、Eleanorは父がアメリカ人銀行家なので判別しにくい、母はQueen Motherの友人だというから上流階級とみなされる。そう思ってみると、EvaやPykeのリベラルな考え方はまさにアッパ

一・ミドルのものだし、Anwarの勤勉さや保守性も、インド的というよりはむしろロウワー・ミドル特有のものである。

一方、*The Swimming Pool Library* に目を転じると、貴族であるWilliamやCharlesは文句なく上流階級、Williamの親友JamesはOxfordの同級生だが、医師という職業を持っているので中流階級、ArthurやPhilなど、Williamの恋人たちは例外なく労働者階級である。同じゲイでもJamesのまじめさや良識はいかにも中流階級的であるし、Philの内気さもまた労働者階級的である。

両作品の主人公もまた、それぞれの階級の特質をはっきりと備えている。Karimの上昇志向、すなわち成功、名声、富、安楽な生活への飽くなき欲望は、きわめて中流階級的である。たとえば、金に対するKarimの考えは次のようなものだ。

そのとき、ぼくは自分が金を愛していることを知った。金と金で買えるすべてのものを。もう二度と文無しにはなりたくなかった。なぜって金はこういう暮らしを毎日買えるんだから。(BOS, 248)

ぼくは自分の気前の良さを楽しみ始めていた。他人を喜ばせる快感を感じた。特に金の力が伴っているときの。(中略) ぼくはもっとこういうことをしたい。それはまるで、ぼくが突然自分の得意な何かを発見したようだった。そしてそれをノンストップで実行したかった。(BOS, 283)

同じ金持ちでも、生まれながらの上流階級であるWilliamは、こういう快楽を味わうことはできない。

そのWilliamと、やはり貴族のCharlesもまた、昔ながらの貴族的性質をもち持っている。この二人は25歳と83歳という大きな年齢差があり、性格も経歴もまったく異なるのに、不思議と似た者同士という印象を与える。もちろん二人ともゲイだというせいもあるだろうが、それより共通の階級に属するせいと考える方が自然だ。

たとえば、自己中心的で、他人の目をいっさい気にしない傍若無人なところ。

人前でわざと男といちゃついてみせたりする。歯に衣きせないものの言い方も、Williamの友人たちは魅力的と見ているらしいが、単なる無神経さの表われである。些細なことだが、人に電話をかけるとき、必ず相手が出る前に一方的に話し始めるといふCharlesの癖も、彼の自己中心性の表われである。

さらに、人に対して支配的などころ。同時に、目下の者に対して保護者的にふるまうところ。特にCharlesはその気質が強い。それにくらべるとWilliamは、公共心など毛ほどもない人間だが、それでも何か人の役に立つことをしなければという気持ちがつねにある。

感情の起伏が激しいこともそうだ。イギリス人は感情を表に出すことを嫌うというが、それは中流階級の価値観で、貴族はまるで子供のように喜怒哀楽が激しい。WilliamはJamesが熱烈に崇拜し、Charlesの個人的知己でもあったRonald Firbankの小説を読んで、Firbankの登場人物は子供のように言い、Charles自身もFirbank的だと言う。

「ぼくが気に入ったのは、そこのところなんです。大人を子供のように見ること。彼の描く大人は大人の威厳なんかもっていない。みんな気まぐれや好みに従って気ままに行動する、甘やかされた子供のようにです」(SPL, 242)

Charlesは否定するが、この形容はCharlesにも、そしてもちろんWilliamにも、そっくりそのまま当てはまる。

4. Race and Class

「人種差別は階級不平等と手を携えて歩む」⁽⁶⁾とKureishiは述べている。彼が英国にあこがれるパキスタンの支配階級に、英国での差別のことを話すと、相手はそれはそういう移民が貧民だからだ、そういう連中は差別されて当然なのだという言い方をする。それにくらべ、自分たちのように教養があって裕福なパキスタン人なら、そういうことは起こらないと信じているのだ。しかし、

Kureishiが言うように、レイシストは家に火をつける前に、「お宅には運転手がいるかい？」とたずねたりはしない。

当然、*The Buddha of Suburbia* の中でも、黒人問題と階級制度の問題は切り離せない。その好例がKarimの父Haroonである。タイトルの『郊外の仏陀』とはHaroonのことだ。突然、東洋哲学にかぶれたHaroonは、一種の導師として、郊外の有閑階級の間でもはやされるようになる。それは彼に（ひいてはKarimにも）上の階級への足がかりを与え、富と成功をもたらすのだが、彼がアッパー・ミドル・クラスに賞賛をもって受け入れられるのは、彼が黒い肌をした「アジア人」、言うなれば珍奇な見世物であるからにはほかならない。

同様に、KarimがEleanorとの関係で覗く上流社会では、Heaterという男が特別待遇を受けている。Heaterは粗野で無教養な、太った醜いスコットランド人道路清掃夫なのだが、まさにそれゆえ、一言でいえば労働者階級であるゆえに、皆に一目置かれる立場にある。

もしヒーターを敬愛しなければ——ほくは彼のむかつくようなすべてが大嫌いだ——そして彼の言うことに、プロレタリアートの権威の御託宣として耳を傾けなければ、もし中流階級ならば（それは生まれながらにしての犯罪者、誕生のときから墮罪を犯していることになる）、仲間やそのシンパから、スノップ、エリート主義者、そして原ゲッベルスというレッテルを貼られてしまうのだ。（BOS, 175）

これはいずれも一種の逆差別だが、ここで「黒人」と「労働者階級」がまったく等価に扱われていることに注目してほしい。すなわち、労働者階級もまた、一種の黒人なのだ。

しかし、先のパキスタン人の例と同様、労働者階級の中にも差別は存在する。KarimはTerryという名のウェールズ出身の役者兼政治活動家と親しくなるが、ワーキング・クラスを讃美するTerryに対して、Karimは郊外の労働者階級のことを思って否定的だ。「ほくは郊外のプロレタリアートは強い階級意識を持っていると言ってやりたかった。それは悪意と憎悪に満ちたもので、もっぱら

自分より下の者に向けられているのだ」(BOS, 149) つまるところ、差別とは自分より下の者を迫害して優越感を楽しむことであって、それが肌の色であっても階級であっても同じなのだ。

人種と階級の似たような関連の構図は*The Swimming Pool Library*にも見られる。先に述べたように、WilliamとCharlesはともに黒人を偏愛している。Williamに言わせると「黒人を神格化している」Charlesが黒人を愛するのは、庇護し、守ってやらねばならない人々として見ているからだ。アフリカ時代、サソリに刺されたエジプト人少年Tahaを助けたCharlesは、彼の寝姿を見ながら、‘He was my responsibility made flesh.’ (SPL, 210) と感じ、彼のことを「自分は決して持つことのない息子」とさえ考える。

それに比べると、Williamの黒人好きの根拠はいささか薄弱に見える。Jamesは、Williamが同棲している17歳の黒人少年Arthurと、どうしていっしょにやっていけるのか不思議がり、「彼を愛しているのかい？」とたずねるが、Williamはあっさり否定し、「ただのほせているだけなんだろう。時には彼のことをぜんぜん知らないような気がする。それがちょっとした薬味になるわけさ」(SPL, 20) と答える。

この関係について、Williamは次のように感じている。

今ではそれは、いささかうさんくさいものになってきた。この関係で、ほくらは二人とも相手を利用している。ほくの役割は病的な保護者の感情に駆られた保護者というところだ。そして彼は、ますますほくの奴隷、ほくの玩具になってきた。あからさまなぐらい意識的な自己卑下が、ほくをうんざりさせると同時に興奮させるのだ。(SPL, 31)

Arthurの無力さ、依存性はWilliamをいらいらさせるが、反面、そういう彼をいとおしく思い、守ってやらねばならないという本能的衝動には逆らえない。つまり、Williamの方が率直で、Charlesのほうが多少思慮深いというだけで、この二人の黒人に対する感情の本質は同じなのだ。

だから、Williamも、Arthurが麻薬がらみの犯罪に巻き込まれ、行き先を告げずに姿を消したときは、彼を捜してArthurの家族が住むEast Endを訪れる。Williamが彼の閉ざされた世界から外へ足を踏み出すのは、この時だけである。そこで目に触れた貧困や荒廃は、Williamに一種のカルチャー・ショックを与え、なおかつ魅了する。「ほくはこんな世界で、怒りや軽蔑や苦痛に耐えることを強いられているホープ一家のことを——直接には知らないが——あこがれを込めて考えた」(SPL, 171)

こう見てくると、CharlesやWilliamが黒人に惹かれるのは、自分とは別世界(それも下位の世界)に属する異種の生物であるからと思える。これはThe Buddha of SuburbiaでのHaroonや、Heaterが受ける扱いとまったく同じである。さらに、WilliamやCharlesの恋人たちは、白人であれ黒人であれ、例外なく労働者階級である。Charlesの保護者的愛情、Williamの侮蔑と優越感がないまぜになった愛情は、いずれも相手が目下であるからこそ成り立つものなのだ。

ちなみに、Karimの愛人たちは、Jamilaを除くとほぼ全員が彼より階級が上だが、これは彼の中流階級の上昇志向の表われと考えられる。

5. Minorities in Neverland

それではあらためて主人公に着目しよう。KarimとWilliamに共通点があるとすれば、それはセクシャリティよりもむしろ、この二人の青年の怠惰さと、虚栄心とうぬぼれの強さ、自己中心性である。たとえば、この二人の職業に対する意識は次のようなものである。

そういうわけで、ほくは引退する気になった。特にやりたいことは何もなかった。何かをしなきゃならないということもない。ただ何もしないでぶらぶらしながら、何が起きるのかを見ている、それがほくには合っていた。税関吏や、プロ・フットボール選手や、ギタリストになるよりも。(BOS, 63)

ほくは職がなかった。いや、苦労話をしようというのではない。不況の

犠牲者でもなければ、統計上の数字のひとりでもない。意図的に、あるいは少なくとも承知の上で、仕事を離れたのだ。ほくは金のありあまった、例の事実上ほとんどすべてを所有している、ごく少数の人間のひとりだった。ほくは何もしないでいるという誘惑に負けたのだ。もっとも、何もしないでいるのもけっこう忙しかったが。(SPL, 3)

この「何もしたくない」という怠惰さは二人に共通している。Williamと違って働かなくても食べて行けるような境遇にはないKarimは舞台役者になり、WilliamはCharlesの伝記作者になるが、その態度は少しも変わらない。出世と成功を求めるKarimは、演技には熱心に取り組むが、彼のもともとの志望動機は「写真家か役者かジャーナリスト、それでもできれば、カンボジアとかベルファストとかの争乱地域の外国特派員になりたい」という、単に聞こえのいい職業を並べただけである。一方のWilliamは、伝記を書くことは引き受けたものの、単に好奇心と周囲の説得に負けただけであり、実際には最後まで一文字も書いてはいない。

そして虚栄心。「きみの辞世の句は『あたし、きれい?』(“How do I look?”)というんだらうな」とJamesに冷やかされるWilliamは言う。「ほくの虚栄心——あまりにも本質的なものなので、実質的には虚栄心とすら言えないのだが……」(SPL, 176) 美しい容姿、若さ、健康は彼の最大の拠り所である。

一方、Jamilaが‘Vanity, thy name is Charlie.’(BOS, 75)と云うのを聞いて、Karimは彼女が彼の本質を見抜いていることに感心するが、この科白はそのままKarimにも当てはまる。同様に、彼はCharlieの母Evaに「あなたはきれいよ。そしてきれいな人は何でも欲しいものを手に入れるべきなの」と言われて、「それじゃ醜い奴はどうなっちゃうのさ」と反論するが、彼女の「醜いのはその人の責任よ。憐れむべきじゃなく、責めるべきね」という答を聞いて、「Charlieがああ残酷さをどこから受け継いだかについて考えさせられた」(BOS, 93)と述べる。

しかしそう言うKarimは、自分もこの親子とまったく同じ虚栄心と残酷さの

持ち主であることには気づかない。つまり、ChangezにJamilaが自分と寝てくれる可能性はあるだろうかと訊ねられたKarimは、「きみは彼女には醜すぎるよ」と言下に否定し、そう言いながらショーウィンドーに映ったおのれの姿を見て優越感に浸るのである。

残酷さといえば、これまたWilliamも残酷だという言い方をされる。「Willはますます残忍に、ますますセンチメンタルになっている」(SPL, 5)と、Jamesは日記に書く。彼が飽きてしまった恋人をあっさり放り出すのを見て、Jamesは残酷だと言って責める。Williamは「時には友達のJamesがほくの他我になった」(SPL, 5)と言うが、これは換言すれば、JamesがWilliamの良心の声を代弁しているということだ。「ほくはCharlieにとって等身大の鏡にすぎない」というKarimの親友(にして愛人)のCharlieは彼と似た者同士だから、WilliamはKarimよりは自分の欠点を意識しているといえる。しかしむろんのこと、それに罪悪感を抱いたり、態度を改めることは毛頭ない。

そして彼らの利己主義。Williamは人生に明確な目標を持たないし、もともと天地が自分を中心まわっていると思込んでいるような人間だから、他人を利用するとしてもせいぜいがセックス目的ぐらいだが、Karimは自分の目的のためなら、誰でも情け容赦なく利用し、踏みつけにすることを辞さない。演劇界への足がかりをつかむためには、父とEvaを利用し、その梯子を登って行くためにShadwellを利用し、Pykeを利用し、演技のためにはAnwarを利用し、Changezを利用する。

しかし、彼らは決してよくありがちな「無軌道な若者」ではない。たとえば、一見無鉄砲なように見えても、彼らは違法な行為にはいっさい手を出さない。この種のポヘミアン的な若者にしては麻薬にすら縁がない。彼らのプロミスキューティを思うと不思議な気もするが、「変態的」セックスにも強い嫌悪を示す。WilliamはCharlesがクラブWick'sの従業員を使って撮っているポルノの撮影現場を見せられて、その頹廢性に嫌悪を覚えるし、Karimは人気の重圧に負けて墮落したCharlieが、娼婦を呼んでSMプレイをするのを見て、彼に幻滅する。

一方、彼らの一見クールに構えたニヒリズムはアパシーとは違う。むしろどちらでも感情の起伏が激しく、すぐに怒ったり泣いたりし、何にでも感動する。恋人に対してはずいぶんどライなような気もするが、これも男女の性愛とはそもそも性格が違うので、一概には言えない。しかし、KarimのCharlieへの恋慕の情、WilliamのPhilに対する思いは、途方もなくロマンティックなところがある。むしろその一方で、つねに冷めた部分があり、突然冷酷にふるまったりもするのだが。

つまり、彼らは確たる自意識と、彼らなりのモラル・コードを持った若者たちなのだ。Karimは言う。

でも、ぼくの知人たちの中にある時代精神は、今がなりゆきまかせと怠惰 (drift and idleness) の時代であると言っていた。ぼくらは金なんかいらない。なんで金が必要なのか？ 両親や、友達や、国にたかって生きて行ける。それにもし退屈しても——なんにもやる気がないもんだから、たいていは退屈しているのだが——少なくとも、自分の思いのままに退屈することができる。工場で働くよりは、崩れかけた家のマットレスの上でつぶれている方がまだましだ。ぼくは毛皮のコートを着ていられないようなところで働くのはごめんだ。(BOS, 94-95)

怠惰と倦怠は、まさに貴族階級にのみ許された特権であり、その意味ではKarimも一種の精神的貴族であることがわかる。それを言えば、プライドの高さも、自己中心性も貴族のあかしである。

Jilly Cooperは*Class*の中で、従来の5階級とは別に、Tellystocrat (テレビ貴族) という新興階級を想定しているが、役者として華々しい成功をおさめたKarimは、まさしくそれに該当する。*The Buddha of Suburbia*の登場人物の中では、他にアメリカへ渡ってロックスターとして成功したCharlieと、ソープオペラのレギュラーの座をつかんだTerryもそうだ。

それでは何が彼らにその特権を与えているのか？ 金や地位だけではないことは確かだ。KarimとWilliamを見ていると、彼らはマイノリティであること、

他人とは違う人種であることを、いわば一種の免罪符として用いているように思われる。それは「ぼくは不平等は嫌いだ。しかし、だからといって、人と同じに扱われたいというわけではない」(BOS, 149)というKarimの言葉に集約されている。そして人と違っているためには、彼は肌を茶色に塗り、インドなまりをまねることも厭わないのだ。

Karimの肌の色に関する気持ちは、弟のAmar (Allie) が代弁している。「ぼくはいつでも自分が黒人だという話ばかりする連中は嫌いだ。学校でどんなに迫害されたかとか、唾を吐きかけられたことがあるとか。自己憐憫だよ。(中略)でも、兄さんやぼくのような人間が強制収容所に入れられたことはないし、これからもないだろう。ありがたいことに彼らといっしょくたにされることはない。ぼくらは白い肌を持っていないことにも感謝すべきだ。ぼくは白い肌も嫌いだ……」(BOS, 267-268) KarimやAllieの意識の中では、彼らは黒人でも白人でもない。彼らだけが属する、ある種の選民の一員なのだ。

本物の貴族であるWilliamは、この意識をより強くもっている。夕方、スポーツジムに出かける途中、Williamは仕事帰りの若いシティのビジネスマンと自分を見比べる。

彼らのうちの幾人かはきわめてハンサムだった。薔薇色の顔と、人を見下すような目をしたパブリック・スクール・タイプの男たち。多額のサラリーをほしいままにし、時間をかけて高価なランチを取り、おそらくはシティのプライベート・ジムで体を鍛えている。多くの点で、彼らはぼくに似ていた。しかし彼らが夕暮れの穏やかな秩序ある広漠さの中を、のんびり歩いて家へと帰って行き、ぼくがつかのま彼らの目をとらえ、彼らがしばしばぼくのことを意識したのを感じる時、彼らは異人種 (alien breed) だった。(SPL, 268)

この超然とした態度の源は、彼らを一般人と隔てているのは、彼らの肌の色であり、セクシャリティであり、階級だ。たとえそれゆえに不遇を被ったとしても、彼らを守る壁に亀裂を入れることはできない。

もちろん、この楽園が長続きしないこと、その特権が永遠には続かないことは明らかだ。彼らの最大の拠り所になっているのは若さと美貌だが、それはいずれもいつかは失われるものであり、Williamの危険に対して無神経な向こうみずな暮らし、Karimのいるショービジネスの世界の苛酷さと短命さを思えば、彼らがいずれは安全な殻から出て、現実と直面しなければならないのは確かだ。

しかし、若さは一瞬を永遠に変え、若者たちは過去や未来に煩わされることなく、現在にのみ住んでいる。両作品のエンディングも、将来の暗い影などみじんも感じさせない、楽天的な明るさに満ちている。

*The Swimming Pool Library*の終盤近く、WilliamはCharlesに晩年のFirbankを映したホーム・ムービーを見せられる。異国の地で子供たちに囲まれ、嘲られる老いさらばえたFirbankの姿は、滑稽で醜悪でありながら、なぜか不思議な暖かさや感動を呼び覚ます。あるいは、それが年老いたホモセクシャルとしての自身の老年を見つめるCharlesの気持ち、それともWilliamの将来の姿を暗示するものなのだろうか。Charlesの友人の写真家Ronald Stainesは、この映画をフィーチャーに仕立てたいので、Jamesにコメンタリーを付けてほしいと頼み、Jamesは逮捕のショックから立ち直る。これはCharlesがWilliam（とその祖父）に無言の赦免を与え、和解を望んでいることを暗示しているようでもある。

一方、*The Buddha of Suburbia*は、Karimの次のようなせりふで幕を閉じる。

そこで、ぼくはこの、それ自体が小さな島のはじっこに位置する、ぼくが愛した古い町の中心に座っていた。ぼくは愛した人々に囲まれ、同時に幸せでもあり、みじめにも感じた。ぼくはすべてがなんてむちゃくちゃだったんだろうと思ひ、でもこれから先は必ずしもそうではないだろうと思った。(BOS, 284)

しかし、このもっともらしいハッピー・エンディングにもかかわらず、この二作品を一種のビルドゥングス・ロマンとみなすのは間違っている。Karimのオブティミズムは「金こそすべて」という悟りに裏付けられたものだし、

Williamはこのあとすぐ、いつものようにジムのシャワーで見つけた好みの男を追って行くところで終わっているからだ。つまり、彼らは小説冒頭から少しも変わってはいないし、むろん成長もしていない。むしろ自ら成長しないことを選んでいるのだ。といえば思い出すのは、日本でも流行した「モラトリアム人間」とか「新人類」という流行語だが、確かに共通する部分もないとはいえない。

しかし、決定的な違いは、やはりそのマイノリティ性である。それは彼らに課された重荷でもあるが、同時に特権でもある。彼らを閉じ込める障壁であれば、外の世界から守ってくれる堤防にもなっている。彼らに「クロ」「オカマ」といったレッテルを貼って差別するものであるが、社会の規範や枠組みをはずれて行動することを許す免罪符でもある。その力を借りて、彼らは黒人と白人、男と女、上流階級と下層階級、大人と子供といった、社会が押しつける二元論の外にある「はざまの世界」に暮らすことができる。彼らは文字通りの‘new breed’としての誇りを高らかにうたいあげる、マイノリティのネパールに住むピーターパンなのだ。

これだけ被害者意識を欠いたマイノリティはいない。Williamに至っては、実際に肉体的被害を受けてさえそうなのだ。むろん彼らが受けている差別と迫害を卑小化してみせることが作者の意図ではない。しかしこの二人の主人公は、すでにマイノリティが自分の権利と償いを声高に訴えるだけの時代ではないということを語っているように思われる。

注

(1) 1954年、Kent生まれ。London大学Kings Collegeで哲学を学ぶ。すでに劇作家として成功をおさめたが、本作は彼の処女小説に当たり、1990年、Whitbread Prizeを受賞した。

(2) 以下、BOSと省略。かっこ内の引用ページ数は、Faber and Faber版ペーパーバック(1990)を底本にした。

(3) 1954年生まれ。Oxford大学Magdalen Collegeで英文学を学び、The Times Literary Supplement副編集長を務める。本作は彼の処女小説で、1989年、Somerset Maugham Awardを受賞した。

(4) 以下、SPLと省略。かっこ内の引用ページ数は、Penguin版ペーパーバック（1988）を底本にした。

(5) イスラム系インド人は英国ではしばしばパキスタン人として言及される。Karimの父親も、Kureishi自身の父親もインドのBombay生まれだが、時によってインド人と言ったり、パキスタン人と言ったりしている。パキスタンというのは国籍のことではなく、むしろ人種と宗教のことを示すようだ。ちなみに、黒人（black）といえはアメリカでは普通アフリカ系を指すが、イギリスでは西インド諸島人、インド人やアラブ人もひっくるめて、肌の色のニュアンスは関係なく、やや蔑称的にblackと呼ばれる。

(6) Hanif Kureishi, *The Rainbow Sign* (Faber and Faber, 1986)

あ・い・だの詩学

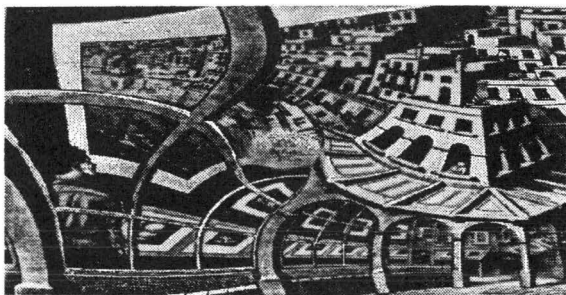
—サミュエル・ベケットの『名づけえぬもの』(承前)

山田 田津子

3 声の不正体性

マフードは、見る者は見られる者、おれとおまえの代理であった、と言ってよい。この、見る者は見られる者のあいだでは容易にトポロジーが反転する。おれがマフードの物語を語っていると思いきや、マフードとその一味がおれについて述べたてているという事態が起ってしまっている。やつらのひとりがおれと言っているのかもしれない。他人の言葉が語るおれは、代理の代理にすぎない。言い換えるなら、表象の表象にすぎない。むろん、おれは動詞（動詞）でもない。「やつはそのような（マフードの）物語がおれのことではありえないことを悟ったんだ」と言うように、表象の表象は再現前ではありえない。ということ、見る者が見られる者でもあるとき、語り手を問わずにすむ三人称や非人称に、すなわち、マンフッド (manhood) といった普遍を響かせたマフードに還元することは不可能であることを物語っている。

見る者は見られる者、そのあいだを回収しようとすることは、「軽騎兵が礼装帽の羽毛をうまい具合に整えようと



「版画画廊」リトグラフ、1956 模写

して椅子に上る」ようなものである。あいだを回収しようとする、まさにそのことがあいだを生み出してしまふ。だが、たとえば両手を両眼にびったりつけて両手を見ようとしても不可能であるように、常に既に、見ること自体があいだである。マフードが仲間である所以である。そして自らの物語とすべくマフードの物語を語ろうとすることは、陽炎を追跡するようなものである。どこからどこまでがあいだなのかもわからない。そのあいだがどこまでもあいだ化し、無限後退していく。ついにあいだが回収されることはない。

この、見る者は見られる者を徹底してカタチ化しようとした作品に、エッシャーの「版画画廊」(上図参照)がある。画廊のなかでひとり少年(左下)が一幅の絵―そのたたずまいからマルタ島であろうといわれているが、船の入ってきている港をぎっしりと縁取って林立する建物、その屋上でしゃがみこんでいる自分―を見ている。下の窓では母親らしき女性が外を眺めやっている。ところが、その建物は画廊とひと連なりになっている。少年の見ている絵が少年の立っている画廊の一部と化している、このトポスは、当然のことながら、見る者、見られる者の平板な区別を拒んでいると言ってよい。それにしても不

思議なのは画面中央のぼやけた空白である。この空白は何を物語っているのだろうか？ まさかエッシャーが日付と自分のサインを書き込むためにわざわざ用意したものはあるまい。見る者が見られる者でもある場合、主客の区別はとうに失われており、そのことによってついに見えない部分を残してしまうこと、さらには、「エッシャーはこの部分をどこまでも小さくはできただろうが、取り除くことはできなかつた」とホフスタッターが言っているように、見ることにつきまとう根源的なあいだを完全なまでにカタチ化することは不可能なこと、そうしたことをこの空白は物語っていないか。

ベケットが、おれとマフードの物語で言いたかつたことも、実はこのことではなかつたか。だが、ここで重要なことは、見えない部分が見えているのは、エッシャーであり、画廊のなかの少年ではない、ということだ。同じように、おれとマフードとのあいだが、回収されえないと言うことができるのは、ベケット、あるいは、作品の外側にいるわれわれである。作品のなかの語り手ではない。おれとマフードの物語が尻切れとんぼのまま、突如として、おれとワームの物語に移行するのはこうした理由によるものと思われる。おれとマフードの物語において、「と」が引き上げられ、マフードの物語におれが回収されれば、おれが誰であるかが判明し、物語は終わることができる。三人称単数の固有名におれを還元することさえできれば、むしろ、語り手が誰であるかなど問う必要もない。だが、すでに見てきたように、おれとマフードの物語は動詞ようもない。それゆえ語り手が誰であるか、依然として不明である。

それならアンチ・マフードのワームはどうか。「やつ」のなかに、おれではないにしても、おれの方に向かう一歩を見た」のだから。そう思うこと自体、またぞろ罍かもしれないと語りつつ、ワームを、次なるおれの影として、おれの代理人として立てる。先代のマフードは、スマトラかどこかで片脚を失くして以来、地球だか家だかを何周もする

うちに、手も足もないトルソーとなつて身動きさえできず、焼き肉定食屋の筋向かいの甕のなかに囚われていた。それでもまだ頭があり、ときどきパチクリさせることのできる両の眼があつた。ワームにはもう頭はない。耳もなければ口もない。ジャコメツティの彫像が、次第に贅物を削ぎ落とされ、針金にまで痩せ細つていったのと同様に、欠落だけが増殖していく。ワームは、ただ「カタチなき塊り」で、そのなかにあるのは、見開いたきりの、「馬のような目が一つ」だけ。いうならば、「包茎近似的球状」の一つ目小僧。このワーム、通常、英語で虫けらを謂うように、すでに人間っぽいところは微塵もない。判断はおろか、知る能力も、感じる力もなくなつてゐる。一つ目もただ涙が垂れるだけで、「見る」こととは無縁であるようだ。「ただひとり全無能、全無知の方を向いて」ゐるが、それでも自分が誰であるのか、どこにゐるのか、知りたいという「狂おしい夢」に憑かれてゐる。

「喜びや悲しみや平静の震央」であるようなワーム。しかし、理解力や言葉や声のかけらさええないワームである以上、ワームの物語はマフードとその一味をぬきにしては語られえない。「やつらがいなければなにもなく、ワームさえもいなくなる」のだから。したがつてワームの物語は、やつらとワームの關係のそれであらざるをえない。さらに重要なのは、その關係の物語がどうおれと関わるかである。「やつらはおれを外へ引き出すのに、おおいにワームをあてにしている」。だが果して、この關係の物語は、うまい具合におれをおびき寄せ、おれを誕生させる囿になりうるのだろうか。そして、他ならぬ「おれはワームである」と証明することができるのであろうか。

この關係の物語は、やつらの奇異なワーム捕物帳として展開してゐる。

マフードとその一味とおぼしきやつらは、相も変わらず、おれの「仲・間」、ワームに包圍網を敷き、隙あらば彼を捕らえようとしてゐる。ワームを囿つてゐる壁に二つの穴をあけ、声をあげて一方から彼を追い込み、別の穴に腕

をつつこんで掴まえる魂胆だ。ところが彼は動かない。また、やつらは代わる代わる穴から覗きこんで彼を監視しているようだ。ときには懐中電燈を穴に嵌めこみ、ワームを照らしてさえる。だが、ワームの場所は大変自在だ。たちまち、蟻地獄のような穴の底だったりする。「ちっほけな染み」、そいつがワームだとばかりに、やつらは、鳶口、熊手、鉤竿、引つ掛け、ありとあらゆる道具を使って彼を釣り上げようと画策する。こうした捕物騒ぎの最中にも、やつらのしゃべる声がワームに聞こえている。ある一定の方向から聞こえているが、誰の声だか知れたものじゃない。というのもワームを取り巻くやつらは、かごめかごめの遊戯よろしく手に手をつないでぐるぐるまわっているからだ。ときには合唱が聞こえてきたりする。

このどたばた捕り物劇を思わせる、やつらとワームの関係が、おれへと関係するとき、やはり、問題になるのは声である。

おれの言っていることのなかにひと言でもおれの言葉があるか。いや、おれには声がない、このことについてはまるつきしなんだ。それがワームとおれ自身とを混同した理由のひとつなんだ。だがおれには理由もなければ、理性もない、おれは声も理性もないワームみたいだ、おれはワームだ、いや、もしワームだとしてもそんなことわからないだろう、そんなこと言わないだろう、何も言わないだろう、おれはワームだろう。でも何も言わないし、何もわからない、こんな声はおれのじゃない、こんな考えもだ、おれを包圍している悪人どもの声や考えだ。おれが難攻不落のワームであるはずがないとやつらがおれに言わせるんだ。たぶんおれはやつだろう、やつらだってそうなんだから、とおれに言わせるんだ、おれはなれたかもしれないマフードになれなかつたんだから、なれないはずのワ

ームにならなくっちゃいけないと。でもワームになりそこねたら、その反動で、自動的にマフードになるだろうと今だに言っているのはやつらなんだろうか？……中略……ああもし、こうした戯言（戯言）のさんざめきのなかに、一筋で、もおれの声を見つけたことができさえすれば、やつらの苦勞や、おれの苦勞も終わるだろうに。

（八三―八五頁 傍点筆者）

それにしても、「一筋でもおれの声」が見つかれば、おれを強迫して止まない、宿痾ともいえる問題にケリがつけられるとは、一体、どういうことなのか？ それは、おれの声が見つかった晩に、はじめて、（やつらではない）おれはワームである、あるいはマフードである、と言うことができる、と考えられてきたからである。すなわち、やつとおれの物語が始まる……。この語りをめ得太く終えることができる、と。

なぜベケットはこれほどまでに声にこだわるのか。その謎も、この声に付与されてきた不思議な力―われわれを「本物の考える肉」にすると考えられてきた力に秘められている。

それゆえに、ここでベケットの語り手を声の系譜学のなかにおいてみよう。この文脈のなかでこそ、何が問題なのか、もっとも明らかに照らし出されるはずだからである。

不思議な力が付与されてきたのは、まずもって、声の持つ特質に発している。声は、世界のなかにあり、発せられると同時に、すなわち世界を外出するやいなや、自らを消し去る。のみならず、ヘーゲルの言うように、「われわれは音（＝声）をさかないわけにはいかない」（『精神哲学』（一）内筆者）。声は、この媒体としての透明性と否定性ゆえに、そしてまた、まさしく「聞く」ということ、そのことによって、先に述べた記号作用の外化、内化の運動を遂

行し、世界を隈なく還元して見事に円環を閉じることができると考えられてきたのである。ここに、たとえばデリダが、「イデア化と声とのあいだの共犯は不滅である」と明言する所以がある。

声は自己自身を聞く。音声的記号（ソシユールの意味での「聴覚映像」、現象学的声）は、この記号の現前の絶対的近さにおいてこの記号を発する主観によって（聞かれ）る。主観は、自己の外を経る必要もなしに、自己の表現活動によって直接に触発される。私の言は、私のもとを離れないように思われるがゆえに（生き生きして）いる。すなわちそれは、私の外へ、私の氣息の外へ、可視的な隔たりのなかへ、転落しないように思われ、私に所属することをやめず、（余計な付属物をもたないから）私の意のままになることをやめないように思われる。ともかく、このようにして声の現象が、現象学的声が与えられるのである。

（ジャック・デリダ 「声と現象」 高橋允昭訳 傍点筆者）

自分を見る場合、「自己の外」として、たとえば、鏡を必要とする。だが、「自分が言うのを聞く」場合は、そうした外部を経る必要はない。この純粹に直接的な「内部―触発」によって、さらには、（余計な付属物をもたないから）、すなわち、「産出されたまさにその瞬間に、抹消されてしまう」ことによって、現象学的声は、意識に属し、身体的世界を隈なく反映すると考えられてきた。ギリシヤ語の「息」（*reventos*）が、同時に「精神」でもあったように、アリストテレス⁽¹⁰⁾以来現代に至るまで延々と、声は、「精神的生身性^{なまみせい}」として、自己自身を余すところなく還元するという神話を紡いできた。

自分の声を「一筋でも」見つけることができれば、すべてにケリがつく。こうベケットの語り手が言うのは、右のような声の神話的超越性に身をすり寄せることができるかもしれないということの謂いではなかったか。ちなみにベケットには、全幕三五秒の「息」⁽¹⁾と題された芝居がある。それはさておき、この「名づけえぬもの」も、当初より、「自分が言うのを聞く」磁場の物語であつた、と言つてよい。

依然としておれの声に相違ないもののほうへ耳をそばだてた、とても弱く、とても遠い、だから海みたい、幽みゆく遥かなる静かな海――

(二八頁)

ベケットの語り手にとって、「おれの声に相違ない」という確信は、霞か雲にすぎない。声は到来しているが、誰の声だかわからない。自分の声であるようで、そうでないようでもある。

結局おれたちはみんなで何人いるんだろうか？ ……おれは牢屋にいるんだ、いつだつてずっと牢屋にいた、おれにはやつらの言うことがみんな、逐一聞こえている、ただの音さ、まるでおれがしゃべっているみたい、おれ自身に向かつて、大声で、とどのつまりこれ以上はおまえにわかりっこないさ、決して止まない声、どこから到来しているのかな。たぶんここには他の連中がいるんだろう、おれと一緒に、暗いんだよ、

(一一四頁 傍点筆者)

この牢屋には、未だ存在するには至っていない。「おれ」しかないはずなのに、蟻地獄のワームさながら、実は大勢の「仲・間」がいるのかもしれない。自分が自分に向かってしゃべっているのか、他人の声を聞いているのか、要するに、内なのか、外なのか、わからない。だが、この正体不明の声は、小説全篇を通して決して止むことはない。「あくまでも声の問題なんだ」という、その声が、声を微分して行く。

やつらが黙るときには、おれも黙る。一秒あとからだ。やつらに遅れること一秒、その一秒をしまっておく、一秒間、言うならば、受け取った通りに、吐き出す時間さ、その間に次のを受け取る、それだっておれにはちつとも儘ならない。一瞬たりともおれ自身のだなんて言えないんだ、

(一一三頁 傍点筆者)

おれは、耳で受け取った、あるいはトランペットで尻の穴に吹きこまれた言葉をそっくりそのまま送るだろう、やつらの言った通りに、しかもできるだけ、同じ順序で。この到着と出発の、微細なずれ、吐き出す際のほんのわずかな遅れ、これだけがおれの悩みだ。おれに関する真実がとうとう、煮えたぎって噴きだすだろう、もちろんやつらがまたほそほそしゃべり始めないとしての話だが。おれは聴き耳をたてる。うんざりするほどの遅延、おれはワームである、ということはつまり、おれはもはやワームじゃないってことだ、だっておれには聞こえてくるんだから。

(八六頁 傍点筆者)

ここに引用したように、ベケットの「自分が話すのを聞く」は、語り手の期待とは裏腹に、「一筋」たりとも自分の声を見つけることはできない。「やつらはおれをやつらの声で風船みたいにふくらましつづけている、だからおれがしばまそうとしても、聞こえてくるのはやつらの声だ」からでもある。この声には、すっかり外部としての他者が侵入してしまっている。そうであれば、「おれはワームである」というのも、外部の内部であって、内部の外化ではない。おれほど「おれはワームである」から遠いものはない。それゆえに「おれはワームではない」。しかし、重要なのは、この先である。右のような事全体もまた、「おれに聞こえて」いるんだから、実は、「おれはワームではない」とも言えない。更には、言えないということも言えない。むしろ、おれはワームを動詞しようもない。

このように、おれの代理人、ワームの物語も、声の問題にぶつかると、たちまち崩壊されてゆく。他人の声がどんどん入ってくるから、せつかくの一秒の「ずれ」も、自分の声を区別するのに何の役にもたつてくれない。つまり、間が間として現成しない。

「名づけえぬもの」の語り手を襲うこうした事態が、もっとも尖鋭的に現れるのは、精神病理学者が指摘するよう⁽¹²⁾に、分裂病患者においてである。いわゆる「つつぬけ体験」である。だからといって、ベケットの作品空間を、きわめて特殊なケースとして、括弧にくくってよいものだろうか？ かつてハムレットが、母の寝室で聞いた父の声もまた、「自分が話すのを聞く」場面ではなかったろうか？ 母、ガートルードには決して聞こえなかった声。その母が、「ありもしないものを勝手に造りあげる、それこそ狂気の証拠。」と言うのに対して、シェイクスピアは、「気ががいのたわごとなどであるものか」とわざわざハムレットに言わせているように、ベケットの間化々々しい声は、ハムレット同様、いわゆるデリダの言う、根源的な「現象学的声」の裂け目へと届いている、と言える。

すでに知られているように、「現象学的声」の持つ、神話的超越性を単に「見かけ」にすぎないとして脱構築したのはデリダである。「名づけえぬもの」が書かれて十六年後のことである。デリダは、「自分が言うのを聞く」が、純粹に「内部―触発」であるというまさにそのことにおいて、すでに外部に浸蝕されている、と言う。それは、「まばたき」ほどの一瞬の今も、単に今として在るのではなく、すでに聞こえていない「つい今しがた」の痕跡に他ならず、この痕跡は自己との裂け目以外のなものでもない、裂け目が「生ける今」を開くのであって、その逆ではないからだ、と。だとすれば、「可視的な隔たりのなかへ、転落しない」などという保証はどこにもない。それどころか「自分が話すのを聞く」は、自己のうちに閉ざされた或る内部の内面性にあるのではない。それは、内部における還元、不可能な開けであり、言における目と世界である」(傍点筆者)と、彼は言う。

「目と世界」とは、「自分が話すのを聞く」もまた、すでにエッシャーの「版画画廊」で検証したような、何ものにも還元できない空白を、その内部に穿たれてしまっていることを言い表している。ペケットの、動詞が主語を決定できない「自分が話すのを聞く」は、実は、この空白を生きていると言える。頼みの綱であったワームの物語が、依然として、おれを回収できない所以は、このきわめて根源的な、存在の裂け目へと関っているからである。

もし、文法は哲学であると言うことが可能であるなら、デリダは、現在完了形の成立基盤にひび割れを見出し、と、言うてよい。そうして、過去が現存する永遠の今といったヘーゲルの時間を、ないしは、純粹意識が世界を還元して止まないフッサールの内的時間を脱臼させた。言い換えるなら、動詞が主語を決定しうるパベルの塔を倒壊させたのである。しかし、デリダの目的は、西欧のフォーン(声)・ロゴス(言)中心主義を、ひいては現前の形而上学を瓦解させることであつた。緻密な用心深さを身につけてしまっている彼は、それ以上のことは言わない。一方、

ベケットは、ひとつの掃除機で、どうやって、その中を掃除するか？というようなところに身を置きつつ、人間の条件探求の果てしない巡礼者でありつづける。まるで聖杯を求めて行脚する中世の騎士たちのように。

4 遁走するはじまり

これまで述べてきた言葉の問題、声の問題は、当然のことではあるが、マフードとおれやワームとおれの物語と同一地平上にある。このことはわれわれにエジメニデスの箴言、「すべてのクレタ島人はうそつきであると、一人のクレタ島人がいった」を想起させる。ここでは「うそつきである」と「うそつきでない」のあいだが、済し崩しになってしまう。同じように、マフードとおれの、さらには、ワームとおれのあいだを奪取するためには、まずはあいだを確定しなければならぬ。だが、あいだを確定しようとする営為は、次のようにならざるをえない。

やつらはおれに悟られないような仕方ですを仕組むだろう、二つの容器、ひとつはからっぽにし、ひとつは一杯にするんだが、実際は一つなんだ、そいつは水だろう、水、おれはちっぽけなコップで一方の入れ物から水を汲みだし、もう一方へ流しこむ、あるいは四つ、それとも百あるのかな、その半分を一杯にし、他の半分をからっぽにする、番号があるから、偶数をからっぽにし、奇数を一杯にする、いや、もっと複雑だな、非対称的で、かまうもんか、からっぽにし、一杯にする、ある仕方、ある順番で、ホモロジーに従って、用語なんてなんの役にもたないな、だからおれは、タンク同志通じて、通じているんだ、床下のパイプで繋がっているんだと思わざるをえないのさ、ここから見えず、水が同じ高さになっているのが、いや、うまくないな、絶望的だな、（一五五頁）

一方をからっぽにするために、せつせと他方に水を注ぎこむ。他方の充満と一方の空。それが成就したとき、この区別化のゲームは終わる。たとえ他方が五万とあろうとも、一と他のあいだは確定される。だが、減らしているのに増えてしまう。一と他の水嵩はどこまでやっても変わらない。一と他のあいだは確定されず、区別が区別として生成しない。マフドの物語も、ワームの物語も、おれの物語であるとも、ないとも決められなかったのは、実は、このことに起因している。では、固有名が駄目なら代名詞はどうか。

まるでおれがやつであるかのように、まるでおれがやつでないかのように、両方だ、まるでおれが別の者たちであるかのように、次から次へと、やつだつて悩んでいる、おれは遠くにいる、おまえにやつの声が聞こえるかい、やつはおれが遠くにいると言ってるぜ、まるでおれがやつであるかのように、いや、おれがまるでやつでないかのように、だつてやつは遠くにはいないからさ、やつはここにいる、しゃべってるのはやつだ、そいつがおれだつてやつが言うのさ、それから違うつて言うんだぜ、おれは遠くにいる、おまえにやつの声が聞こえるかい、やつがおれを探している、なぜだかわからん、やつだつてなぜだかわからないのさ、やつがおれを呼んでいる、やつはおれに出てきてもらいたがつている、やつはおれが出ていけると思っているのさ、やつはおれにやつになつてもらいたがつている、あるいは別の者に、公明正大といこうぜ、やつはおれを上らせたがつている、上らせてやつの中にとりこみたがつている、あるいは別の者の中に、公平にいこうぜ、やつはおれを捕まえたと思つている、やつの中におれを感じる、そのときやつはおれと言うんだ、まるでやつがおれであるかのように、あるいは別の者の中に、正確に

いこうぜ、そのときやつはマーフィーとか、モロイとか、覚えてねえや、おれがまるでマロウンであるかのようにも、でも他の連中はもうおしまいだ、やつは他ならぬやつ自身になってもらいたがっている、おれのために、やつはこれがやつの最後のチャンスだと思っている、やつは思っているさ、やつらがやつに考えることを教えたんだと、しやべるのはいつだってやつさ、メルシエはしやべらなかつた、モーランはしやべらなかつた、おれはしやべらなかつた、おれがしやべっているみたい、だつてやつがまるでおれであるかのようにおれというからさ、やつを信じるところだつた、おまえにやつの声が聞こえるかい、まるでおれであるかのように、おれは速くにいて、動くことができない、見つけてもらうことができない、だがやつだつてできないさ、やつにできるのはしやべることだけ、それだつても、たぶんやつじゃないだろう、たぶんその一味だろう、次から次へと、なんたるごちやごちや、だれかがごちやごちやつて言うんだ、……代名詞がいけないんだ、おれに名前なんか、ないさ、代名詞もないさ、苦勞の種の出所はあれだよ、あれつて、それもある種の代名詞だな、それはあれでもない、おれはあれでもない、こんなことみんなほつとこうぜ、……

(一六三頁～四頁 傍点筆者)

おれは、おれを見ようとして、おれを聞こうとして、言うならば、おれを対象化 (objectiv.) 前に投げ出す) しようとして、おまえを立てる。おれとおまえ。もともとは、この両者のあいだの「と」を奪取して一者とする事が、眼目であった。なぜならそのとき、おれは初めて客観的なアイデンティティ、すなわち、自己同一性を獲得できるからだ。ところが、一人称と二人称では、語り手が誰であるかを問わなければならない。それをなんとか回避するために、おれは、代理人として、三人称単数の固有名のマフードを立てる。ところが、たちまち、言葉の問題にぶつから

ざるをえず、マフードはその他大勢に膨れあがる。このことは、すでに検証してきた通りである。無数のあいだで、容易にトポロジーが反転してしまう「仲・間」とのあいだを奪取しようとする、まさにそのことよってあいだが湧出してしまふ。頼みの綱は、声であつた。代理人ワームとのあいだも、声の不正体性に見舞われるや、おれは代理の代理であることをよぎなくさせられる。最後に残されたチャンスとばかりに、三人称単数の代名詞、やつに挑む。だが、おれとおまえのあいだは、ついに、やつの中に溶解することはない。結果は同じことの反復である。

西田幾多郎は、『場所・私と汝』で次のように言っている、「自己が自己の中に絶対の他を含んでいなければならぬ、自己が自己の中に絶対の否定を含んでいなければならぬ、……何となれば自己自身の存在の底に他があり、他の存在の底に自己があるからである。私と汝とは絶対_に他_{なる}もの_{である}。……私は私の底を通じて汝へ、汝は汝の底を通じて私へ結合するのである、絶対_に他_{なる}が故_に内的_に結合_{するのである}」(傍点筆者)。西田の言う「絶対_に他_{なる}もの」とは、おれとおまえのあいだが、揺るぎなく確定され、「絶対_の否定」が、すなわち、「でない」が、有効に運動する場にほかならない。しかし、これまで見てきたように、ベケットの、おれとおまえのあいだは、距離を取り去ること (distance) が距離 (distance) であるような、すなわち、遠みが近みであるようなパラドックスに襲われてゐる。このような場では、否定の「でない」は働きようがなく、あいだだけが過剰していく。いうならば「と」だけが、「と (n₁)」と「と (n₂)」と増えつづけていく。「おれたちが百人いたとしても百一人目が不足」するように、おれは無限後退していくばかりである。

おれは目覚めるだろう、沈黙の中で、そして二度と眠らないだろう、それがおれだ、あるいは夢、また

ふたたびの夢、沈黙の夢、夢の沈黙、眩きがいっぱい、おれにはわからない、これもただの言葉さ、目覚めない、ただの言葉さ、他に何があろう、おまえはつづけなくっちゃいけない、これしかおれにはわからない、……おれはつづけよう、おまえはしゃべらなくっちゃいけない、言葉があるかぎり、やつらがおれを見つめるまで、やつらがおれのことをしゃべるまで、奇妙な痛み、奇妙な罪、おまえはつづけなくっちゃいけない、たぶんもう終わったんだらう、たぶんやつらはおれのことをしゃべったんだらう、たぶんやつらはおれの物語の敷居のところまでおれを連れてきたんだらう、おれの物語の上で開く扉のまえに、だとしたら驚きだ、もしも扉が開けば、そいつがおれだろう、そいつが沈黙だろう、そこにおれはいるんだ、わかるもんか、おれにはわからないだらう、沈黙のおまえにはわからない、おまえはつづけなくっちゃいけない、おれはつづけることができない、つづけよう。

(一七九頁 傍点筆者)

これこそわれわれによって生きられつつある「事態」ではあるまいか。沈黙の中は、沈黙の外でもあり、言葉の中の言葉にすぎなかつたりする。この内が外であるようなところでは、あの自己へと帰還する記号作用の内化、外化は起こりえない。もしも扉が開いて、自己へと帰還し、おれが生成することがありうるとすれば、それは、まさしく無知へと生まれること以外ではない。それゆえ、「ただひとつ可能な捨て方は内側へと捨てることである」と、ベケットの語りが告げているように、「いかなる記号も、自分自身をこえた外にまでわれわれをつれていきはしない」(ウイトゲンシユタイン)のである。終わりへと向かうことは、「自分の導火線から離れたがついている炎を燃えつづけさせること」にはかならない。おれの物語の扉は開かず、そのはじまりは、どこまでも逃れざるばかりである。

優れてベケット学者である高橋康也は、これを「終わりなき終わり」⁽¹⁴⁾と云う。そしてイノック・ブレイターが⁽¹⁵⁾自分の「あしおと」を聞こうとして細板を踏みつづけるメイの姿態に ∞ を見たように、世界の生成へと向かう言葉の旅は無限である。むろん、無限とは、「無・限」であり、そこには無と有限が消しがたく刻印されている。私は単に言葉遊びをしているのではない。しかし、ほんとうはこのように言うことも許されないのではないか。いみじくもブレイターが、「上から見られるとき」と断っているように、右のように言うことができるのは、実は、メタ・レベルに立つことができるときに限られるからである。それこそ言葉の傲りでなくて何であろう。生きるとはあくまでも「の中に」あることに他ならず、このことさえもわからない。いや、わからないということさえもわからない。ただつづけるほかはない。

だが、「人間は欲しないよりは、⁽¹⁶⁾まだしも無を欲するものである」とニーチエが言うように、どこまでも逃れさるはじまり、「全無知、全不能」へと、すなわち、「涎を垂らす自由」へと向かうベケットの言葉の旅は、たとえ、行きつ戻りつ、螺旋運動を繰り返すにすぎないとしても、その旅の途次で、二五〇〇年余りにわたって西欧を支えてきた土台骨、言葉に付与されてきた名づけることの特権を引き剥がさずにはおかない。

作品の引用はすべて Samuel Beckett, *The Unnamable* (Grove Press, New York, 1958) による。なお、詩人、安藤元雄の翻訳、ミユイ社のフランス語版を主たる底本とされた白水社版「名づけえぬもの」(一九七〇年二月)を参照させていただき、多くのご教示をいただいた。多謝。ベケットのフランス語版と英語版は、同じであって別の作品である。作中の人物たちさながら同一性と差異性を生きていると言える。

(10) 拙文「アリストテレスとポスト・モダン」 図書新聞一九八五年一月九日、一六日号、「思想のクロノロジー」一〇五、六参照。

(11) 「息」の舞台には種々雑多ながらも散らばっているのみで、役者は登場しない。ただ録音された産声と息が、拡大されて劇場に流される。ここには身体も、したがって当然のことながら、主体も存在しない。死へと生まれるしかない存在の舞台化である、と言ってよい。

(12) 木村敏は、「自己・あいだ・時間」のなかで、分裂病者の「つつぬげ体験」の一例として、患者の次の言葉を引用している。
 「お母さんとのあいだが気づまりなんです。間がもたないって感じなんです。中学生のとき、自分を出そうとすると何かひっこんで出せなかった。自分の自然な感情が出せなくなってすごく苦痛だった。なにか素漠とした感じだった。なめらかな感情が出せないから自分というものが出せず、自分でないという感じだった。はじめはお母さんとのあいだだけだったけど、このころは誰とでも気づまりで間がもたない。気押されるというのか、すごい圧迫感を感じるのです。自分が外に出せないのです。自分を出したい出したいと思っただけで出せずにいるうちに、人が自分の中にいってくるようになった。人がはいつてくると、自分がなくなつて他人が中心になるようになってしまふ。人が自分の中にはいつて自分の真似してるんじゃないかと思つたりする。気を張っていないと自分と他人の区別がなくなつてしまふ。」(太字指定筆者) この症例に見られるように、「他人からあやつられ、他人に心の中をのぞかれ、幻聴に語りかけられ、多くの人たちに監視されている」と訴える分裂病者の特質について、木村敏は、「非対称性」の逆転をあげている。すなわち、あくまで自己が自己でないものを自己から区

別するという「非対称性」が、病者にあつては、さかしまに生起してしまうのである。しかし、重要なのは、次のような氏の発言である。「自己の主体性と固有性は、その可能性に関してもその構造に関しても、決してふつうに考えられているように明白のことではない。自己はいかにして自己自身でありうるのか、自己が自己自身であるという事実はいかなる構造を有するかについての現象学的な問いに對して、分裂病者の自己他有化の体験はひとつの重要な糸口を与えてくる。」(傍点筆者)

- (13) 山本信訳『ワイトゲンシュタイン全集3・哲学的文法』。ついにベケットが、一九八九年の終わり(二月二日)に死へと外出したとき、中村雄二郎は、次のように述べている、(この世界の激動期に亡くなったのは大変象徴的だ。彼が「ゴドー」で予言した古い神(大文字の価値)の死と、新しい神の混迷という事態は今日一層明らかとなった。今世界は「エンド・ゲーム」を演じているように見える。チェーホフ以後の最大の劇作家であるだけでなく、思想家としてもハイデガーやウイットゲンシュタインに匹敵する存在だった。) (朝日新聞一九八九年二月二七日)と。ベケットの小説は限りなく詩に近い。哲学と詩は互いに引き合う。ハイデガーは、実に四十年ものあいだ、ヘルダーリンを追いつづけ、その詩想を汲み尽くそうとした。ワイトゲンシュタインは、若くして受け継いだ父の遺産から二万クローネをリルケとトラークルに贈っている。だが、かれら三人がついに相見えることがなかったように、詩と哲学は、相入れない。なぜなら詩においては、思想は音色であるからだ。

- (14) 高橋康也『ウロポロス』文学的想像力の系譜 参照。

- (15) 拙文「生きられる劇的隠喩」 Enoch Brater: *Beyond Minimalism: Beckett's Late style in the Theater* 書評(『英語青年』一九八七年八月号) 参照。

- (16) ニーチェ『道德の系譜』木場定訳(岩波文庫) 参照。

日蓮聖人「十一通御書」の考察（承前）

西脇 哲夫

一、はじめに

本稿は、前号（『東京立正女子短期大学紀要』第二十一号）掲載の「日蓮聖人「十一通御書」の考察」・第二章の続編である。前稿は、第一章「真偽論」と第二章「日蓮の文体研究の業績に照らして」の二章からなっていた。第一章「真偽論」は、堀教通教授執筆による、謂わば十一通御書研究史であった。西脇執筆の第二章は、片岡了・古瀬順一両氏のご指摘になつてゐる日蓮聖人の文体の特徴が、十一通御書にも当てはまるかどうかを検討したものであった。お二人は、「単文比率が高いこと」・「主語を明示する傾向が強いこと」・「名詞の比率が高いこと」・「漢語表現が多いこと」の四点を、日蓮聖人の文章の特徴とされている。（注）漢語表現を除く三点を検討した結果、十一通御書の中には、主語を明示しない文脈依存型文の比率が高いものや、名詞比率の低いものがあることがわかった。しかし、決定的な齟齬といえるほどのものは見いだせなかつたのである。

本稿では、用語・用字の面から十一通御書に検討を加えてみようと思う。その際、日蓮聖人の著作であることが確実な遺文（原則として、断簡を含め、真蹟が現存するもの）を基準として、考察していくこととする。^(注2)

二、十一通御書に見られる日蓮聖人の語彙

十一通御書中には、日蓮聖人も使ったことが確実な語彙や言い回しなどが散見される。もとより、それらが日蓮聖人特有のものであるか否かを、簡単に判断することはできない。また、その必要もないと思う。当然のことながら、十一通御書と蒙古襲来に触れた遺文との間で、共有するものが多いようだ。いくつか、そうした例を掲げてみる。

「與北條時宗書」の「當_レ日蓮_ハ、聖人一分_ニ。知_ル未萌_ヲ故也。」は、『撰時抄』の有名な「余に三度のかうみやう（高名）あり」の一節の直前に「外典_ニ云、未萌_ヲを_レを聖人という。」とあるほか、「法門可被申様之事」に「又いまだ顯ざる後を_レを聖人と申_スか。日蓮_ハ聖人の一分にあたり。」などとあるのが参考になる。「未萌」とは、「事がまだ起こらないこと」（『日本国語大辞典』）であり、「法門可被申様之事」がいうところの「いまだ顯ざる後」のことである。十一通御書のうちの「與壽福寺書」・「與多寶寺書」にも、日蓮聖人が「未萌」を知ることが書かれている。日秀・日辨の「瀧泉寺申状」にも「外書_ニ云、知_ル未萌_ヲ、聖人也。——中略——以_レ之思_フ之、本師_ハ豈_ハ非_ズ聖人_ニ哉。」と見えている。「本師」はいうまでもなく日蓮聖人を指す。ただ、「瀧泉寺申状」は、真蹟が現存するものの、日蓮聖人の著作ではない。聖人の手が加えられたと考えられているので、著作に準じた扱いとする。

その他、「與北條時宗書」の「澗底_ニ長松_{未_ク知_ル良匠_之誤_リ。闇中_ニ錦衣_{未_ク見_ル愚人_之失_リ。」は、「強仁状御返事」の「暗中}}

服錦遊行 潤底長松不知良匠歟」と記述の順序が逆だが、ほぼ同じ内容である。この場合、何人かが「強仁状御返事」の形を「與北條時宗書」のような形に直したと考へることが可能だろうか。「與北條時宗書」・「與平左衛門尉頼綱書」の「爲神爲君爲國爲一切衆生」の表現は「安國論御勘由來」などに、「與建長寺道隆書」・「與多寶寺書」の「書不盡言。言不盡心。」は「強仁状御返事」にも見える。「與北條時宗書」の「豈善神不成怒耶。」、「與建長寺道隆書」の「我慢心充滿」、「與極樂寺良觀書」の法華經からの引用「或有阿練若納衣在空閑」は、「立正安國論」などにも見える。建長寺・壽福寺・極樂寺・多寶寺・淨光明寺・大佛殿等に対する非難は、「行敏訴状御會通」などに見える。「私曲」・「驚」など、単語単位で一致するものまであげばきりが無い。そこで、思想内容とは直接的なかかわりを持ちそうもない片言隻句に注目してみたいと思う。

(イ) 「以之按之」

十一通御書に二例見られる表現である。

* 「與宿屋入道書」の冒頭

「就先年勘之書安國論普合令言上候畢。抑正月十八日西戎大蒙古國牒狀到來。以之按之當日蓮聖人一分候歟。」

* 「與壽福寺書」の冒頭

「如風聞蒙古國簡牒去正月十八日慥到來候畢。然先年日蓮如勘書立正安國論令普合。恐日蓮知未萌

者歟。以之按之念佛・眞言・禪・律等惡法充滿一天而爲上下師之故如此他國侵逼難起也。」

「之を以て之をくする」という表現形式は、『孟子』や『荀子』などでも使われているし、特に珍しいというわけでもないかもしれない。日蓮聖人が参考にしたという『貞觀政要』に用例が多いという事はないようだ。ただ、日蓮聖人が、この表現形式を好んで使っていた節があることも確かである。表記は少し違うが、「以之案之」の形で「聖人知三世事」や『法蓮鈔』などに見える。そのバリエーションとして、

「以此等文勘之」〔災難興起由来〕

「准之思之」〔立正安國論〕

「以之惟之」〔合戦在眼前御書〕

「今以愚見勘之」〔大田殿許御書〕

「以之可察之」〔法蓮鈔〕

といった例がある。また、「以近惟遠以現知當」(「聖人知三世事」)のような対句的な表現も見られる。漢文訓読調の和文でも、

「かれをもって此をあん(案)ずるに」〔南條殿御返事〕

「これをもっておもうに」〔曾谷入道殿御書〕

「是をもって案ずるに」〔撰時抄〕

などの例があり、「くの文を以て思之」(『薬王品得意抄』)・「是を以て思之」(『法蓮鈔』)のように漢文を交えて

表記したりしているのである。一種の強調表現として、「之を以て之をくする」の形が好んで使われたと考えてもよいのではないか。そして、それが「與宿屋入道書」・「與壽福寺書」にも見えるということである。

(ロ)「豈く乎」

十二通御書には、反語文が多い。その中、「豈く□」の形のが、次の八例見られるのである。

*「與北條時宗書」

「於^{チハ}一乘棄捨之國^ニ豈善神不^レ成^レ怒耶。」

「豈不^レ嘆乎。豈不^レ驚乎。」

*「與平左衛門尉頼綱書」

「豈非^ニ破^レ御起請文^ノ乎。」

*「與北條彌源太書」

「此等本文豈可^ニ替乎。」

「於^{チハ}一根本滅^{スル}一^ニ枝葉豈榮^ニ乎。」

*「與建長寺道隆書」

「是豈非^ニ逆路伽陀者^ノ乎。」

*「與浄光明寺書」

「對^{シテ}法華大王戒^ノ小乘蠱^ム蠱^ム戒豈及^ニ相對^ス乎。」

八例のうち、「與北條時宗書」の最初の一つを除き、助辞に「乎」を用いている。こうした傾向は、書き手が意識していない癖のようなものと見られるのではないだろうか。「豈く□」の構文は、若干の見落としがあるかもしれないが、真蹟の現存する遺文中から五十七例拾い出すことができた。ただし、引用文中のものや和文中のものなどは除いている。その助辞の使い方を見ると、次のような結果となる。

- *「乎」を使っているもの 二十二例 (三十八・六%)
- *「哉」を使っているもの 十六例 (二十八・一%)
- *「也」を使っているもの 二例 (三・五%)
- *「耶」「歟」を使っているもの 各一例 (各一・八%)
- *助辞を使っていないもの 十五例 (二十六・三%)

和漢文における一般的な傾向がわからないので、この結果が日蓮聖人特有のものだと単純に考えられない。しかし、「乎」の使用例が多いことは目安になるだろう。逆に、「耶」の使用例が断簡に一つあるだけというのは気になる^(注3)ところである。また、正元二年(一二六〇)二月に書かれた「災難興起由来」と「災難對治鈔」には「豈く□」の構文が各三例、文永九年(一二七二)一月の「法華浄土問答鈔」・二月の「八宗違目鈔」には各二例あるが、助辞はすべて「乎」を使っているといった偏りを見せている例もある。真蹟が現存しないので原則からは外れるのであるが、「聖人初期の教学を代表する重要な遺文」^(注4)という「守護国家論」(正元元年)では、十四例中、実に十二例が「豈く乎」

の構文であつて、十一通御書同様、圧倒的に「乎」の使用例が多い。もつとも、文応元年（二二六〇）七月の『立正安國論』では七例中一例が「乎」だけで、五例が「豈く哉」の形であり、残りの一例が「豈く也」である。ただ、「豈く□」の構文だけを見ると、この時期の日蓮聖人に、同じ助辞を使う傾向があつたと、認め得るのではなからうか。

(ハ)「令(しむ)」の用法

和漢文に於ける「令」の意味用法については、国語学の分野で様々な論議がなされている。^(注5)「吾妻鏡」などに、使役・尊敬の意味だけでは説明できない用例（例えば、一説によると謙讓）が、数多く存するからである。そして、十一通御書にも、「令」の使用例が四十一あるのである。

*「與北條時宗書」

- 1 謹令言上候。
- 2 速調伏蒙古國人而令安泰我国給。
- 3 爲神爲君爲國爲一切衆生所令言上。

*「與宿屋入道書」

- 4 就先年勘之書安國論普合令言上候畢。

5 希被^{クハレ}停止^セ御歸依^ノ寺僧^ヲ宜^シ令^ム歸^レ法華經^ニ。

6 以此^ヲ趣^フ十一^ニ所^ニ令^ム申^セ候也。

7 早^ク令^ム遂^ケ日蓮^カ本望^ヲ給^ヘ。

8 十一箇^ト所^ト申^ス平左衛門尉殿^ノ所^ニ令^ム申^セ候也。

9 委悉^シ雖^ト申^シ度^ト候^ト上書^ヲ分明^ニ之間^ニ令^ム省略^セ候。

10 以^テ御氣色^ヲ御披露^所令^ム庶幾^ニ候。

* 「與平左衛門尉頼綱書」

11 就^テ蒙古國牒^ノ狀^ヲ到來^ニ令^ム言^セ上^セ候畢[。]

12 抑^モ先年^ノ日蓮^如立正安國論^ノ勸^レ之^ノ少^ク不^レ違^ハ令^ム普合^セ。

13 爲^シ神^ノ爲^シ君^ノ爲^シ國^ノ爲^シ一切衆生^ノ令^ム言^セ上^セ之^ノ處^也。

* 「與北條彌源太書」

14 去^イ月來臨^ル急急^{キキ}御歸宅^ニ無^ク本意^ヲ令^ム存^セ候畢[。]

15 日蓮兼^テ而^テ令^ム存^セ知^セ之間^ニ既^ニ造^テ一論^ヲ而進^メ覽^ム之[。]

16 所詮^止諸宗歸依^ヲ可^キ令^ム信^ジ受^メ一乘妙經^ノ之由^ヲ捧^メ勸^ム文^ヲ候。

17 召^シ合^セ諸宗^ヲ令^ム諸經勝劣^ヲ分別^シ給^ヘ。

- 18 早令^{ウツメタマヘ}調^ニ伏蒙古國^ニ國土安穩^{ナラ}上。
- 19 此趣方方驚^レ之令^メ進^セ愚狀^ヲ候也。

* 「與建長寺道隆書」

- 20 日蓮所^{カニ}勸^{ヘタル}之少^シ不^レ違令^{ハム}普合^セ。
- 21 何蒙古國^ノ大兵可^ク令^ム調伏^セ乎。

- 22 此趣鎌倉殿・宿屋入道殿・平佐衛門尉殿等令^レ進^セ狀^ニ之候。

* 「與極樂寺良觀書」

- 23 鎌倉殿其外令^メ進^セ書狀^ヲ候。
- 24 長老忍性速^ク翻^シ嘲弄^ノ之心^ヲ早令^ク歸^セ日蓮房^ニ給。
- 25 此趣奉^リ始^メ鎌倉殿^ヲ建長寺等其外令^メ披露^セ候。
- 26 文言多端不^レ能盡^ス理^ヲ併令^メ省略^セ候。

* 「與大佛殿別當書」

- 27 此趣方方令^メ申^セ候。

*「與壽福寺書」

- 28 然^レ者先年日蓮如^ク勸^レ書立^シ正安國論^ノ令^ム普^ク合^セ。
- 29 早^ク齋^シ邪見^ヲ捨^テ達^シ磨^シ法^ヲ可^ク令^ム歸^ス一乘^ノ正^ノ法^ニ。
- 30 然^レ間^ニ方^ニ令^テ披^キ露^セ候^ノ處^ニ也。

*「與淨光明寺書」

- 31 先年如^ク勸^レ立^シ正安國論^ニ申^セ少^シ不^レ令^ム相^ム違^フ。
- 32 内^ノ内^ニ可^ク被^レ行^ハ日本第一^ノ勸^ニ賞^ニ歟^ト令^レ存^セ候^ノ處^ニ剩^ハ不^レ預^ラ御^ノ稱^ニ歎^ニ候[。]
- 33 此^ノ趣^ニ方^ニ令^テ披^キ露^セ候^ノ畢[。]
- 34 早^ク集^メ一^ノ處^ニ而^シ令^メ遂^ケ對^シ決^シ給^ヘ。
- 35 日^ノ蓮^ノ令^テ庶^シ幾^セ處^ニ也。

*「與多寶寺書」

- 36 此^ノ旨^ニ方^ニ令^テ申^セ之^也。
- 37 言^ハ不^レ盡^ク心^ヲ書^ハ不^レ盡^ク言^ヲ併^カ令^メ省^シ略^セ候[。]

*「與長樂寺書」

38 就^キ蒙古國調伏之事^ニ方^ヘ方^メ令^ニ披露^セ候畢^ス。

39 既^ニ日蓮如^ク勒^ル立^テ正安國論^ニ令^ム普合^セ。

40 速^ニ集^ム一^ニ處^ニ遂^テ談^ハ合^フ令^ニ評議^セ給^ヘ。

41 日蓮所^レ令^ル庶幾^セ也[。]

まず、「令」給」の形で使役・尊敬を表わす典型的な用法が七例（2・7・17・18・24・34・40）である。21は、諸寺の長老等を「増上慢^マ大惡人^{ナリ}」と非難した文に続くので、「どうして（彼らに）蒙古國の大兵を調伏させることができようか、いやできない」の意であろうから、使役の用例と考えられる。残りの三十三例が、問題の「令」である。ここでは、來田隆氏の御論稿を参考^{（注6）}にしたい。來田氏は、従來の所説を踏まえた上で、「吾妻鏡」の「令」の「意味用法を体系的構造的に把握する試みはなお必要」という観点から、意味用法を「使役（尊敬）表現の「令」・「他動詞文構成の「令」・「被支配待遇的表現の「令」」の三つに大別して整理しておられる。これに、十一通御書に見られる、使役・尊敬以外の意味用法と考えられる三十三例の「令」をあてはめてみる。

一見して、謙讓とそれのような用法が多い。來田氏の分類でいうと、「被支配待遇的表現の「令」」のうちの《許容依頼》と考えられるものである。《許容依頼》は、「支配主の許可を得てする意であり、「くさせていただく」という謙讓の意味あいを伴うものである。そのため謙讓動詞とともに用いられるものが殆どを占める」と説明されている。謙讓動詞を伴う、1・3・4・11・13（言上）、19・22・23（進ス・進状ス）、6・8・27・36（申ス）がその典型である。また、9・26・37（省略）、10・35・41（庶幾）、25・38・30・33（披露）なども《許容依頼》と考えられるであ

ろう。「許容依頼」の「令」は書状・請文・願文などに集中して見られる」ので、十一通御書にその用例が多いのも当然である。

12・20・28・39は、「他動詞文構成の「令」の用法の説明中にある「事態を動作主」とする無意志動詞に「令」が付せられる場合」に相当するのではないか。蒙古からの牒状が到来したという事態が、「立正安國論」の所説に「普合」したというのだからだ。来田氏は、次の二例を示しておられる。

長門江景国、蒙御臺所御気色、是奉扶持御妾若公（略）事、依令露頭也

平家黨類等、在伊勢国之由、依令風聞、遣軍士之時者

そして、「露頭ス」「風聞ス」という事態の実現が人為的意図的なものであるという意を「令」によって示したものと解される」としておられる。十一通御書の例でも、「普合ス」という事態が起こることは、日蓮聖人の意図する所であったはずなのである。また、31も同様に考えられるだろう。

5・16・29は、尊敬と解したくなる例である。これらは、「他動詞文構成の「令」の用法の説明中にある、「意志的行為であることを「令」の添加によって含意させたもの」とすることができようか。また、14・32は、「被支配待遇的表現の「令」の中の「間接被動（「支配主の直接的働きかけではないが、その動作・状態が動作主の動作の要因となっている場合）」ととれようか。

真蹟の現存する遺文には「令（シム）」の使用例が九十程度あり、そのほとんどが使役と考えられる。十一通御書に見られるような単純に使役・尊敬ととれない用法のものは十数例にすぎない。また、使われている意味用法も、完全に一致するわけではない。ただし、全体の数が少ないとはいえ「宿屋入道再御状」のような、十一通御書が出され

たことと密接な関係のありそうな遺文に、それが見られることは注目すべきであろう。

去八月之比令(進) 愚札ヲ之後至 干今月付是非不給返報(中略) 忽々之故令想亡歎(注7)

「愚札ヲ進ラセシムル」の「令」は、「許容依頼」の用例である。「想亡セシムルカ」の「令」は、「日蓮聖人全集」第一巻・「宗義 1」の訳文が「お忘れになったのでしょうか」となっているように、尊敬ととりたくなる例である。しかし、来田氏は「令」の単独用法が尊敬を表すと解釈することに疑問が呈せられている。ここも、漢語サ変動詞について意志的行為であることを顕現する用法ととることができよう。先の引用につづき、「被輕略之故慳□一行歎。」とあり、前掲「日蓮聖人全集」では「経略せらるるの故に、□一行を慳むか。」と訓読している。「想忘」にだけ尊敬語を付したと考える必要はあるまい。「宿屋入道再御状」は断簡なので断定はできないが、宿屋入道に強い調子で訴えるために、意識的に敬語の使用を控えた文体で書かれているのではなからうか。「驚之」・「諫之」のように他の手紙では謙讓語を添えているようなところにも使っていないし、文末の丁寧語も見られないからである。

もう一つ、些細なことだが、気になる点がある。それは、十一通御書に七例もある「此趣」(6・19・27・33などに見える)という言葉が、真蹟の現存する遺文に見当たらないことである。「其趣」・「此事」・「此意」などの用例ならある。ただし、真蹟にこだわらなければ、「伯耆殿御返事」(日興筆の古写本あり)などに見えているので、「此趣」が日蓮聖人の用語ではないと即断することはできないようである。

十一通御書は、明らかに日蓮聖人の著作の特徴を有している。前稿の調査でも同様の結果であった。日蓮聖人の真作である可能性が高いといっても過言ではないだろう。十一通御書に触れているものの、偽書説のある「種々御振舞

「御書」は、仮名遣いが日蓮聖人の他の遺文とよく一致するようだ。ただし、こうした点を考究するには、多くの原典を参照する必要がある。また、その仮名遣いが日蓮聖人特有のものであるかどうか、調査しなければならぬ。

しかし、日蓮聖人の著作に精通していた学僧であれば、十一通御書を偽作することも充分可能なのではないかという思いも捨てがたい。そう思う理由は、なによりも、十一通御書の出現の仕方が不自然であるという点にある。後の弟子達が迫害をおそれて隠したという理由も納得しがたい。十一通御書に、他に比して、特別に激烈な内容が書かれているわけではないと思うからである。偽作であるにしても、日蓮聖人の思想はもとより、その用語・用字法などに精通していた高度な学識の持ち主の作であるはずである。

注1 片岡了氏「日蓮上人の文体―開目抄と消息から―」（『仏教文学研究』第六集・昭和四十三年六月）。

古瀬順一氏「日蓮遺文の文体―計量分析を通して―」（『統計数理』第三十六卷第一号・一九八八年）。

注2 日蓮聖人の著作からの引用は、昭和定本「日蓮聖人遺文」による。

注3 昭和定本「日蓮聖人遺文」第四卷・「断簡新加」三三二。

注4 渡辺宝陽氏・小松邦彰氏編「日蓮聖人全集」第一卷・「宗義1」解題による。

注5 青木孝氏「吾妻鏡に見える謙讓の「令（シム）」」（『青山学院女子短期大学紀要』第十八輯 昭和三九・一〇・一、松下貞三氏「吾妻鏡における「令」の考察」（『国語と国文学』第五二巻五号 昭和五〇・五）、来田隆氏「和化漢文に於ける「令」の用法」（『鎌倉時代語法』（『鎌倉時代語研究』第五輯 昭和五七・五）、来田隆氏「吾妻鏡」における助動詞「令」の用法について」（『鎌倉時代語研究』第十二輯 平成元・七）などがある。

注6 注5の「吾妻鏡」における助動詞「令」の用法について。

注7 「進」を「日蓮聖人全集」第一卷・「宗義1」所収の本文により補った

キリシタンの終末論

——島原・天草の乱を中心として——

紙谷威廣

I. キリシタン信仰と終末論

潜伏キリシタンの「天地始之事」の中に終末論的な表現が明確に現れていることは、注目に値することである。すなわち、現在の世界が滅亡する時期が迫っており、そのときに救われるのはキリシタンだけであるという信仰が、彼らの伝えてきた「天地始之事」の主要なモチーフとなっていた。さらに、それらの終末論的な認識の基盤として、東アジア世界に共通する洪水神話、とくに兄妹始祖伝承をとまなう洪水神話が存在することも、また重要なことであるように思われる。潜伏キリシタンは東アジア一帯に広がる洪水神話を基盤にキリスト教的な教義を加えることで独特な終末論を形成し、江戸時代を通じてその終末論を伝承してきた。⁽¹⁾

潜伏キリシタンはそれらの終末論的な伝承をバネとして、キリシタン禁制下の江戸時代を生き抜いた。さらに、幕末維新期の激動の中で流刑という迫害を受けながらも、キリシタン信仰の正当性と自由を主張して、明治時代の復古

的な「天皇制支配」のもとで信教の自由を獲得したのである。信教の自由の獲得については西欧諸国の批判と圧力があつたとしても、それらの批判を招いたきっかけとしての、キリシタン信徒への迫害という衝撃的な現実がなければ、明治政府も江戸幕府同様に「キリシタン邪宗門」の禁止という政策を変えることはなかつたであろう。

高木仙右衛門は「浦上四番崩れ」で捕らえられた一人である。長崎代官所の役人の改宗の説得にも応じなかつたために、明治維新後新政府の役人によつて、仙右衛門は津和野藩に流罪となつた。しかし、彼は津和野藩の役人に対して堂々たる論陣を張つて、キリシタン信仰が国法に背くものではないことを主張し、拷問にも屈せず信仰を守り抜いた。守山甚三郎もまた、津和野藩への流刑を耐え抜いて信仰を守つたキリシタンであつた。⁽²⁾

仙右衛門や甚三郎を支えたのは、キリシタン信仰を貫くことによつてゴセ（＝後生）の「救かり」を得ること、すなわち死後に天国に生まれ変わることであつた。たとえ、キリシタン信仰の故に殺されたとしても、死後はパライソ＝天国に生まれ変わるのであつたならば、死をも恐れる必要はなかつたのである。拷問に屈服する者が続出する中で、他の人々を励まして耐え抜いたのは、神にそむいて地獄に墮ちることを嫌つたからである。彼らには、間もなく訪れるであろう世界滅亡の時が意識されていて、そこで救済の対象となるのはキリシタンだけであることが明確に認識されていたのである。その意味で、終末論的な認識こそ、幕末維新期のキリシタンを立ち上げさせ、結束させた原動力であつた。

しかしながら、終末論的な認識がいつでも人々をより高い認識へと導くとは限らないであろう。それどころか逆に、世界の終末の到来というヒステリックなイメージは人々を希望のない状況へと導くことも少なくない。島原・天草の内乱では、やはり終末論的なイメージが人々の間に浸透し、多くの犠牲をともなう内乱状況へと駆り立てた。その二

つの時期に現れた終末論はともに世界宗教としてのキリスト教が日本の民俗文化に定着するとき生み出されたイメージであった。この小稿では、これらの終末論に共通するものは何であったのか、また、それらの役割を全く逆転させたものは何であったのかという問題を宗教民俗学の立場から論じてみたい。

II. 島原の乱の歴史学的評価

島原の乱の歴史的意義について、深谷克己は幕藩体制的な村落を形成する途中の農民の窮状によって引き起こされた一揆であって、キリシタン信仰が否定されたために起こったものではないことを指摘している。⁽³⁾ 実際に、反乱の契機となっているのは領主の過酷な年貢取り立てであったことは、多くの研究者によって支持されてきたようである。⁽⁴⁾ これには、それまでの戦国期における国人や土豪層などの在地領主の支配に対して、新たに家臣団を編成して一円支配権を確立する幕藩体制的な大名の支配への変化と、年貢収奪の過酷化が加わっていたと深谷は判断している。

しかし、それにもかかわらず、この島原の乱は幕府等の支配勢力によってキリシタンの内乱と位置づけられており、また、農民の結集した原点がキリシタン信仰に由来するものとして理解されてきたのである。このことは江戸時代を通じて体制側の理解となり、また、キリシタン信徒の武力反乱への恐怖をおもることによって、庶民への意図的なキリシタン禁制の理由とされてきた。その結果として、あるいは幕藩体制側の支配の手段として、島原の乱は通俗的な反キリシタン文献の中で恐るべき事件として取り上げられ、一般民衆のキリシタン邪宗門観を掻き立てる材料となっ

ていたのである。⁽⁵⁾

その意味で、天草や島原の農民が結集した原理としてのキリシタン信仰の本質を明らかにすることが望ましいにも関わらず、歴史的事実としての島原の乱の発端となった歴史的状况が、史料の不足によって不明確なままであるように思われる。研究状況の不充分さの原因は、深谷が指摘する島原の乱の性質、すなわち、崩壊しつつある国人・土豪層と新たに形成されつつあった近世的な村落の未成熟さといった条件によって、この内乱の記録が的確には行われなかったためではないだろうか。

さらに、籠城したキリシタン農民（キリシタンではない者も当然加わっていたのであるが、彼らもキリシタンとして殺害された）のことごとくが斬殺されたのであり、記録は残り得なかった。ごくわずかに城中から脱出し得た者の記録があるが、それは例外である。⁽⁶⁾つまり、反乱に加わった当事者の側から見た基本的な「一次史料」が欠如しているのである。

それに加えて、民衆教化のために作成された「通俗排耶書」⁽⁷⁾「キリシタンもの」の流布がより一層状況の把握を困難にした。島原の乱をテーマとして、キリシタンへの恐怖をあおり、一般民衆にキリシタン邪宗門観を植え付けようとした「排耶書」は、島原の乱の歴史的事実を隠蔽し、異様なキリシタン観と乱の経過を作り出してしまった。多くの通俗排耶書がキリシタンの到来と島原の乱によるキリシタン信仰の敗退を対比させながら、キリシタン信仰の侵略性を印象づけようとした点は共通の記述を生み出しているのである。

ここでは、島原の乱の経過について詳しく述べる余裕がない。しかし、大まかな経過だけはたどっておく必要があるかも知れない。島原の乱が勃発したのは寛永一四年（一六三七）である。この年号の持つ重要性は海老澤有道が指

摘するように、すでにキリシタン弾圧は終息し、仏教寺院を媒介とした宗門人別制による宗教統制が完成してしまっていることである。⁽⁷⁾したがって、キリシタン農民と呼ぶべき人々はすでに表面的には存在していなかった。

島原の領主である松倉重政とその子の勝家は、家臣団を引き連れて領地に入部したようである。したがって、それ以前の小西行長に仕えた在地の領主層は所領の支配権を失い、百姓身分へと落とされた。これに加えて、領地入部後の松倉は幕府への軍役などで膨大な年貢を取り立てた。年貢取り立てに応じることのできない農民には、苛酷な処断が行われたようである。年貢未進者には蓑を着せて火を付け、糞踊りと称したという。このような上層の在地土豪への身分切り下げや、農民への苛酷な政治が内乱の最初のきっかけであったことを指摘する見解が多い。つまり、キリシタン農民の一揆というような宗教戦争の色合いは初めはなかったのである。⁽⁸⁾

レオン・バジェスの『日本切支丹宗門史』は島原の事件のきっかけについて次のような記事を載せている。すなわち、苛酷な税の取り立てが行われ、支払いのできないものは殺されたり妻を人質にされて辱められたりしたという。そして「最後に、ある名だたる百姓の娘が連れていかれたのであった。若くてこの美しい娘は、裸にされ、燃えさかる薪で全身を焼かれた。(中略)彼は、悶えて怒り狂ひ、仲間の者を語らって、代官とその家来を襲った。その家来の虐殺された者は、三十人に及んだ。その事件は、十二月十七日に起り、これが一般にわたる反乱の導火線であった。領主側の人々は、島原の城中に囲まれ、町まで焔に託された」というのである。⁽⁹⁾

山口啓二・佐々木潤之介著『幕藩体制』では、「島原口之津で大百姓の妊娠中の嫁が年貢催促の水牢で悶死したことをきっかけとして決起した」としている。⁽¹⁰⁾辻達也は『江戸開府』で「(前略)この地方の農民は信仰と年貢と両面から領主の苛酷な圧迫を受け、ことに寛永十一年(一六三四)から連年凶作であったにも関わらず、年貢はゆるめ

られなかつたので、餓死する者も続出した。ついにたまりかねて立ち上がり、かの大乱となつたのである」として⁽¹¹⁾いる。これらの記述は、幕藩体制移行期の大名による苛酷な年貢収奪の結果として一揆が各地に頻発した事実を踏まえて、島原・天草の一揆が起り、反乱へと発展していったことを主張している。

これに対して、島原・天草の乱を「キリシタン一揆」と理解する研究者は、苛酷な年貢取り立てによる重圧に加え、天候の不順や不思議な予兆をきっかけに、神童と言われた天草四郎らのキリシタンが反乱を起こしたと理解している。この理解の詳細については後述するが、終末論的な雰囲気⁽¹²⁾が島原半島から天草までの広い地域でうわさされ広まっていたことを指摘している。海老澤有道は「キリシタンの弾圧と抵抗」の中で、「島原天草における領主の苛責に対する農民一揆と見る説が有力化している」ことを認めつつも、「一揆の發揮した強韌性」は領民の多くがキリシタンであることや、「有馬・小西遺臣ら元キリシタン武士らの企画・指導のもとに、信仰的に経済的に追いつめられるにつれて、かえって終末信仰が強まり、信仰復興運動が展開された」ためと考えている。⁽¹²⁾

これらの論点はともかく、歴史事実としての一揆のきっかけについては不明確なままであると言わざるを得ない。レオン・バジェスによれば、天草でも「反乱」が起り、領主寺澤が三千人の兵士を集めて攻撃したが逆に「粉碎」されたという。「天草の人々は、キリシタンで、租税のことから」立ち上がったと主張したが、「有馬殿は（中略）、面目を立てるために、人民が叛いたのは宗教のことからだといふ噂の種子を蒔いた。天草の領主も亦、同様な口実を設けた」という。この時点からすでに、この事件のきっかけは不明確にされているのであろう。

長崎奉行は「天領」を守るために四万人の兵を集めたという。肥前・肥後の兵士が島原の山々を取り囲み、寛永一五年（一六三八）一月三日の戦闘で天草の反乱者が破れた。しかし、有馬の反乱者達も加わつた三万五千人が原ノ城

に籠城した。反乱者の大将は十八歳のヒエロニモ益田四郎（時貞）であった。大坂から以西の大名が兵を率いて島原に向かった。長崎からはジャンク船の大砲が島原へ移され、オランダ商館長クーケバッケルの指揮する軍艦が島原半島の包囲に加わり、二月二日から三月二日に至るまで城を砲撃した。有馬勢（とパジェスが呼ぶところの）反乱軍は暫くは優勢を保った。これは参加した大名達の統率がとれなかったためであることをパジェスは指摘している。

これらの個々の大名による攻撃の失敗が続く中で、籠城した反乱軍の糧食も尽き始めていたという。さらに、三月末には二〇万の軍勢が原ノ城を包囲していた。城が陥落したのは四月一五日で、籠城した反乱者達は老若男女を問わず皆殺しにされたという。益田四郎の首は長崎に持ち帰って、人々の前に曝された。反乱を起こされた松倉・寺澤・有馬の諸大名は領地を没収され、別な大名に領地が分封された。これが鎖国によって排除されていた期間に、外国から見てまとめられた島原・天草の乱の概要である。⁽¹³⁾

深谷克己は島原・天草の乱が持っている性格を国人・土豪一揆と農民一揆との中間に置こうとしている。⁽¹⁴⁾戦国時代に先行する室町政権末期は応仁の乱をはじめとして内乱に明け暮れていたが、その中でも加賀の一向一揆などに代表される、在地の国人や土豪層が在地支配権を獲得して行くための戦いを数多く起こしている。これらの国人や土豪層はいずれ戦国時代の争乱の中で、戦国大名の家臣団に吸収されて行くか、あるいは農民身分へと転換して行くのである。しかし、戦国時代の末期に他ならない島原の乱当時の島原・天草地域では、農民とも武士とも区別されない土豪層が存在したのである。

レオン・パジェスの述べる島原の乱の発端にある、大百姓の娘が殺された事件とこれに憤激した一揆の集団は、大百姓とそれを取りまく隷属農民の姿を思い浮かべることができるのではないだろうか。深谷は当時の村落内部の大百

姓と名子、小百姓の混在した状況を推察している。すなわち、武士的農民とその隷属民、及び自立しつつある小農民ということになる。反乱の中心となった、天草四郎や彼をとりまく人々が小西行長の遣臣とか、有馬の家臣とされるのは、これらの人々が農民的な生活を送る一方で戦争にも駆り出される武士的な性格も兼ねていたからと推定される。

深谷は、天正一七年（一五八九）の天草に起きた「天草一乱」という事件から、島原の乱の指導者達の階級的性格を確定しようとした。「天草一乱」は新しい大名小西行長に対する、「五人衆」と呼ばれる城持土豪_{||}国人によって起こされたものである。この五人衆は戦乱の中で保身のために、有力な諸大名の間を巧みに去就しつつ在地支配を守ろうとしていた。小西が天草の大名となったときには、五人衆は諸百姓（村落上層農民）に対して代官としての権限を与えられる。ところが、小西は宇土城建設に際して、これら五人衆を百姓同様に城の普請に使役しようとするのである。「地侍」である五人衆はこれを拒否するが許されず、諸百姓とともに新領主排撃に立ち上がる。この事件は、有馬・大村の援軍によって鎮圧されて終わる。つまり、この事件の「五人衆」と同様に、土豪層に属する益田四郎らの在地支配層が支配権を維持しつつ、幕藩体制的な大名権力に対抗したのが「島原・天草の乱」であったと深谷は考える。すなわち、土豪層は維持してきた在地支配権を新領主に奪われようとしており、苛酷な年貢収奪を強行する幕藩制下の領主に対して、農民層を巻き込んで立ち上がったのである。¹⁵⁾

島原についても、深谷は在地の土豪層や有馬の旧家臣の存在が大きかったことを指摘している。有馬晴信はキリシタンを保護した大名であり、自らも洗礼を授けられたキリシタン大名である。当時の九州では南蛮貿易の利益のためにもキリシタンとの交流は欠かすことができなかつたであろう。しかし、徳川家康によって父親の領地を与えられた有馬直純はキリシタン信仰を捨てて、仏教への転教政策を実施する。ところが、この政策は旧家臣団を含めたキリシ

タンの反発を受けて失敗する。有馬直純は日向延岡に国替えになるが、旧家臣団は移住を拒否したという。その結果、在地の土豪層は村落住民とともに、旧来の支配構造を維持しながら居残ったのである。

有馬の旧地を与えられた松倉重政は自分の家臣団を引き連れて島原に派遣された。松倉氏は、旧来の在地支配の構造の残った地域に、全く別の支配構造を作り上げることになったのである。「島原風土記」もしくは「川村文書」と呼ばれる記録によれば、島原藩内の古城趾が畑や野、あるいは木山となっているという。土豪層の城が取り壊されて、有馬の旧家臣団は百姓身分（村落上層農民化）となるか、あるいは追放¹⁶牢人となったと、深谷はこの史料によって推定する。したがって、深谷は「島原・天草ともに大名の一円支配性の進展と国人・土豪層の在地専制力の基本的解體によって、本来的な国人・土豪一揆の成立は不可能な段階にたちいたった」と考えるのである。¹⁶

しかし、逆にこの内乱が単なる農民一揆ではなく、解体しつつある国人・土豪層の指導の下に戦われ、農民をも巻き込んで内乱を拡大することができたのは土豪層の在地支配が現実には残されていたためとも考えられるであろう。深谷は急速に大名領地化が進められる中で、農民層の負担が増大し、天候不順による凶作の影響が新しい領主への批判を生み出したことも指摘している。その結果として、解体しつつある在地土豪層と農民層が結びついたのである。¹⁷したがって、その意味でキリシタン信仰を守る土豪層によって島原・天草の乱が引き起こされたのであり、キリシタン信仰は農民を巻き込むためのシンボルとしての役割を果たしたとも考えられる。

島原・天草の乱の結果として、農民層を巻き込むことのできる在地土豪層は島原半島や天草からは姿を消す。その代わりに、幕藩体制的な自立した小農民が村落の主体として登場してくるのである。さらに、深谷はこの闘争が生み出した結果として、農民への過度の税や課役が制限されるようになったことを評価すべきだとしている。すなわち、

諸大名は積極的に農民経営に取り組む必要が生じていることを理解したのである。島原・天草の乱はこのような成果を獲得する、貴重な犠牲を必要とした階級闘争として位置づけるのが適当であろう。⁽¹⁸⁾しかしながら、それと同時に多くの犠牲をとめないながら戦われた内乱が、キリシタン信仰を旗印として戦われた理由も明らかにすべきである。何故ならば、加賀の一向一揆などに始まる大規模な宗教一揆は、この島原・天草の乱を最後に歴史的な舞台から姿を消すからである。

Ⅲ. 予言の実現としての天草四郎の出現

島原の乱については数多くの記録が知られている。それらの史料の多くがキリシタン弾圧に反発して一揆が起こされたことを主張している。とくに注目されるのは、キリシタンの間に奇妙な予言と終末論的な意識が強く流布していたことを物語っている点である。いずれも、歴史学的事実とは無縁の事象と考えることができるが、むしろ宗教民俗学的な観点からは無視し得ないことである。島原・天草で一揆が勃発してからか、あるいは以前からかは明確にできないが、奇妙な予言が広まっていたという。『天草土賊城中話』によると以下のようである。

(前略)天草のうち上津浦と申す處に住處仕り候伴天連、二十六年以前、御公儀により御拂ひ、異國へ遣され候刻、伴天連書物を以て申遣し候は、「當年より廿六年めに當りて、必ず善人一人生れ出づべし。其をさなき子な

らはずに諸學を究め、天にしるし現すべし。木に饅頭なり、野山に白旗立ち、諸人の頭にクルス立ち申すべく候。東西に雲のやけ、必ず有るべし。諸人の住居、皆皆やけはつ可し。野も山もやけあるまじき」由、書置き候由、申し候。¹⁹⁾

この史料は、原の城に立てこもりながら幕府軍に投降した軍師の山田右衛門作が寄せ手に語った話を記録したものである。山田右衛門作は有馬氏に仕えたが、日向に有馬氏が移封されて後は口之津に残った。西洋画に優れていたで松倉氏に見いだされて仕えた。島原の乱に積極的に加わろうとしなかったので、妻子を人質に城中に誘われた(『耶蘇天誅記』)のだとされる。あるいは村民を一揆勢から逃れさせた(『嶋原始末記』)という逸話も伝えられている。または、城中から矢文で幕府軍と連絡を取り合つて降伏したともされている。しかし、後にこの右衛門作もキリシタンとして処断されている。²⁰⁾

ここにのせられたバテレンの話は天草島の離島である、大矢野島と千束島に住んでいた五人の土豪によつて作爲的に流布させられた話として語られている。そして、天草の大矢野四郎という者こそ伴天連が言い残した人物であるとして、祭り上げたのであるとする。さらに、「丑の十月十五日頃、天地動き申し候程の不思議なる事」が起ころるので驚くことはないと言ひ聞かせたという。そして、一〇月一五日の夜になつて、村々の主だつた者達が談合して、一揆に立ち上がったのだといふ。²¹⁾

あくまでも、一揆の中で投降して生き延びた者の証言であるから、これらの表現の信憑性については慎重に考えなければならぬであろう。その点を考慮に入れたとしても、島原と天草の民衆の間には、救済者としての予言がなさ

れた人物の到来が待たれていたと考える必然性がある。少なからぬキリシタン信徒が弾圧によって改宗・棄教させられていたし、松倉氏や寺澤氏によるキリシタンの探索も続けられていたのである。

救済者の出現には、さまざまな徴があるとされていたことも人々の間に流布していた噂なのであろう。このような異常な天候や予兆とも言うべき兆しが、事実として起こったのかどうかは判断に苦しみどころである。しかし、少なくともこの救済者については不思議な能力が有ったかのように伝えられた記録がある。「肥前國有馬古老物語」では、天草四郎について次のように述べている部分がある。すなわち、「その節、上津浦村より狂気の女一人連越し候。これを色色祈念仕り候へども、快氣を得ず候間、然るべきやうに頼み申し候由申し候へば、四郎聞きて、頓て本服仕るべしと申されし言葉の下より、本服いたし候ゆゑ、諸人驚き」いよいよ信心したというのである。有馬村の農夫によって記録されたものであり、「天和二年（一六八二）」の奥書があるという。⁽²²⁾これによれば、天草四郎は病氣治療に携わる、一種の「シャーマン」としての能力を持つものとして考えられていたと言えよう。果たして、本当にシャーマン的な手法を知っていたのかどうかは判断の材料がない。しかし、周囲がそのように天草四郎を描き出していたとしても、キリシタンの考える救済者がシャーマン的な存在であったことは確認できるのではないだろうか。

ところで、『肥前國有馬古老物語』はその後の天草四郎についても、次のような逸話を述べている。「さる程に、天草赤嶋の沖にて日暮れ候へば、海上に蠟燭四十本燈し見せ申し候」という。⁽²³⁾キリシタンパテレンの魔術については、その後の通俗排耶書の中でも多く取り上げられることになる。キリシタンについての重要なイメージの一つなのである。したがって、このような記録もまたキリシタンについてのイメージを作り上げる上では共通の土台に立っていたと言えるべきであろう。さらに、次の逸話はより重要な意味を持っていると思われる。

次兵衛申すやう、「さあればこそ。また不思議なるものの天より貝の殻に入れ降り候」とて、見せ申し候を見れば、「四郎殿の御意少しも疑ひ候者は、則罰あたり候」と書付けたるを見せ申し候。²⁴

島原・天草の乱平定後に記されたものであるから、当然好意的にかかれたはずはないと思われる。しかし、この部分で述べられている天草四郎は「疑われてはならない」者であり、疑いを持つ者には「罰」が下されると言うのである。ここでは、むしろ伝説としての天草四郎は救済者ではなく、疑いを持つ者には「罰」で報復する恐ろしい存在となっている。予言によって出現した天草四郎は民衆をも畏怖させるシャーマンとみなされたのであった。

もちろん、ここで見ることでできる史料からは「天草四郎」の実像が浮かび上がってくるとは保証できない。むしろ、それら天草四郎としての描かれた姿の全てが虚像である可能性もある。しかしながら、この島原・天草の乱を通じて、「歴史」を動かしていたのはキリシタン信仰が生み出した「虚像」であつたのではないだろうか。予言を実現する人物として、歴史の表舞台に出てきた天草四郎は一六歳の少年に過ぎなかつた。この少年がいかにほどのことかできたであろうか、ましてや、自ら救済者たり得ることなどはできなかつたであろう。

IV. 世界の終末の予言

下田曲水編『暫定天草切支丹史』によれば、「天草郡御代官支配に成事」と称する文章に次のような記載があると
いう。

或書に曰寛永十四丁丑年切支丹一揆蜂起之濫觴を尋ぬるに寛永十一戌の年より子年迄三ヶ年の悪作にて近國にも飢饉せり別て天草郡は領主の計ひ悪敷子の暮より丑の春に至り閏三月より四月の間餓死の人多く親類朋友相盜し押入強盜不絶して悪事日々に盛るころ高来郡も兼て領主の計ひあしく其上去る元和四年より鳥原の城を築き在々の諸民数年の城普請に人夫を仕はれ粒骨を盡し年々不作し弱り果てたる上此節困究天草に倍して飢渴多しと也。漸麦の毛に取付飢を助り田畑の根付延引して五月の中頃迄かゝりける麦作とても不熟にて諸民心を苦しむの處六月の初より兩郡大旱魃にて東西の空例年に替り朱の如く焦がれ稀有の雲色なれば是又唯事にあらずとおもふ處天草郡に云出しけるは西の雲焦がる、は當十月より世の中火の地獄となりて悉く焼沈む。其中に切支丹は天帝より下りて救ひとり玉ひ安楽に置かせ玉ふと雜説すること専ら也。霜月そろりはこそろり明三月はさんほろりと拍子入聲をそろえふしおもしろく頃ひけりと是を聞いて幾程も無き世の中に天帝の手に洩れたらば火地獄に入るべしと兩郡切支丹に成りしとぞ。是偏に彼の宗旨を企てしもの、言出せしことならん。⁽²⁵⁾

寛永一一年（一六三四）から三年間にわたって凶作が続いた。天草では餓死者も出てお互いに強盗に入る者も出てきた。これに加えて、島原では領主は城の普請などに人夫として諸民を使役したので、飢饉に加えて困窮の苦しみまでも加わった。麦のできる頃になっても、麦の出来も良くなかった。このような時期に、六月のはじめから空の色が朱色のように焼けて見えた。これは唯事ではないと思っていると、天草郡の人々は西の雲が焼けるように赤いのは世の中が火の地獄となつて、悉く焼けて滅びるからだと言ひ始めた。キリシタンだけは天帝が天から下つて救つて下さり、安楽に過ごせるとも伝えていた。おもしろ、おかしく拍子にあわせて、唄を歌いつつ信仰が広められ、キリシタンになる者が続出したという。まさに、終末論的な信仰が展開したと伝えられていたのである。

このような終末論的な信仰がどのようにして生じたのであろうか。その問題を論じる前に、もう少しこれらの信仰の実態をうかがつてみたい。海老澤有道によれば、『高来郡一揆之記』や『島原記録』には「切支丹浪士たちが、秘かに湯島に集まり談合して、天草・島原各地の村々に呼びかけた檄文」が収められている。湯島は談合島とも呼ばれることになるが、切支丹たちが集まって相談したとされる島で、島原半島と大矢野島のちようど中間にある。海老澤の訂正を施した文章によつて見てみよう。

態と申遣し候。天人天降り成され候て、ぜんちよ（異教徒）どもは、でいうす（神）様より火のずいちよ（審判）成され候間、何もの成りとも吉利支丹に成り候はば、ここ許へ早々御越しあるべく候。村々庄屋、乙名、早々御越しあるべく候。島中に此の状御廻し之あるべく候。ぜんちよ坊にても吉利支丹に成り候はば御免なさるべく候。

恐惶謹言。

丑十月十五日

一六 (145)

寿庵

村々庄屋乙名衆中

猶々右、早々村々へ御廻し成さるべく候よし申入れ候。天人の御使に遣し申し候間、村中の者二御申付け成さるべく候。吉利支丹に成り申さず候はば、日本六十六ヶ国ともに、でいす様より御定めにて、いぬへるの(地獄)ニ踏込み成さるべく候間、その分御心得成さるべく候。天草の内、大矢野に此の中、御座成され候四郎様と申す人は、天人にて御座候。爰元二御座候間、その分御心得これあるべく候。⁽²⁶⁾

まさに、この檄文はキリシタン信徒に一揆への参加を進める文書である。果たして、これが一揆、後に反乱として発展して行く「島原・天草の乱」のきっかけとなった文章なのであろうか。その判断は筆者には不可能である。しかし、この檄文は多くの示唆する内容を含み込んでいることは間違いないであろう。天人が天から下って来られて、火による最後の審判の時がやってきたのであるから、キリシタンの信徒となつて、この島に結集せよと言うのである。追つて書きでは、キリシタンにならなければ地獄に堕ちるぞと脅している。天草四郎は天人であり、大矢野島にいるから結集せよという表現には、慈愛に満ちた神の観念のかけらさえもないではないか。

事態は緊迫していたのである。南有馬では、キリストの絵像を祭つて祈っていた人々を島原藩の役人が急襲し、島原で処刑した。農民は代官を襲つて殺害し、事態は急速に展開した。一〇月二五日には、総決起をうながす廻状が村々に送られたという。

急度申遣し申候。当村の代官林兵左衛門、でいす様へ御敵討申候間、今日当所ニテ打殺し申候。兼々天人より御申し候事も此の大事ニテ候。いづれもはや思召し立ち候て、村々代官始め、ぜんちよ坊ども一人も残さず討取り成さるべく候。日本国中のずひぞ（審判）此の時ニ候。いよいよ一宗、全鉄之儀、尤もニ存候。なを面談之節申すべく候。仍て村々迄廻状此の如くニ候。以上。

十月二十五日

佐志木作右衛門

山 善右衛門

村々庄屋衆中

村々乙名衆中⁽²⁷⁾

最後の審判、すなわちジュイゾ・ゼラールの到来という「大事」が訪れてくるのだとして、決起を呼びかけたといふのである。海老澤はこのような展開によつて、キリシタン信徒が一揆の軍勢に結集したと捉えている。しかし、これらの檄文や決起の廻状の背後には単純な信仰心だけでは割り切れないものが存在するように思われる。はたしてこれらの廻状を受け取った者達は直ちに鳥原・天草のキリシタンの軍勢を形成したのであるか。次のようなキリシタン誓詞について見てゆくと、海老澤が「たちまち一味同心した」と指摘するほどには、キリシタンの結束が堅かつたようには思えないのである。

じゅらめんと(誓詞)之事

一、当村中の者ども男女小児に至るまで今度吉利支丹宗門ニ立帰り申候事偽り御座無く候。然る上は御教への通り宗旨の御為に各一命を抛ち、御下知次第何分にも相働き申すべく候。此の旨少も偽り申すに於ては

上には天主、さんたまりや、ぜずきりしと、せすうーす(ゼズスの重複)の御罰を蒙り、下にはひいりよ(子なる神、則ちキリストでこれも重複)、すぴりつさんと(聖霊)を始め、あんじよ(天使)、べあと(聖人)の御恵みに洩れ、忽ちに横死仕り、いんへるの(地獄)の苦しみを請け、永く浮むことなく、現世にては諸天狗(悪魔)の手に渡り、追付けらざる(癩者)の身と成り、白癩黒癩と呼ぶべき者也。仍て恐ろしきじゅらめんと此の如く二候。以上。

庄屋

乙名

百姓中

天草四郎時貞善主

伴天連御中⁽²⁸⁾

まさに、我々が知っているキリシタンとは思えない文章の誓詞である。たぶん、島原や天草の多くの人々は領主の命令によって、キリシタンの信仰を受け入れたはずである。また、領主の信仰が変わったことによって、キリシタン信仰を捨てざるを得なかった人々である。このキリシタン誓詞は、約束を違えれば地獄に堕ちて苦しむことを示唆し

た恫喝のように理解することが出来る。このようなキリシタン誓詞は、つまりは天草四郎を大将とした一揆指導者の農民に対する統制力の根元とすべきであろう。すなわち、この一揆の参加者達は「今度吉利支丹に立帰」つた者達であった。このことは「偽り」ではないと誓いをたてる必要があったのである。誓いをたてた上で、彼らはキリシタンの一揆に加わったのである。逆に見れば、キリシタンの一揆に加わらなければ地獄に墮ちるぞと脅迫されていたのである。海老澤が賞賛するほどには、キリシタン信仰は豊かなものではなかったと思われる。

農民達にとっては、一揆の軍勢に加わることが何を意味するかも分からなかったのかも知れない。世界の終わりの時という一揆軍の言葉に従うだけであつたのではないのだろうか。火に燃え上がるような朱色の空と飢えの苦しみ、新しい領主による呵責のない課役、増大する税の負担、これらの苦しみから逃れるために、一揆の軍勢に加わつたのかも知れない。ともかく、これらの史料からは農民の置かれた状況は明確には伝わってこない。天草四郎をとりまいていたわずかな人々の姿が見えるだけである。しかし、少なくともここで表現されていた終末論的な認識は、農民にとつて恐怖をそそるものであつたことは確かであろう。キリシタンとして救われれば、どのような「安楽」を得られたいと言うのか、どのような未来ユートピアが待っていると言うのであつたらうか。

V. 籠城キリシタンと「四郎法度書」

海老澤は原ノ城に立てこもつた天草四郎らが敵陣に送つた矢文から、キリシタンとしての殉教の意識とキリシタン

のユートピアキリシタンの王国を読みとることが出来ると主張している。⁽²⁹⁾ だがもしも、海老澤が「四郎法度書」を読んでいたとしたら、天草四郎らの矢文の中に別な認識を持ちはしなかったであろうか。鶴田倉造は細川家の「永青文庫」にある、「四郎法度書」の本文とそれについての考察を発表している。鶴田によれば、「四郎法度書」は矢文など原城内外に交わされた文書と一括されているが、それらはすでに東大史料編纂所などで発見されているにも関わらず、「四郎法度書」だけはこれまでに報告されていない。しかし、この文書については寛永一五年（一六三八）の一楽苑の細川忠利書状に書写を送付する旨の記述があり、存在が明らかであるという。⁽³⁰⁾

第一条は奇妙な文章で始まっている。すなわち、

今度此城内ニ御籠候各、誠此中如形、罪果（罪過）数をつくし、背奉り候事ニ候へ者、後生のたすかり不定の身
 ニ罷成候処ニ、各別の御慈悲を以、此城内の御人数ニ被召抱候事、如何程の御恩と思食候哉、乍不及申無油断心
 のおよび、御奉公無申迄候事⁽³¹⁾

意味をとれば、「城中に籠もっている人々は（神にそむくという）数多くの罪を犯した者で、後生の救いなどは得られない筈の人々である。しかし、格別の慈悲が（神から）与えられたことによって、城内の人数に加えられたのである。これほどの御恩を授かったのであるから、（神への）奉公をつくすべきである」ということになる。鶴田が指摘するように、この法度が出されたのは「二月朔日」である。すでに熊本で捕らえられた天草四郎の母親や親類からの降伏を進める書状が城外から送られてきている。城内には籠城の是非をめぐる議論が起こっていたと思われる。す

なわち、城内の動揺を抑える必要もあつたはずである。⁽³²⁾

第二条では、オラシヨ（祈祷）、ゼジュン（断食）、ジシヒリナ（鞭打ちの苦行）などの善行だけでなく、城の普請や武器の手入れも奉公であると、籠城のための努力を勧めている。これは籠城や武力による戦いに疑問が出ていた事を示す内容ではないだろうか。もちろん、信仰についての修行も怠るべきではないと勧めている。すなわち、第三条は現世は短い、とくに城中の者にとっては短いのだから、「後悔」^{||} 罪の究明とお札の祈りを怠つてはいけないともいふ。第四条はわがままな者も多いが、「かんにん・へりくだり」が無いから起こることであつて、互いに「大切」を以て「異見」を加え、「此城内の衆は、後生までの友達たるべく候間、指南次第二可被仕候事」すなわち、お互いに意見しあうべきだといふのである。

第五条は不用油断の科にもなるので、夜間であろうとも持口（担当する城門の口であろう）を固めなければならぬ、人によっては小屋に入つてくつろぐ者もいるが勿体ないことなので、下々にもよく言い聞かせるべきだとする。これは城内からの逃亡者を防ぐ手段であつたのかも知れない。第六条は「合点不仕候ものは天狗の法にまかせ、惜露命落可申と存候衆有之候、左様に無之様二、面々の持口随分可被入御念候事」といふ。暇があればくつろぎを求めて「合点」しない者は「天狗」^{||} 悪魔の法にまかせればよいという者がいるが、それぞれが念入りに持ち場を守るべきだといふ。次の第七条は薪を取るとか、水を汲むといつて「下々」が城外に出てゆくが、堅く「法度」として禁止するといふのである。

デウスへの祈念をすれば慈悲を授かるであろうとつけたしてはいるが、この「法度書」の書かれた目的は最後の部分であつたのではないだろうか。下々の城外への逃亡を防ぐことこそ「四郎法度書」の目指すところであつたに相違

ない。そして第七条の最後に「但し親分の人可為吟味候」とつけ加えられている点は興味深い。つまり、親分は下々の人々を吟味なさるべきであるという。ここでいう「親分」とは武士団の中に貫徹していた論理としての擬制的な親子関係に相違ないであろう。戦闘における指揮系統や日常的な生産活動、そして土地の専有をめぐる秩序としての関係、これらの全てを規定していた論理がここに見られるのである。あるいは、キリシタンにおける洗礼の代父母子関係であるかも知れない。潜伏キリシタンの中ではヘコ親とヘコ子といった名前と呼ばれる。そして、この関係は死後のパライン（天国）においても続く関係と認識され、実の親子よりも大切なものとされていたのである。⁽³³⁾

そして、これに加えて注意しておかなければならないのは、島原や天草ではキリシタン禁制の動きにもなつて、キリシタン弾圧に対抗するコンフラリア（組）と呼ばれる組織が作られたことである。島原半島の有家では「マルチリヨ（殉教）の組」が結成されていた。それ以前も、「ミゼリコルヂヤ（慈悲）の組」と称する組織があったが、殉教と信仰の確立のための組織が結成されていたのである。⁽³⁴⁾その他の地域でも同様な組織が見られたことが知られている。助野健太郎によれば、これらの「組の頭には、多くの場合合庄屋・乙名層がなつて、信仰の鼓舞と日常生活の協力扶助とを促進していた」という。⁽³⁵⁾つまりは村落組織を反映したままでキリシタン組織を構成していたことになる。

しかし、いずれにしても城中の反乱者達は相互に逃亡しないようにと監視しあう必要が生じていたのである。その結果、籠城が長引いた原の城では親分と下々は区別され、下々は監視の対象となつていたことがわかる。これが、死後の安楽を願つて「一味同心」しあつたキリシタンの姿であつたのだろうか。むしろ、島原の反乱者達の多くは「終末の時」地獄への恐怖感から、戦いに導かれた羊の群に過ぎなかつたのではないだろうか。

終末論的認識を生み出して、農民を戦いの場に導いていったのは国人・土豪層であつた。深谷克己の指摘によれば、

それらの人々はすでに幕藩体制の成立にともなつて、在地専制力を失い、没落しつつある人々であつた。だからこそ、彼らは終末論Ⅱ世界の終わりを意識せざるを得ず、その意味で、国人・土豪層には未来は存在しなかつたのである。未来を見通す力もなく、農民の心を充分には把握する事もできなかった土豪層の終末論は、それだけにヒステリックなものとなり、農民を地獄の恐怖によつて城内に閉じこめておく必要があつたと考えられる。

Ⅵ・潜伏キリシタンの終末論との比較の中で

「島原・天草の乱」に関わる史料から見ると限りでは、キリシタンの終末論はユートピアの見えない「絶望的」な終末論であつた。終末論自体希望のないところから生まれてくるものであるかも知れない。しかし、江戸時代を生き抜いた潜伏キリシタンには、より生き生きとした息吹の感じられる「終末論」が芽生えていた。そして、同時に潜伏キリシタンの終末論的伝承の中には、「島原・天草の乱」のキリシタン農民が喧伝し、あるいは受けとめたと思われる内容と共通したものが伝えられていたのである。

潜伏キリシタンには「天地始之事」という神話的伝承がある。その「天地始之事」の最後の部分に当たる「此世界過乱の事」では、現在の世界の壊滅と神によるキリシタンの永遠の救済が語られている。その主要部分を掲げると以下のようである。

此世界滅却におよぶ時は、大日・大風・大雨・虫など、あるいは、さまざま懈怠(あり)。七年の間かわりなく也。かるがゆへに、食物大きにたらずにして、有徳の人の食物なども無体に奪取、これを食し、すでに同土食のごとくなるものといふ事。

其時天狗きたりて、まさん木の實を、さまざまに変じさせ、これをくわせ、わが手につけんと巧む。これを食したる人は、天狗の手したとなりて、みな、いぬへりのに落るといふ事。

又七年もたちて、三年のあいだ、田畑はもちろん、四方の山々まで、よくみのりて、大豊年遊覧の御代也。此せつ、悪をすて、善になづきて來たるべし。たすけ得せんとの事也。

又三年もたちければ、天日、地火、一度に和合し、三ち島のくろうすの木燃へ切れ、塩水は油となりて燃へのほり、くさ木は灯心のごとし。十二ヶ所より、火炎、焰と、燃へのほるこそすさまじく、これを見て、畜類・鳥類、生あるもの、人間に服せられ、たすかりなんとぞ、さげびけるといふ事。

次第に焰焼けのほる。三時のあいだに、焼けしまいてぞ滅しけり。其焼けあと、びた一めんの白砂となり、其時、三とうす、とろんの貝を吹きたてたまへば、御作の人間、まへまへより死、たるもの、いま又焼け死せしもの、のこらず、こゝにあらわれいで、此時でうす、量りなき御力をもつて、あにまもとの色身に、よみがやらせたまふといふ事。

(途中省略)

かくて天帝は、大きなる御威光・御威勢をもつて、天くだらせたまいて、道を御踏わけ、御判をうけしもの、三時の間に御選め、右左とり別けさせたまふ。かなしいかなや、左りのもの、ばうちすまうさづからざるゆへ、

天狗とともに、べんぼうといふ地獄にぞおちければ、御封印ぞなされけり。此所にをちたるものは、末代浮らずといふ事、又、ばうちすもふさづかりし右のものは、でうすの御供して、みなはらいぞへまいりける。はらいぞにて、善の多少を御あらためありて、それぞれ位ぞかふむりけり。此所にて、法体をうけ、末世末代自由自在得て、安樂のくらしをするこそたのもしき。あんめいぜす、³⁶⁾

この文章についてはすでに「キリシタンの神話的世界」の中で問題にしたが、キリシタンの伝承の中では、最も明確な終末論が表現されている部分である。キリストを処刑するときを使用した「三ち島のくろうすの木」の残り半分が三三間の柱であるが、これが燃え尽きるときには天と地の火が一緒になって燃え上がり、全ての生き物を焼き尽くしてしまう。「三ち島」は世界の中心となる島なのである。さらに、「くろうすの木」とは世界の中心の柱＝世界樹なのだと考えられる。これが燃え尽きるときには世界が減びるとされていた。つまり、六六間という長さはその当時日本を構成していた六六ヶ国を意味するのである。³⁷⁾

「鳥原・天草の乱」に結集した農民が見た「朱色に染まった空」や三年も続いた凶作、それらの予兆は世界の終わりの時を示していたのではないだろうか。あるいは、鳥原・天草の人々の体験がこれらの潜伏キリシタンの終末論的伝承を生み出したのであろうか。もしそうだとすると、この因果関係を立証することは不可能に近い。

燃え盛る炎の中で、世界の生き物の全てが減び去った後に、天帝の力によって、もとの肉体に魂が戻ってきて、天の裁きを受けるのである。「ばうちすもふ」（＝洗礼）を授かった者は「はらいぞ」へ迎えられるが、そうでない者は天狗＝悪魔とともに、地獄に落とされるといふ。したがって、世界の終わりとは、潜伏キリシタンにとってはデウ

スニ天帝による救済の時なのである。すなわち、キリシタンの希望は世界の滅亡とともに出現するということになる。これらのメッセージはキリシタン信仰の渡来とともに、人々の中に浸透していたと推定しても間違ではないであろう。「天地始之事」に含まれるモチーフにはキリシタン信仰の渡来以前から東アジア世界に広まっていた洪水神話のような伝承が含まれる。⁽³⁸⁾しかし少なくとも、この部分は『黙示録』に由来するモチーフのいくつかが見られるのではないだろうか。「三とうす、とろんの貝を吹きたてたまへば」と、潜伏キリシタンが目にするこもなかつたトランペットという楽器の名称までも読み込まれている。

「ばうちすもふ」をキリシタンは「角欠き」とも呼んでいた。すなわち産まれてきた子供達は角を生やした天狗ニ悪魔に魅入られた「アダン」と「エワ」の子孫である。したがって、洗礼を受けることのなかつた者達は地獄に落とされるのである。洗礼を受けることのできたものは、「はらいぞ」で末世末代にいたるまでの永遠の時間を自由自在を得て、安楽の暮らしをすることができるのである。これこそが潜伏キリシタンの描く世界の終末とその後の世界であつた。では、潜伏キリシタンの言う「はらいぞ」の安楽とはいつた何であつたのだろうか。同じ「天地始之事」の中に次の文章がある。

帝王見るより大ききよろこび、「き、しにまさる器量也。以来郎にしたがいくれよかし」とぞ仰ける。

丸やきいて、「御意御尤に候得共、我等事、大願ののぞみあれば、身をけがす事、かつてかなわぬ」といふ。

王きいて、「いかなる大望も、かない得さする也。郎が妻になれかし」といふ。

丸やこたえて、「王は賤より位なくして、此世ばかれの栄華なり。わづか此世はかりの宿、来世のたすかり肝

要也」といふ。

帝王きいて、「其方は匹夫に、何の位あるや。郎は王の位也。いでいで見すべきものある」と、宝蔵より取出す其品は、金・銀・米銭は、いふにおよばず、或は金欄・蜀江の錦、十間方の猩々緋、珊瑚の玉、瑠璃の香箱、瑪瑙・琥珀の細工物、伽羅や麝香・沈香のをいは玉の尊、「金銀をちりばめたる殿中にくらし、此しなじなも、郎が心だに適いなば、みな其方に得さすべし」といふければ、丸や宝に目もやらん。「其しなじなは、いま当座の宝也。つかいつくせば無益也。さあらばわれが術を御目にかけん」と、天にむかいて合掌し、「只今ふしぎを見せしめたまへ」と、心の内に念願こめ、礼拝すれば、天これをつうじたまいけん、や、あつて、御膳部あたゑたまわりけり。

これを見て、王をはじめ有おふ人々、奇異のおもいぞなしける。帝王かさねて、「さてさてふしぎ見る事かな。ほかに何ぞ奇妙を見まほしく」とありければ、丸やきいてかしこまり、又々、天にむかつて祈誓をかけ、頃は六月暑中なるに、ふしぎや、にわかにかきくもり、雪ちらちらとふり出、まもなく数尺つもりける。王をはじめ有合人々、五体もこゝへ、目口もあかず、たゞ呆然たる有様也。此暇に天より花車に打のり、すぐにびるぜん丸やは御上天ぞなされけり。⁽³⁹⁾

これは帝王から后にと望まれたサンタ・マリアが王に向かつて答える場面である（聖書の物語からは変化している）。その答えは金銀財宝に囲まれた現世は問題ではない、いかに高い位を現世で得ようとそれはすべて「当座の宝」に過ぎないのだと答えて、権力をも否定する。そして、天に向かつて祈り、得られたのは天から下ってくる御馳走である。

生きてゆくための食物が天から与えられることこそ「安楽」であると言っているようである。さらに、次のような部分もある。

これより次第に、いやます人間なれば、食物もたらざるゆへ、天にむかいて、祈誓を掛、「食物、あたまたまわれかし」と、ねがなければ、天帝、虚空に出現しまして、初たねをぞあたまたまふ。其たね、雪の中につくる。明六月よくみのり、八株に八石、其うら九石ぞみのりたり。八穂で八石の田歌の始これ也。其のち、野山にひろまりて、兵糧はたくさん也。⁽⁴⁰⁾

地上に降り立った人間達が食物に不足すると、天帝の力によって籾種が与えられる。この籾の種籾を雪の中に蒔いて見ると、翌年六月には八株に八石とよく実った。さらに、その年の裏作には九石もの籾が実ったということになる。農民達にとっては籾の実りの豊かであることが神の恵みであり、パライソに通じる世界であった。川村邦光はこの雪の中に作る籾とは二毛作の籾であり、天帝^{II}キリシタン宣教師との関係を結ぶことによって、新しい籾の品種を獲得したと理解すべきではないかと考えた。そして、その「世」こそがキリシタンに約束された世界であるということになる。⁽⁴¹⁾幕藩体制下の潜伏キリシタン農民は秘密裏に信仰生活を送らねばならなかった。しかしながら、彼らの描く終末の世界は厳しくとも、終末の後の世界は豊かな「世」の到来が待っているのであった。その豊かな世界に導かれるのは、彼ら「パウチズモ」を授かった者、キリシタン信徒だけであった。彼らこそは、神によって選ばれた存在であるという自負心があったのである。

だからこそ、地獄の責め苦のみが描かれた「鳥原・天草の乱」当時の終末論に比較すれば、潜伏キリシタンの終末論は、はるかに豊かな世界を描き出すことが出来たのである。繰り返すが、天草四郎達は滅び去る階級としての土豪層であった、すでに未来の希望は失われつつあったのである。潜伏キリシタンの農民はそれらの土豪層とは異なり、自らを解放する歴史的位置に置かれていたと言えよう。しかし、それと同時に、潜伏キリシタンは「鳥原・天草の乱」の中で築き上げられた「終末論」を自らのものとして継承してきたのである。⁽⁴⁾

Ⅶ・キリシタンにおける終末論

大航海時代以来、キリスト教は世界各地に伝えられて、さまざまな影響を各民族に及ぼしてきた。キリスト教の布教はヨーロッパの植民地形成と先住民の支配にとって複雑な役割を果たしていた。すなわち、キリスト教の布教はヨーロッパの海外進出の重要な歴史的契機でもあり、また一方では、先住民を教化し、民衆の反感をやわらげる支配のための意図せざる道具ともなっていた。そのような意味において、キリスト教は近代の帝国主義的な植民地支配と切り離せない関係に置かれていたとも言える。したがって、ヨーロッパ社会のみならず、キリスト教は「阿片」としての役割を近世から近代の社会において果たしていたと言えよう。

しかし、キリスト教は植民地社会などにおいてマイナスの働きだけをしていただけではない。宣教師のラス・カサスはラテンアメリカの植民地社会のインディオを代弁して、ポルトガル人やスペイン人の暴力的で、非人道的な植民地支配と戦った。カトリシズムを植民地社会に広めるためには、植民地の住民を守らねばならなかった。信者として

のインディオを獲得するためには、生存権を含めて彼らの人間としての権利を守る必要があったのである。⁽⁴³⁾

それとは別な意味で、潜伏キリシタン達も、自らの信仰を秘密裏に守り、あるいは信仰を明らかにする中で、信仰の自由、言い換えれば思想の自由のために戦ってきたと言えるだろう。もちろん、潜伏キリシタンの信仰は江戸幕府のキリシタン弾圧の中で、公然としたものではなかった。あくまでも秘密の内に村落社会の内部で隠密裏に儀式を行い、集団内部のものとして機能していたにすぎない。その意味では、単なる村落社会の神社祭祀や念仏講などの民間信仰と変わらないものに過ぎなかったとも言える。したがって、江戸幕府やその支配を受ける大村藩などの支配層は村落社会の内部にあるキリシタンの集団を問題とはしなかった。たとえキリシタンであっても、仏教寺院の檀家としての信仰を表面的にでも維持していれば、極端な弾圧を加えられずに過⁽⁴⁴⁾として来ることができたのもそのためである。

しかしながら、潜伏キリシタンは黒船の来航とともに始まった「開国」状況下では、一步も退くことなく自らキリシタンであることを明らかにして、幕藩勢力の目の前で反旗を翻したのである。幕藩体制崩壊の危機であるとは言え、キリシタン信仰を明らかにすることは、処刑を覚悟する必要もあり、周囲の仏教徒の反発も考えられたと思われる。にもかかわらず、潜伏キリシタンはベールを脱いで、公然とキリシタン信仰を表明した。⁽⁴⁵⁾

筆者はかつて、『キリシタンの神話的世界』の中で、「天地始之事」と称する伝承には、終末論的な要素が含まれていて、それがキリシタン民衆を公然たる信仰の告白と幕藩体制への明確な反撃に駆り立てたことを示唆しておいた。日本の潜伏キリシタンには、明確な終末論的認識と世界の崩壊、そしてその後を訪れるであろう「キリシタンの世界」についての希望が現実の問題としてイメージされていたのである。

ところで、日本人の社会認識の中では歴史的な変革の意識が欠如してきたとする見方があったように思われる。歴史学における課題や日本社会の評価のメルクマールとして、歴史的变化のあり方や、体制の変革が漸次的に行われる点などから、日本の社会とりわけ民衆には変革の意識が少なく、明治維新に見られるような上からの改革が一般的であるかのような評価が行われる点が少ない。その現れとして、「終末論」という課題も取り上げられることが少なかつたと言える。

これに対して、民俗学者の宮田 登は『ミロク信仰の研究』を著し、仏教における数少ない終末論的信仰の日本的展開について明らかにした。⁽⁴⁶⁾ 民衆における終末論的意識の存在は、比較的温和で変化を好まないとされた日本社会の中にも、変革の意識と視点が存在してきたことを明らかにするという点で、重要な認識を我々に提供した。

さらに、宮田は『終末観の民俗学』において、日本の民俗宗教や都市における風俗の中で、近世後半から近代にかけて終末観の展開が見られたことを明らかにした。⁽⁴⁷⁾ 幕藩体制下の日本では、変革の意識としての終末論は、さまざまな形をとって表出していた。すなわち、世直しに見られる反体制的な思考や、鯨絵の流行に見られる社会変革の可能性への希望、食行身祿等の富士講による救済への指向など、さまざまな宗教運動の中の終末認識が急速に展開しつつ、明治大正期における終末論の展開の基盤を作っていたことである。

『終末観の民俗学』の中で、宮田は谷川健一と筆者の論点について触れるとともに、潜伏キリシタンにおける終末論をその中に位置づけた。ここで、筆者が問題としたいのは、潜伏キリシタンの「天地始之事」については、とりわけ「反体制的」な終末論の存在が指摘されることである。これは、すでに筆者の『キリシタンの神話的世界』で述べたように、潜伏キリシタンが幕藩体制の宗教統制のもとでは、その存在自体を否定されるという状況に置かれていた

ためであり、この幕末維新期における解決方法としては国家体制としての幕藩体制の崩壊しかあり得なかつたからである。⁽⁴⁸⁾

幕末維新期の浦上信徒をはじめとするキリシタンは、浦上四番崩れに始まる事件の中で江戸幕府、そして後には明治政府の宗教政策と正面から対立しつつ、非暴力の抵抗闘争と宗教論争とを通して、信教の自由を獲得するきっかけを作った。これらのねばり強い宗教運動を支えていたのは、救済の対象として選ばれたという選民意識と「終末論的な認識」であつた。

キリスト教がヨーロッパ社会を離れて植民地社会に定着するとき、さまざまな民俗宗教と融合して、新しい形を生み出してきた。その中で、特徴的な現象の一つに終末論的な展開を見ることが出来る。メラネシアのカーゴ・カルトやアメリカ・インディアンのゴースト・ダンスといった宗教運動¹¹民族運動には、支配者としてのヨーロッパ勢力に對する社会的な秩序の転換を表現するための「終末論」が生まれる。その意味でも、キリスト教は植民地社会の民衆が自己を表現する手段を与えてきたのである。⁽⁴⁹⁾

キリシタンにおける終末論は日本社会における思想的解放の手段としての役割を、幕藩体制と明治維新期において果たしてきたものと考えることが出来るであろう。民俗宗教としてのキリシタン信仰は、本来東アジア世界にあつた洪水神話などの伝承を基盤として、キリスト教の「黙示録」に見られた終末論を受け入れて独特な終末論を形成し、封建社会から近代社会への転換をうながすという役割を担つたのである。「島原・天草の乱」はそのようなキリシタンの終末論をより現実的なものとしてイメージさせるきっかけとなつていたと考えられる。たとえ、乱当時の終末論がキリシタン農民を恐怖心で戦争に駆り立てる道具であつたとしても、潜伏キリシタンの伝承の中では希望に満ちた

終末論へと転化されたと考えたい。

以上

- (1) 拙著『キリシタンの神話的世界』（東京堂出版、昭和六一年一〇月）、拙稿「津波に沈む島の伝承―兄妹始祖神話の比較民俗学的研究―」（竹田 且編『民俗学の進展と課題』所収、国書刊行会、平成二年一月、五〇七頁―五二七頁）
- (2) 高木慶子「高木仙右衛門覚書の研究」（中央出版社、一九九三年二月）、パチエコ・デイエゴ『守山甚三郎の覚え書』（二十六聖人資料館、昭和三九年二月）、浦川和二郎『切支丹の復活 前編・後編』（国書刊行会、昭和五四年二月、原本発行昭和二・三年）等、片岡弥吉『日本切支丹殉教史』（時事通信社、昭和五四年二月）、フランシスク・マルナス『日本キリスト教復活史』（みすず書房、一九八五年五月）
- (3) 深谷克己「宗教と抵抗」（『歴史評論』一八五号、四〇頁―四九頁、一九六六年）、同「島原の乱」の歴史的意義」（『歴史評論』二〇一号、二〇頁―四二頁、一九六七年）
- (4) 辻 達也『日本の歴史 一三 江戸開府』（中央公論社、昭和四二年二月、三九二頁―四一八頁）、山口啓二・佐々木潤之介『体系日本の歴史 四 幕藩体制』（日本評論社、昭和四六年二月、四七頁―四九頁）など参照。
- (5) 『吉利支丹物語』など、江戸時代に流布した通俗排耶書は好んで島原・天草の一揆を取り上げている。
- (6) 『天草土賊城中話』は城中から脱出した軍師の山田右衛門作の話を記録したものとされる。
- (7) 海老澤有道『キリシタンの弾圧と抵抗』（雄山閣、昭和五六年五月、一九一頁―一九二頁参照）
- (8) 前掲『日本の歴史 一三 江戸開府』、三九二頁―三九三頁参照
- (9) レオン・バジエス『日本切支丹宗門史 下巻』（岩波書店、昭和一五年八月、三三四頁）
- (10) 山口・佐々木前掲『体系日本の歴史 四 幕藩体制』、四八頁
- (11) 辻前掲『日本の歴史 一三 江戸開府』、三九三頁

- (12) 海老澤前掲『キリシタンの弾圧と抵抗』、一九三頁～一九四頁
- (13) バジェス前掲『日本切支丹宗門史 下巻』、三三四頁～三三九頁
- (14) 深谷前掲論文「島原の乱」の歴史的意義、「ビエラルヒツシユな農民構成を色濃く残し」ながら「小農民成長が軸となつてやがてフラットな村落秩序へ移行しつつある」段階で、領主の非法と惣百姓との対立を起点とする一揆であると解釈する。階級闘争の中ではあらためて「島原の乱」などを位置づける必要があると述べている。
- (15) 深谷前掲論文「島原の乱」の歴史的意義、三一頁～三三頁
- (16) 深谷前掲論文「島原の乱」の歴史的意義、三三三頁～三四頁
- (17) 深谷前掲論文「島原の乱」の歴史的意義、三八頁
- (18) 深谷前掲論文「島原の乱」の歴史的意義、三九頁、階級闘争として島原・天草の乱を位置づけることは歴史学に基本的な作業であつたと考えられる。この理論的到達点を超える議論が存在するかどうかについては、筆者の知るところではない。しかし、加賀の一向一揆や京都町衆の法華一揆、あるいは戦国の争乱の中の伊勢長島の一方向一揆などの大規模な宗教一揆はこれ以後は成立しない。その意味でも、島原・天草の乱は「画期的」な意義を持つたと言える。
- (19) 『天草土賊城中話』(比屋根安定編『吉利支丹文庫 第三輯 島原天草日記他四編』所収、昭和二年三月、一一三頁)
- (20) 『天草土賊城中話』解題による、七頁
- (21) 『天草土賊城中話』、一二四頁
- (22) 『肥前國有馬古老物語』(比屋根安定編『吉利支丹文庫 第三輯 島原天草日記他四編』所収、昭和二年三月、一五六頁)
- (23) 『肥前國有馬古老物語』、一五六頁～一五七頁
- (24) 『肥前國有馬古老物語』、一五七頁
- (25) 下田曲水編『暫定天草切支丹史』(熊本図書館館友会、昭和一六年二月、復刻版、臨川書店、昭和四九年三月、一三〇頁～一三一頁)
- (26) 海老澤前掲『キリシタンの弾圧と抵抗』、一九六頁

- (27) 海老澤前掲「キリシタンの弾圧と抵抗」、一九七頁、「いよいよ一宗、全鉄之儀、尤も二存候」という文面は内容も明白ではない。キリシタン信徒は一九となって事に当たるとでも理解すべきであろうか。ズイゾ（最後の審判）の時という表現がきわだって特徴的である。しかし、武力闘争は宣教師達が勧めたものではなく、本来のキリシタンの方法であるとは言えない。
- (28) 海老澤前掲「キリシタンの弾圧と抵抗」、一九八頁、一九九頁、ただし、「伴天連」はここには存在しないのであるが、伴天連宛になつてゐる点は疑問がある。文中引用の通り、三位一体の神観念にもすでに誤りが生じている。これは、彼らのキリシタン理解が不充分であつたこと、また、教義上の誤りも存在したことを示している。
- (29) 海老澤前掲「キリシタンの弾圧と抵抗」、二〇五頁、二〇六頁、海老澤は「耶穌天誅記」から「原城紀事」に引用された矢文を材料に、キリシタンの王国意識を含む、信仰宣言を述べていると主張している。しかし、その文章はいかにも漢文調の脚色が多く、材料とするにはふさわしくない。ここでは引用を省く。
- (30) 鶴田倉造「四郎法度書」の考察（『キリシタン文化研究会会報』通卷九七号、一九九一年六月、二二頁、二六頁）
- (31) 鶴田倉造「四郎法度書」の考察、「二三頁、「いったん神にそむいた身であるから、城中に籠もることが出来たことを神に感謝しろ」というのは、いかにも農民の心を無視した表現であらう。
- (32) 鶴田倉造「四郎法度書」の考察、二五頁、城中の食料の欠乏や士気の低下を物語る状況が見られた。それに対して、幕府軍からは降伏を勧める矢文が送られている。
- (33) 古野清人「キリシタン家族における儀礼的親族関係、*patrilineage*の比較研究」（『民族学研究』二二卷四号、昭和三二年、七八頁、八八頁）、同「隠れキリシタン」（至文堂、昭和四一年一月）、片岡弥吉「かくれキリシタン」（日本放送出版協会、昭和四二年六月）等参照。
- (34) 海老澤前掲「キリシタンの弾圧と抵抗」、一八一頁、一八四頁、殉教を恐れず、あえて殉教による死を望む人々があつたことが記されている。
- (35) 助野健太郎「鳥原の切支丹」（『切支丹風土記 九州編』、宝文館、昭和三五年三月、二四八頁）
- (36) 「天地始之事」（『キリシタン書・排耶書』、日本思想大系二五巻、岩波書店、一九七〇年一〇月、四〇六頁、四〇八頁）

(37) 世界の中心となる島の六十六間の本が燃えることによって世界の滅亡が開始される。このイメージは島原・天草の乱によって現実的なものとなり、排耶書を通じてキリシタンの伝承に大きな影響を与えたのではないだろうか。

(38) 前掲拙稿「津波に沈む島の伝承―兄妹始祖神話の比較民俗学的研究―」(竹田 巨編『民俗学の進展と課題』所収、国書刊行会、平成二年一月五〇七頁―五二七頁)

(39) 「天地始之事」、三八八頁―三八九頁

(40) 「天地始之事」、三八六頁

(41) 川村邦光「浦上四番崩れをめぐって」(平成五年度、国際日本文化研究センターにおける口頭発表、研究課題日本人はどのようキリスト教を受容したか、代表山折哲雄)、潜伏キリシタンの農民が南島文化に連なる人々であり、海上世界の観念や豊穡の世界としての「世」の観念を根底に持っていること、さらに「三毛作」を可能とする新しい稲とその耕作形態を南方から持ち込んだと川村は考えている。川村のキリシタン農民の豊穡観についての「現実的な」解釈は非常に独創的である。

(42) これらのキリシタンは決定的に異なる点を持っていた。潜伏キリシタンは歴史的に見れば、宗教・信仰の自由を承認せざるを得ない時代へと移行しつつある時期に生きていた。それも村落や親族集団・家族などの信仰ではなく、個人の信仰が認められる時代への移行期である。またその社会も、武士団のような上下の秩序よりも、「家」相互のフラットな関係の求められる社会であった。終末論もそのような社会的変化を背景として、意味が変化してきたと考えられるのである。

(43) ラス・カサスについては、染田秀藤「ラス・カサス伝―新世界の異端審問者―」(岩波書店、一九九〇年九月)、また、ラス・カサス「インディアスの破壊についての簡潔な報告」(岩波書店、一九七六年六月)を参照、植民地におけるヨーロッパ人の非人道的な活動を糾弾し続けた。

(44) キリシタンへの探索と弾圧は何度か繰り返されるが、処罰に至る事件は減少する。文化年間に天草キリシタンの存在が明らかになったときも、幕府は「異宗一件」として処理し、処罰は避けられた。

(45) 注(1)参照、浦上四番崩れでは宣教師の指導もあって、いったん棄教した者も「改心戻し」と称して牢屋に戻る。その結果、明治維新政府によって多くのキリシタンが流刑に処せられる。きっかけとなったのは、葬式に僧侶を呼ぶべきではないと

言う指導があったためである。

(46) 宮田 登『ミロク信仰の研究』新訂版（未來社、一九七五年）

(47) 宮田 登『終末観の民俗学』（弘文堂、昭和六二年一月）

(48) 前掲拙著『キリシタンの神話的世界』、自らの信仰を否定しなければ現世を生きることが出来ず、現世を肯定すれば神を否定することになり、後生のパライソを否定することになる。

(49) カーゴ・カルトについては、ピーター・ワースレイ『千年王国と未開社会』（紀伊国屋書店、一九八一年二月）、アメリカ・インディアンのゴースト・ダンスについては、ジェイムズ・ムーニー『ゴースト・ダンス』（文化人類学叢書、紀伊国屋書店、一九八九年二月）、ウイリアム・ヘーガン『アメリカ・インディアン史』（北海道大学図書刊行会、一九八三年五月）など参照。
破滅的な運動になる場合も少なくないが、一時的には植民地社会に秩序の転換が見られる。

追記 本稿は国際日本文化研究センターにおける共同研究に参加する中で気づいたテーマである。筆者は「潜伏キリシタンの終末論」というテーマでつたない発表を行ったが、その際に、共同研究代表者の山折哲雄先生から、島原の乱が終末論のモチーフに連なるという点についての質問を受けたことが、本稿執筆の直接のきっかけである。また、研究会参加者のさまざまな研究には多くの刺激や啓発を受けた。とくに、本文中に触れた川村邦光氏の発表は筆者にとって斬新なものに感じられ、論旨を一部引用させていただいた。ここに記して感謝する。

編集後記

★着任と同時に開始された本紀要第二十二号編集の任務は自ずから今までの体験とは性格を異にしていた。まず小さなファミリーサイズの本学の紀要は手作りの香りがする。それは、中でも編集委員長の機械的でない編集姿勢、原稿、執筆者への細やかな心配りに裏付けられる本学紀要に対する並々な愛着の結晶である。一委員として多くの物を学ばせて戴いた。もつとも編集者はあくまでも影武者であり、何と言つても主なる顔は執筆者である。おしなべてスケジュールは延び延びになったが、回収の際、各執筆者の論文に対する真摯なお顔を拝見させて戴いた。ファミリーサイズの本学紀要にこめられた熱い思いは、翻つて必ずや学生に反映されることを信じるものである。各執筆者の方々に、当方、依頼、回収にあたって不覚にも礼を逸することもあつたかと案ずるが、陳謝と共に御協力に対して厚く御礼申し上げる。(O)

★現代は、あらゆる角度から大学の再編成が試みられている模索の時代である。本学もまた再編成の渦中にある。

その中で本年度もまた専任教員より八編の論稿が寄せられた。諸事情を鑑みると研究活動の時間をひねり出す事自体が困難であつたろうと思われる。いずれも各専門分野での独自の継続的な研究発表であり、本学の研究活動の充実ぶりがうかがえる。この頁を借りて、多忙極める中でのご研鑽に敬意を表したい。

ところで、どのような改編も、その後、研究活動の重視、充実が確保されなければ大学の本来の姿とはいえない。本学では改編にあたり短期大学の課程の中に、小人数のゼミ制を導入した。学生にとつて、専門領域での研究活動に仲間として参与することの意義は図りしれないだろう。本学での紀要の果たす役割も更に大きなものになると思われる。

本号編集にあたっては、Y編集員の指揮、配慮、辛抱強い働きかけ、及びO編集員の尽力に負うところが大きい。記してここに感謝の意を述べたい。(N)

★本号には八篇の論文を収めることができた。文化としての言語から、あるいは、強勢のメカニズムから、日・英語を比較研究している、田島・中岡論文。発達心理学の視野から、山鹿素行を分析し、女子教育の考察をすすめている飯田論文。意味レベルからシンタクスを決定することはできないとして、統辞論に鋭い一石を投じている言語学の奥坊論文。英文学二篇は、鈴木論文が、イギリス新鋭作家の作品に、重荷の特権として生きるマイノリティを浮彫りにし、山田論文が、極限の文学、ベケットを通して実に二千年五百年を刻む西欧思考を微分している。

さらに、国語学の西脇論文が、日蓮「十一通御書」の用語・用法を、真跡のある「遺文」と比較研究し、その真偽の果敢な推論を試み、民俗学の紙谷論文は、島原・天草の乱を誘導したからくりとして終末論を考察し、隠れキリシタンとの見えない糸を露わにする。なぜ、隠れキリシタンか、論者の視線が今を射貫く。

本号編集に払われた、O委員とN委員の惜しみない御尽力に多謝。(Y)

論文執筆者紹介

田島 富美江	………	本	学	教	授
紙谷 威廣	………	本	学	教	授
山田 田津子	………	本	学	教	授
飯田 宮子	………	本	学	助	授
中岡 典子	………	本	学	講	師
鈴木 順子	………	本	学	講	師
西脇 哲夫	………	本	学	講	師
奥坊 光子	………	本	学	講	師

本紀要編集委員

奥坊 光子 & 中岡 典子 & 山田田津子

東京立正女子短期大学紀要 第22号

平成6年6月10日 印刷

平成6年6月20日 発行

編集 東京立正女子短期大学紀要編集委員会
印刷所 株式会社 三協社
〒164 東京都中野区中央4-8-9
TEL 03(3383)7281 (代)

発行所 東京立正女子短期大学
〒166 東京都杉並区堀ノ内2-41-15
TEL 03(3313)5101~3

**THE JOURNAL
OF
TOKYO RISSHO JUNIOR COLLEGE
FOR WOMEN**

No.22

June 1994

CONTENTS

- Culture and Foreign Language Learning
— On the Basis of the Sapia-Whorf Hypothesis TAJIMA, Fumie 1
- A Comparative Study on Stressed and Unstressed Syllables
of English and Japanese: Review of the Problems with
Listening Training for Japanese Students NAKAOKA, Noriko 21
- 'Cram'— Its Syntactic Realizations of θ -roles OKUBOH, Mitsuko 47
- An Approach to Developmental Aspects of YAMAGA, Sokoh (1) IIDA, Miyako 58
- Minorities in Neverland
— Class, Race and Sexuality in "The Buddha
of Suburbia" and "The Swimming Pool Library" SUZUKI, Junko 69
- The Poetics of *Between*
— Samuel Beckett's *The Unnamable*
(Continued from the previous number) YAMADA, Tazuko 109
- The "Eleven Letters" of St. Nichiren
(Continued from the previous number) NISHIWAKI, Tetsuo 123
- An Eschatological View of the Early Christians in Japan KAMIYA, Takehiro 160

**Published by
Tokyo Rishsho Junior College For Women**

TOKYO JAPAN

ISSN 0386-7161